

---

# 正義の味方と秘密結社ときどき魔法少女

B-POP

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

正義の味方と秘密結社ときどき魔法少女

### 【Nコード】

N7971X

### 【作者名】

B - P O P

### 【あらすじ】

高校一年生の帝塚山真弘<sup>てつかやまひろ</sup>は、女子が困っていると後先考えずに飛び出してしまうという、奇妙なトラウマの持ち主なのだが、そのトラウマのせいである夜、「魔法部」なる部活の魔人召喚実験に巻き込まれ、瀕死の重傷を負ってしまう。

「パラ・ダイス」という謎の組織による治療で何とか一命を取り留めた真弘だったが、ついでに施された改造手術のせいで、ほぼ不死身の肉体を与えられてしまう。

## 最強少女

春休みともなればそれまで目白押しだったイベントは形を潜め、頭上をたなびく雲のように穏やかな日々があるだけだった。

だからというわけではないが、高校生活という華々しく、かつ青春の匂いプンプンの言葉に必要以上に期待を寄せてしまったのも無理からぬことだ。

サッカー部でエース？ テニス部でインハイ？ 演劇部で主役なんてのもいいかもしれない。定番だが軽音部でギターなんてのもモテモテ街道まっしぐらな匂いがする。鼻がばかになっっているのだと言われれば否定はできないが、それでも多少はと期待しながら、帝塚山真弘は、今日で二度目となる通学路を自転車<sup>づかやま まじろ</sup>で駆け抜ける。

ただしその目はどこか虚ろで、やる気や活力というものを、異次元にでも置いてきたようだ。そして、事実そうだった。少なくとも希望にあふれたピカピカの一年生というには決定的に何かが足りない。前述の期待に関しても、そうなれば高校生活が楽しくなるかもしれないという想像こそすれ、実行することはないだろうと、どこか冷めた目で見ているのも事実だ。

その資格が、自分にはないとでも言うように。

「くっそ、初日から遅刻とか……何で目覚まし鳴んねんだよ」

目覚まし時計の名誉のために言うなら、ちゃんと鳴った。ただ、恐ろしく低血圧かつ寝起きの悪い真弘が、殴りつけるように止めたのを覚えていないだけだ。

中学の三年間を同じように遅刻と戦い続けた真弘だったのだが、高校に行ったらちゃんと朝は早起きしてゆっくり登校しよう、などと考えていたのは遠い昔のことだ。

悪いのは、さまざまな部活でヒーローとして活躍し、モテモテ街道爆走まっしぐらな自分の姿を夜も遅くまで妄想していた真弘自信なのだが、思い出すと死にそうになるのでそれはあえて考えない。

着なれない詰襟の制服に違和感を覚えながら、もう他の生徒の姿など見えない県道をひた走る。

田舎特有の弛緩した空気が漂っているのは、背の高い建物のない開けた空と、土地のほとんどを占拠する田んぼや畑のせいだ。これが都会ならスクールバスなりなんなりがあるのだろうが、ド田舎にはそんなものはない。あるのは赤字ローカルで、年寄りの通院ぐらいにしか使われない市営バス程度だ。

「あつたところでこの時間じゃ乗れねえけどな」

そんなことをぼやきながら、通学だけで鍛え上げた脚力に任せて走っていると、

「だから、俺あ確かにひいたんだって、信じてくれよ！」

怒声とも悲鳴ともつかない声がした。

何とはなしに声のした方に注意を向けると、そこにはフロント部分が大破した二トントラックがレッカー車につり上げられていた。すぐ隣では、何やらオーバーアクションの男が必死に喚いている。

近くに止められたカブの荷台で、警官が事故の書類を書いている。「だから、飛び出してきた自転車ひいちゃったんだって！ほんとだつてほらここ！」

「はいはい。じゃあそのトラックにひかれた自転車どこよ？ 自走できないぐらいトラック大破して、相手の人が無事なわけないでしょ？ 見間違え」

「んなわけあるかよ！」「わかったから」「聞いてくれよ！ 俺は、俺は」「あんまりうるさいと公務執行妨害で云々」

何やら意味のわからないやり取りだったが、ちよつとラリったドライバーが幻覚でも見て事故ったのだらうと、真弘は再び落ちた速度を取り戻すべくペダルを踏む。

「こええ時代だな。つと、こんなことしてるひまねえわ」

時間はあと十分。 間に合うかどうかの瀬戸際だ。

思いつきり立ちこぎで体重をかけると、数年来の付き合いになるママチャリがぐつと加速する。 一路、新たな青春のステージへと向

かつて。夢も希望も、そしてちょっとだけ思春期まみれの欲望も、全てを自転車の前かごに乗せて。

信号なんてものと縁のない田舎道のおかげで、なんとかぎりぎりで予鈴がなる直前には正門の姿を拝むことができた。

できたのだが、問題はその門だ。

いや、門自体は普通だった。普通どころかさすがは私立ともいべき豪華さで、入試の時は校舎と調和した純洋風建築を見て心躍るものもあつた。そこは問題ではない。

その前に集まっている十数名ほどの面々。

ぶおんぶおんぶんぶん……ぶううん

昭和の香りが色濃く残ったような、一体何のメリットがあるんだと突っ込まざるを得ないほどに巨大なフロントカウルにリアシート。そこまで高いと脇がつるだろうというようなウルトラチョッパードル。そして極めつけは、そこにまたがつている、これまた昭和の匂いしかない古式ゆかしき伝統的ヤンキーの方々。

「おら、出てこいや!」「出せつつってんだろ」「誰のおかげで俺らこんななつてつとおもってんだあくん」「おらチビ、お・か・す・ぞ!」

知能指数の低さをひけらかすような罵声を門の向こうに浴びせながら、無駄にアクセルを吹かしては下品にげらげらと笑う様は直視に堪えないが、残念なことに直視しなければ正門をくぐれそうになり。

「あゝ、見えねえ見えねえ。俺の晴れの日になんとも見たら目が腐る」

極力斜めに視線を逃がしながら、草食小動物の動きで横をすり抜けるようにして門を目指す。

「おい! てめえ満貫寺のもんか?」

聞こえないふり聞こえないふり。

「おい! こ・ろ・す・ぞ」

身をかがめて視線を合わせない。サファリパークの要領だ。野生

では目が合うことイコール戦闘開始を意味する。

「おい！ お前だよ、おまえ！」

残念なことに、肩を掴まれた。どうやら逃がしてはもらえないらしい。

「ああ、ダメか」

これから始まる華々しい高校生活の初手から、ヤンキー漫画のようになってしまった。そんなことを思いながら溜息を一つ。

「シカトくれてんじゃねーぞ？ ああん？ お前は人質だ、人質。こいつ！」

「人質つて、また漫画みたいなことを」

「うつせえおら！ こいつ半殺しにされなくなかったら住吉の野郎だせや！」

どうやら真弘の意見はオートでスルーされる仕様になっているらしい。力任せにヤンキーズの先頭に引つ張り出された真弘は、背中 で自転車の倒れる音を聞きながら、同時にチャイムも聞いた。

この時点では遅刻確定。あと五分程度で自分が解放されると考えるほど、真弘は世間知らずではないつもりだ。

がつくりとうなだれるが、どうやら事態はまだまだ序の口のようにだ。襟首を力任せに掴まれたまま、閉じられた鉄製の門に押し付けられる。

目の前には体育教師の一人や二人ぐらいは仁王立ちしていて、悪のヤンキー軍団に対峙しているのだろう。そんな真弘の期待に満ちた想像は、しかしあっけなくも打ち砕かれた。しかも、真弘にとつては最悪の形で。

そこにいたのは、セーラー服に身を包んだ女子生徒が一人。

（何でよりにもよってここで女子なんだよ！ 勘弁してくれよ、アシだけは）

本人にしかわからない理由で苦悶する真弘だが、もちろんそんな個人的な事情が考慮されるはずもない。

少女はまっすぐな瞳で集団を見据えている。が、腕組みをして精

いっぱい虚勢を張ったところで、カバーしきれないほどにボディはコンパクト。小学校高学年でも通りそうなほどだ。顔も同じく幼い。辛うじて満貫寺の制服から高校生なのだろうと想像できたが、それがないければ完璧にアウトだ。

そんな少女が、少々演技くさい鼻息を漏らして、口を開いた。

「それはうちの生徒だね。手を出すことは許さないよ、悪人」

不遜。そんな言葉がしつくりくるような物言いは実に凜としていて、幼さの残る声色でもちゃんと迫力があつた。まっすぐな、意志を感じる口調だ。

「はゝあ？ 悪人はどっちだっつー話だろ。いーから住吉出せつつてんだろ？」

それもヤンキーには感じられないらしく、先ほどまでの絡みつくような挑発口調は相変わらずだ。むしろ、舐め切つたような態度に拍車がかかつたほどだ。

「事情はよくわからないけれど、その要求に応じることはできないよ」

見た目のかわいらしさとに反した、ボーイッシュな口調が何故か妙に似合っているのは、膝下までであるような黒髪ツインテールとのアンバランスさが絶妙だからだろう。妙な魅力を感じる。ロリコンじゃなかったのにな、なんてぼんやり考えていると、背後からもうくつかの罵声が上がる。

「俺らだつてガキのつかいじゃねーんだよ」「メンツつぶされた仲間分、きつちりかえさねえとなんだよ」「人のツレ病院送りにしてただで済むわけねーだろ」

ここでようやく、こいつらがいる理由に想像が追いつく。要するに仕返し、彼らの言葉で言うところのお礼参りに来たのだ。そんなところにノコノコ登校してきた自分の運のなさを呪うほかないと思ひながら、さつさと件の『住吉』なる人物が出てきてくれることを祈ってみる。

「神様なんか信じてねえけどな」

「おらあ！ さつさとしねえと、潰されたチームの分こいつに痛い目見てもらうぞ！」

「え？ チーム一個潰れたの？」

「とんでもない言葉だったので、思わず反応してしまう。」

「そうだよ。潰されたんだよ。全滅だぞ全滅。あのくそ住吉のせいだよ。兄弟分の『狩流覇血悪』がだぞ。だーら、俺ら『狩流墓那荒』がきつちりお返しは当たり前だろうが！」

どんな当たり前だと突っ込むよりも、真弘は脳内では百回以上チーム名に突っ込みを入れまくって、なお込上げる笑いをこらえるのに必死で、うっかりコメントのタイミングを逃してしまう。

「だからおら！ 住吉を」

「うちの生徒に、手を出すのは」

ツインテールの少女が、気づけば目の前まで近づいてきていた。もうほとんど散り果てた桜の花びらが、その時だけは彼女を演出するかのように風に舞いあがる。少々時期外れな華吹雪の薄桃色の中を、少女はゆっくりとした動作で歩み寄る。

無表情に。ただ、何かの意思をしっかりと瞳にともして。

「許さないよ。悪党」

その姿に、気づけば真弘は口を動かしていた。無意識のうちに『発症』したわけだ。

「ば、やめろって。早く逃げるか、先生呼んでくるとかしろって」  
ここで男気たつぷりに盾になったり、啖呵の一つもき切ばヤンキー漫画というある種の青春物語も始まるのかもしれないが、そんな根性の持ち合わせはない。

ただ、それとは別系統でうごめく『ソレ』は、死んだ魚のような眼をした真弘の背中を、全力で突き飛ばしていた。

「ここは、なんとかすすから。いや、できるか？ いやそうじゃない、とにかくだな、あゝもう！ かかってこいやこの」

膝が笑っているくせに、意志に反して適当な男の襟首に向かって手が伸びる。

意志に反して。

（あゝもー、何でこうなるかな。わが身の不幸を呪うわ）

大胆な行動とは裏腹に冷静な真弘の思考。まるで、思考と言動が別人のように。

が、さらに意外な一言に、ぴたりと手が止まる。

「大丈夫だよ」

そう言つて少女は表情一つ変えずに小さく頷くと、鉄製の門に手をかけた。

おかしいことに気づくべきだったのだ。

こんな事態になつてまで教師の一人もこの場に現れていないことも、余裕を感じる少女の一挙手一投足も、不意に誰かが後ろで呟いた「あれ？ この女もしかして会長じゃね？」という謎の言葉も。あとから考えれば全てはヒントだったのだ。

真弘を含めた一同が、あるものはからかい混じりに、あるものは呆然と、そしてあるものは恐怖に顔をひきつらせて見つめる先で、少女の手の中の鉄の門が、

ミキッ

音を立ててひしゃげる。

まるで紙でも握りつぶすように軽い動作だが、効果は絶大。ギリギリと歪みながら、校門が引き開けられる。

少女が力を込めているような形跡は見られない。

ただ、レールの上を動くときの音が重々しい。

「お帰り願うよ」

「や、やんのかこらあ！」

あっけにとられ、完璧に吞まれたヤンキーだったが、どうやら最後の最後でプライドだけは手放さなかったようだ。女子一人に十何人から取り囲むそれをプライドと呼ぶのものはばかられるが、すぐそばで見っていた真弘はそこを責める気にはなれなかった。

そして、こうも思った。

「プライドになんて、すがらなきゃよかったのにな」

勝負は一瞬。瞬殺とはこのことのためにあつた言葉だといつても、今の真弘は信じる。

「化けもん……」

その表現は決して誇張でもなく、いささかの語弊もない。むしろ過小評価だとさえ真弘は思っている。目の前の出来事は時系列に把握するのが困難なほどだ。

強いて言うなら「ほぼ全員のヤンキー」が「同時」に「宙を舞った」という表現に尽きた。ちぎっては投げ、なんて言葉が現実のもののだとは、この時初めて知った真実だ。

少女の、圧勝だった。

「ね、大丈夫だった」

アホ丸出しで口を半開きにしていた真弘は、少女のその一言に何とか意識を取り戻す。が、どうしても先ほどの壮絶すぎる光景が脳裡に強烈に焼きついて離れない。

子供向けの特撮映画かB級C G映画を見せられているとは思えなかったが、背後からようやく聞こえ始めたゾンビのようなうめき声はリアルすぎる。

「その髪は染めているのか？　だとしたら校則違反だぞ」

狩流墓那荒のメンバーを葬り去った少女は、次のターゲットは前だとばかりに真弘の前に立ちふさがる。先ほどの虐殺風景を見たせいか、その威容に腰が引けてしまう。

「天然、だ。父親が、イギリス人……」

うつかり「らしい」と付け加えてしまいそうになって、慌てて口を閉じる。

後悔したのは、地毛という言葉がとっさに思いつかなかったことに対してではない。生まれる前にとつとといなくなって、今生きているかどうかすら定かではない男を「父親」と表現してしまったことだ。そんなわけのわからない男に与えられた、金髪と青い目のせいで、今までどれだけ苦労させられたことが。

とにかく真弘は、自分の髪の色も目の色も、とことん嫌いだった。

それでも黒く染めないのは、まだどこかで父親を意識しているからなのだが、本人は絶対にそのことを認めようとしらない。

「ならいいんだけど。早くしないと遅刻だよ。それとも僕の前で遅刻して、お仕置きされるか？」

「ああ、僕っ子なんだ」とかどうでもいいことを考えながら、少女の起伏に乏しい体と感情表現に乏しい表情に、うっかり見とれてしまう。

（かわいいんだけど……なんか、不思議な子だな）

再度チャイムが鳴る。

先ほどの予鈴とは違って、これを逃せば遅刻確定だ。

「け、けっこうです！」

本能的な恐怖に駆られて、気づけば全力で走っていた。

走りながら頭をよぎった想像に、背筋を震えあがらせながら。

（もしかして俺の高校生活って、初っ端からバッドエンドルート、とか？）

これがクイズ番組だったらピカピカの電飾とともにファンファーレが鳴り響くところなのだが、それは真弘のあずかり知ったところではない。

## 最凶少女

結局、真弘はチャイムが鳴り終わるまでに教室に入ることはできなかったが、ラッキーなことに遅刻にはならなかった。聞けば、新学期開始のオリエンテーションがあるとかで、教室からぞろぞろと出てくるクラスメイトと合流することにまんまと成功した。

「初日から遅刻とか、高校デビュー目指しちゃったり目指さなかったり今日から俺は？」

妙なテンションでにやにやと笑っているのは、入学式のとくに席が隣になったから、という理由でちょこっとだけ話した富田宗司だ。ほぼ初対面なのに妙になれなれしかったが、同じ中学から進学した友人がほとんどいない真弘には、それが救いだった。

「つても、俺らはエスカレ組だから、初日って感じしないさね」

真弘が通うことになった満貫寺高校は小中高から大学まで一貫の学園で、エスカレーター式に進学するものがほとんどという学校だ。ここでいう『エスカレ組』というのはエスカレーター式に進学する者のことで、全生徒の八割ほどを占めている。

外部からの刺激のない生活は堕落を招く、とか何とかいう理事長の意志で、進学の際にはそれなりに試験を実施し、基準に達しないものは問答無用で追い出されるという何とも過酷なシステムだ。無論、付属への進学は外部のそれよりも随分甘くなっているのだが、逆を言えばそれなりの成績でありさえすればきちんと外部からでも入学できる、ということでもある。

というわけで、真弘は晴れて普通の公立高校から満貫寺高校への入学を果たした、というわけだ。志望理由は簡単。女子の制服が可愛かったからだが、決して口にはしない。してはならない。

ちなみに、受験直前は栄養ドリンクを飲みながら死ぬほど勉強をしたのだが、それでもギリギリ及第点というのが悲しいところだった。

「なんかな、変なのに捕まってな」

理由はそれだけではなく、むしろ自分の寝坊なのだが見苦しいまでの言い訳だ。

「ふうん。うちは自由度が高いぶん変なものも多いかな。すぐに慣れるさ」

あっけらかんとした宗司のアドバイスだったが、思い出してぞつとした。

「あんなもん、慣れたくねえな」

鉄の門がひしゃげる光景など、夢の中に押し込めてしまいたい。悪夢だが。

「なんだ？ よっぱどのもん見たさ？ ってか、外部から来たんなら……最低でも四人はびつくり人間が見られるさ」

「四人？ なんだよその明確な数字は？」

「うちの学校の人間なら絶対この数字にピンとくんのさ。俺なんかは小学校の時から付き合いなわけだけど、今だにファーストコンタクトは夢に見てうなされるさね」

「それ、ワーストコンタクトなんじゃねえのか？」

「うまいこと言っさねえ。ま、お楽しみお楽しみ。満貫寺名物の三王様さ」

けらけらと笑う。本当によく笑うやつだと半ば感心しつつ、隣を歩く女子の顔をひとしきりチェックしている間に体育館に到着する。やはりこの入学は成功であったと、つくづく思い知る。

一見すると普通のセーラー服なのだが、要所要所がきつちりと抑えられていて申し分ない。袖口のワンポイントに襟のカットもシャツの裾のカットも、よく見ればチェックの柄が入っているスカートも、

「合格」

「何がさ？ 顔面が崩壊しかけてるさ」

「うっせえ、余計な御世話だ」

「ねえねえ何の話？ 富田の友達ー？ 名前なんての？ 私は千里

山瞳よろしくにゃー」

話し方のイメージそのまんまの、快活そうなショートカット。くりんとしたまん丸い目は、覗きこめば元気印のハンコが押してありそうなほどだ。

先ほどの、黒髪ツインテールとは対照的な……と思ったところで再び身震いがしてきたので、勢いよく頭を振って恐怖の記憶を追いつ出す。

「帝塚山、真弘、です」

「ですなんてつけんでいーさ。それよか何だよ、千里眼？　大事な男同士の時間なのに」

「えー。汗臭い男くさいどぶくさい。よろしくないにやあ、青春してにやいよ？　あ、ちなみに千里眼ってのは私のあだ名ね。苗字が千里で名前が目だから」

どぶくさいには同意できなかったが、後半には激しく同意した真弘はとりあえず首を縦に振っておく。

「お、お前は俺との友情にどぶの臭いを感じてるさ？　百年の友情も冷めるさ」

「いや、まだ一日未満だし」

「大事なのは時間じゃないさ」

声に出して三人で笑うが、さほど目立ってしまうことはなかった。まだ集合したばかりの生徒たちは、エスカレーター組が大半を占めるだけあって、高校一年初日だというのに程良いだらけ具合だ。さざ波のようなざわめきに埋め尽くされている。

『ん、うんっ！』

咳払い一つ。

たったそれだけで、会場が水を打ったように静まり返る。

物音一つない、時間まで静止したような静寂に、微かなハウリンググノイズが染みわたる。

それまで休み時間のように弛緩しきっていた生徒たちの顔に、心なしか緊張感が添加されているように見受けられる。それは、宗司

や瞳も例外ではなく、むしろ今までふざけ合っていたので、それが際立っていたいる。

『おはようございます。それではオリエンテーションを開始します。まずは校長先生のご挨拶から』

それ以上に、真弘は度肝を抜かれて言葉を失った。

ノーモーションのパンチを不意打ちで叩き込まれたような衝撃が、脳髓を直撃して意識を空のかなたに吹っ飛ばしてしまう。

壇上でマイクから離れて一礼する、黒髪ツインテールのコンパクトボディ。

桜の花びらに包まれた、感情表現の乏しい表情。

鉄の門をひしゃげさせた、華奢で小さな手。

記憶の中の光景と、目の前の人物の区別がつかなくなる。果たして今自分が見ているのは、現実か記憶か。

「おい帝塚山、どうしたさ？ いきなりぼつとして」

押し殺した、蚊の鳴くような声で宗司が訪ねてくるが、うまく言葉にできそうにない真弘は少しだけ考えて首を横に振るにとどめた。「言っとくけど、あれがびっくり人間その一、生徒会長。別命、破壊王」

納得、だった。

「あー、修学院さんにそんなこと言ったらぶっ飛ばされるんだー」

「や、やめるさ。冗談でもそんなこと言っとトラウマさね」

口調こそおどけてはいるものの、その目はマジだ。

そのあとと肅々と会話は進行され、編入組のためとしか思えないような各種システムの説明や施設利用における注意点、その他学生生活における当たり前ともいえるような諸注意を聞き流している間も、真弘の視線はただ一点に釘づけたった。

教師の脇にいる数名の生徒のうちの一人。

（生徒会長。破壊王、か。修学院……下の名前、何なんだろな？）  
真弘のオリエンテーションの記憶は、黒髪ツインテールだけだった。

つつがなく終了したオリエンテーションだったが、真弘が感じたのはやはり違和感としか言いようがなかった。いくらしよっぱなの集会とは言え、体育館が静かすぎた。

そして何よりも、ピリピリとした緊張感のようなものが絶えず滞留していたのも、今までに感じたことのない感覚だった。少なくとも真弘が通っていた公立の中学では、ああいうイベント事は終始ざわめきが収まらないまま進行したはずだ。強いて言うなら卒業式に近い気もしたが、また別の、圧迫感ともいえる張りつめた空気だった。

引き続き始まったのは、上級生による部活紹介兼勧誘のパフォーマンスだったのだが、こちらは終始和やかに進行している。今は舞台の上で合唱部が歌を歌っている。

「いろんな部活があるんだな」

「ん？ ああ、それがここのウリさね。部活動に規制なし」

「なんだよそれ？」

「あれれ？ 帝塚山……言いにくいな……君は、うちのことあんまり知らないのかにや？」

「すまん、めんどい苗字で。知らないっていうか、部活の事までは調べてないし」

というより、真弘がこの学校を選んだのは女子の制服のためのみなので、学校の実情などについては全くと言っていいほど知識がない。入試に面接があればアウトだった。

もちろん「女子の制服目当てです」と、知り合った初日の女子に言えるほどの勇者でもない真弘は「受験勉強必死だったから」とお茶を濁すのみにとどめた。幸いに疑われた様子もなく、ほっと胸をなでおろす。

もつと言っなら、学校なんてどこでもよかったので、その程度のことか決め手になったというのもあるのだが、それはさておいた。考えたくもない。

「へー。けっこうそれ目当ての子とか多いのに、珍しいにやあ」

「そんなに自由なのか？」

「自由っていうか、はつきり言っただけわからんクラブの宝庫、珍集団が跳梁跋扈さ」

たかだか高校生の部活でそれは大袈裟だろうとたかをくくって愛想笑いをしていた真弘だったが、果たしてその発言はJAROも真つ青な勢いで真実一色だった。嘘も大げさも紛らわしいもない。

最初に自分の耳を疑ったのは『中華部』というネーミングだった。何でも、究極の中華料理を目指して日々料理の研究の身に生きるらしい。『料理』ではなく『中華』であることの意義を懇々と説く姿には狂気すら覚えた。

まさにそれが皮切りとなって、へんてこなクラブが紹介され始めた。というか、オンパレードだった。

畜産から稲作までを幅広くカバーして研究する『第一次産業部』に始まり、アニメやゲームに出てくる科学を真剣に実現させる『空想科学部』、ただ猫を愛でるだけの『猫部』、何を紹介するでもなくただビールをまいただけの部活、なんていうのもあった。というか、『地下組織・大衆食堂兎亭』って何だ？

「地表に出てきたらもう地下組織じゃないだろ」

そんな、漫画の世界に迷い込んだような、わけのわからない部活のラッシュに意識が朦朧とし始めた真弘にとどめを刺したのは、くしくも部活紹介最後の組織だった。

「お、くるさ。わが校最強の問題児。真弘、よく見るさ。あれがびつくり人間二号さ」

いつの間にか呼び方が「真弘」になっている宗司との距離感が、何故か安心できた。現実離れしすぎるイベントに、手近な現実味が心地よい。

「ってか、俺には何が何やらだ……なんだよ、地下組織、って」

「ほらほら始まるよ。天王寺さんのパフォーマンスだ。逃げる用意しにゃきゃだ」

言って、瞳はそれまでべったりと尻で座っていたのを、中腰に構え直した。見ると、周囲の大半の生徒が同じように腰を浮かせたりしてフォームを変えている。共通点は、すぐに動き出せるポーズ、ということだ。

この時点で尻を床につけているのは、真弘をはじめとした編入組ばかりだが、勿論そんなことを知る由もない。そんな、完璧に状況において行かれた真弘がきよんとしていると、舞台上に一人の女生徒が、実に堂々とした足どりで歩み出た。

遠目に見てもわかる、とんでもない美人。

日本人離れたブロンドの髪に少々切れ長な瞳。顔だけは間違いなく超がつく美人だ。

しかも、冬服に包まれていてもはつきり分かるほどに凹凸のあるボディはハエ取り紙のように真弘の視線をべったりと吸いつけて離さない。とくに胸元のボリウムが、けしからんことに実にけしからん。

入学して、よかった。

初日にして心の声がそう絶叫した真弘は、もちろんこの僅か三分後にその声をなかったことにしたくなるなどとは思っていない。知らぬが仏だ。

『魔法部、部長の天王寺だ』

まほうぶ？ うまく漢字変換できなかった真弘が頭上にはてなマークを浮かべていると、壇上の美人、天王寺というらしい人物の次の一言はさながらプロパガンダ演説のように始まった。

『充分に発達した科学は魔法と区別がつかない、というが、なら果たして、魔法から始めれば十分に発達した科学を手に入れたと同義なのではないだろうか？』

間違いない。こいつはどんな美人の皮を被っていてもびっくり人間の匂いがする。いや、びっくり人間の匂いしかない、そう思った真弘は隣にいる宗司や瞳にならって中腰の体制をとる。

「お、さすがは真弘。呑み込みが早いさ」

「うんうん、そうしとくのがお勧めだよ」

『シェークスピアに曰く、知識とは天に飛翔するための翼である。魔法の探究に興味がありなら、ぜひ魔法部へ』

何とも言いようのない沈黙が澱のように堆積している。はつきり言つと、ネタが滑った芸人の舞台のようだったが、お構いなしにクラブ紹介は進む。

『では、現時点での魔法部の集大成をお見せしよう。この私が解読した魔方阵と、電気エネルギーを触媒に、妖精を召喚する召喚魔法だ』

高々と掲げられた手には、何やら模様の書かれた紙切れと電源につながっているらしい電極が握られている。

完璧に電波だ。電波以外の何物でもない。これが電波でなければこの世に電波系など存在しない。そう確信を持った真弘だったが、何故か周囲は固唾をのんで舞台上を見つめて、じりじりと移動を始めている。

『出でよ、妖精さん！』

ギシャアアアアアアああああああああああああ

「な、な、な」

後半は生徒の絶叫に置き換わり、まるで出来レースのようにすべての生徒が一目散に出口を目指して全力でダッシュする。

「うははは、さっすがびっくり人間、期待を裏切らないさ。まさか魔族召喚とは」

「すごいにああ、高校進学で磨きがかかってるにやあ、魔女王にも」「ちよ、ちよ、ちよ、まてまてまて！ あれ、あれ、あの、あれ」

魔女王？ また聞き慣れない単語だが、今問題なのは舞台上の天王寺が電極を合わせてスパークさせた瞬間に現れた、謎の黒い生物だ。聞くに堪えない絶叫を放ちながらのたうち回ったそいつは、サイズこそ人間とさほど変わらないが、本能的な嫌悪感をもよおすデザインをしている。宗司が魔族なんて言うのも領けてしまうキモさだ。

津波のような人の波にのまれながら、完璧に逃げるタイミングを失った真弘が舞台上を見つめている。何も無い虚空から現れたそいつは、最初こそ液体と固体の中間のような不安定な輪郭だったが、見る見るうちに実態を獲得してゆく。

最終的に、トカゲを二足歩行させてタコとナマコとカタツムリをかけ合わせたような、気持ち悪い形になったところで、

どこんっ！

消滅する。

視界の中で揺れているのは、黒髪ツインテール。

心奪われるほどに綺麗なフォームの、ハイキック。

『では、これにてオリエンテーションを終了します。この後はそれぞれのクラスに戻って次の指示を待ってください。お疲れさまでした』

振り抜いた脚には、わずかに黒い霧のようなものがまとわりついていたようだが、それも風に吹かれた様に消え失せる。

生徒会長の指示に、それまでパニック（半分はそれを装って事態を楽しんでいただけなのだが）だった生徒たちは一気に平静を取り戻し、来た時と同様のだらけた足取りで各々のクラスを目指して歩き始める。中には露骨に「あゝ、もうちょい派手になるかと思ったけど、今回は会長早かったなあ」なんて感想を、笑いながら言い合っている者もいる。

片や、床に座ったまま目をむいて時を止められている者もちろほらと確認できたが、例外なく編入組なのは言うまでもない。

「ってわけで、まあまだ半分だけど、これが満貫寺って学校さ」

まだ、半分？

「っていつても、強烈なほう半分だから安心して大丈夫かにゃ？」

真弘がその可愛さのために目標にまでした制服のスカートが、目の前でひらりと揺れる。うっかり太ももの際どころまで見えてしまつて、サービスショット全開のシーンだというのに、心を抜かれた真弘はそれどころではない。

舞台上で不服そうに腕組みをしている超絶美人と、その隣で何事もなかったように機材の片づけを始めている黒髪ツインテール。

ぽんと肩に手が置かれ、命からがらといった感じで振り向いた真弘の顔はゾンビのようだった。とは、のちに宗司の語るところだった。

「「ようこそ、満貫寺高校へ」にや」

はつきりと確認した。

間違えた、と。何を、とは敢えて言わないあたりにヘタレっぷりを感じる。

## 最悪組合せ

怒涛のごとくすぎさった高校生活初日。時計の針が九時に差し掛かったあたりで、今日がまだ三時間も残っていることに、真弘はある種の感動を覚えていた。

あまりに濃密過ぎた一日は、まだ今日であることが信じられないほどだ。

「つつか、なんでこの時間にわざわざ牛乳の買い忘れ思い出すんだよ」

母親から問答無用で頼まれたパシリだが、断れば無慈悲な制裁が待っているので首はたてにしか動かない。ヒエラルキーの底辺にいるものの悲しさを、ただただ噛みしめる。

街灯の少ない田舎の道、ついでとばかりに夜のサイクリングをすることにした真弘はそんなことをこぼしてみる。

今朝の通学の時にも通った田舎臭さ満載の県道を、のんびりとしたペースで駆け抜ける。朝の事故の痕跡だろうか、痛々しくひん曲がった『動物注意』の交通標識を横目に見ながら。

いつもなら近所の公園でもぐるりと回って帰宅するはずなのに、なぜかこの日の真弘は朝と同じコース、学校へと向かう道を走っていた。

原因は、今日の出会いのせいなのは間違いなさそうだ。

「なんなんだろな、あれ……」

生きてきた中でもトップクラスの美少女と出会ったと思えば、片や破壊王、片や魔女王ときた。しかもどちらも折り紙つきのびっくり人間というのだから、良くも悪くも興奮を抑えきれない。今もアドレナリンは絶賛分泌中だ。ついでに言うなら思春期ホルモンも。そんなものがあるのかどうかは別として。

何に期待するのは別として、初めてサファリパークで生の肉食動物を見た子供のテンションが上がるのと同じ原理だ。

もちろん、そんな好奇心にも似た気持ち、後の後悔の種になるなどとは想像だにしないわけだが。

『あくまでも偶然』を装うために二度ほど曲がる必要のない角を曲がって遠回りしている。誰も見ちゃいないのに、ご苦勞なことである。

「くそお、自販機撤去されてたせいでコーヒー買えなかったし。今朝はあつたのに」

脳内で描いた学校までのルートには、自販機で買いものというのが含まれていたのだが、どういうわけかつい今朝まであったはずのそれは撤去されており、土台と思しきコンクリートブロックだけが街灯に照らされていた。

前かごに牛乳だけを積んだ自転車が正門前に到着したのは、午後十時ちょうど。

興奮した面持ちの真弘が見つめる前で、夜の校舎はいくらかの明かりを外にこぼしながらも静かにたたずんでいる。昼間の喧騒がまるで想像もできない、静謐な場所。

墓場のようなという喩も脳裏をよぎったが、頭を振ってかき消す。

学校と死のイメージの直結に、虫唾が走る。

「まだ灯り点いてんのな。しかも、別館じゃないのか？」

薄っすらと残る日中の記憶を掘り返すと、教室で配られた校内地図の存在にたどり着く。田舎という立地条件を最大限に生かした、無駄に広い敷地の中には普通の公立高校や、私立でも都会の学校にはないような施設がそこかしこに点在していた。そのうちの一つが、校舎一つが丸々部室のために提供されている別館。

『部室城』の俗称の方が生徒に浸透している、満貫寺屈指の魔窟とのことだ。

真弘のいい加減な記憶に間違いがなければ、いくつかの窓に明かりがともっているのはその『部室城』のはずだ。

「まだ部活やってるやつがいるのかよ。まじでか？」

宗司の説明によると、「高校の方は中学よりもさらに部活の自由

度が上がってて、そこに命かけて人生棒に振るやつまでいるって話さ。住んでるやつまでいるって話さ」ということだ。

「まさかな」

しかし興味は尽きない。

中でもその時の真弘の頭の中を埋めつくしたのは他でもない、オリエンテーションのトリを務めた超絶ナイスバディの美少女。思い出すのは豊かすぎるほどにたわわに実った、二つの水蜜桃。

何故か想像の中では記憶通りの制服ではなく、布地の極端に少ない水着姿で両腕に挟み込んだ谷間がグランドキヤニオンのごとく

「違う違う違う！ 何やってんだ、違う、違うしっ！ あつぶねえ、俺」

存在しない誰かに向かって必死に弁解しながら頭をぶんぶんふる姿は、もはや変質者以外の何物でもない。

おかげで気がついた。気が付いて、心臓が止まるかと思った。

途方に暮れたように正門前に立ち尽くす、一人の生徒。生徒だとはわかったのは簡単で、満貫寺の制服を着ていたからだ。傍らの自転車はママチャリではなく、新聞配達や派出所のお巡りさんが使うような、とにかく頑丈そうな一品だった。

少なくとも、真弘がここに来た時にはいなかったはずなのだが、いつ現れたのかさえ定かではない。まるで幽霊のように何の前触れもなく現れた姿は、幽霊さながらに呆然と校舎を見上げている。そして、溜息。

「はあ……間に合わなかった。ま、今日のうちに来られたからよしとしますか」

意味不明な言動を残した男子生徒は、眠そうな目をそのままにくるりと踵を返して、顔色一つ変えずに歩きだす。途方に暮れていたように見えた表情は、どうやらそういう顔立ちのようだが、それにしてもえらくとぼけた顔立ちである。目なんて、寝起きとは思えないほどの糸目で垂れ目だ。

「また、遅刻記録を伸ばしてしまった」

謎の言動その二を残した男子生徒は、自転車を押しながらその場を立ち去ってしまう。

しばらくは特に何をするでもなく、ただただ遠ざかっていく自転車の反射板だけを見ていたが、不意に我に返った頃にはそれすらも見えなくなっていた。

時計を見て驚いたのだが、自分は五分ほどボケつと突っ立っていたらしい。

「なんだありや？ 遅刻って、このがっこは定時制とかもあんのか？」

とかなんとか、当たり前のことを考えて再び見つめた部室城の明かりに、消えかかっていた興味の炎が先ほどよりも強く燃え上がってしまう。さながら、消えかけの線香花火が燃え上がるように。

「例え悪いな。まあでもいいや、せつかく来たんだしな。高校生なら夜遊びや悪さの一つぐらいは……ちよつとぐらい、なら」

気づけば手は既にちよつとひしゃげた正門にかけられ、よじ登り始めていた。

意気揚々と、コントに出てくるコソ泥のように駆け抜ける姿など、実に楽しそうだ。

そんなだから、校舎の中からその様子を見つめる視線に、真弘が気づくはずもない。

この時の真弘の中にはあったのは、どこかに忘れてきてしまった、高校生らしい期待感だったのかもしれない。本人にその自覚がなかったとしても。

「くだいな、君も。私は自らの研究を他人のために使うつもりはないよ」

そろそろ黄ばみ始めた蛍光灯に照らされているのは、足の踏み場もないほどに散らかりきった、おびたしい数の本。この部屋で床が見えているのは、入口と先ほど口を開いた少女がいる場所とを、飛び石のように結ぶ数か所だけだ。

見事に染められた金髪（もちろん校則違反）にモデル顔負けのボディを持つ、校内トップクラスの有名人。天王寺美緒。それがこの部屋の主の名前だ。

「善悪にかかわらず、ね」

扉の上にかけられた『魔法部』のプレートはまだ真新しく、この部活動が発足間もないことは明らかなのに、室内の惨状は戦前から存在する古参のようだ。

そんな真新しいプレートの下には一人の女子生徒がいる。

「お嬢様のお申し出をここまでむげに断るとは、いい度胸でございますね。士官待遇とまで申しておりますのに」

大人びた口調に落ち着いた声音。が、はつきりそれとわかるほどの刃がその中に含まれているのに、美緒は少々含み笑いを漏らしてしまう。

敵意という名前の刃。

「株式会社パラダイス。まさか実在していたとはね、灯台下暗しだよ。」

「その存在をご存知とは、あなたもさすがといったところでございますね」

ひらりと、フリルのついたスカートが風を孕んで揺れる。よく躡けられているようで、細かな動きの一つ一つが気品を感じさせる。纏っている衣装に負けず劣らず。

「なあに、全てはついでだよ、ついで。興味がわくじゃないか、この世界に本当に『悪の組織』なんてものがあると言われれば。で、メイド君が構成員ということはやはり元締めは彼女だね？」

外見からは想像できない男っぽい物言いだ、凜とした態度で言うものだから妙に似合っている。それが目の前にいるヒラヒラフリルの、メイド服を着た少女とのギャップで際立っている。履いている学校指定スリッパは二人とも真新しい臙脂なので、同じ一年生だ。「お嬢様の慧眼には感服仕切りでございますが、少々危険に過ぎるようでございますね」

メイド服を着た少女、雲雀谷華は静かに一步を踏み出す。それまでの気品ある動作とは違う、緊張感を纏った動作。格闘技や軍隊を連想させる無駄のない動きだ。

「排除するのかい？ 口外しない自信はあるんだがね」

「お約束でございましょう。鳴かぬなら殺してしまえ、でございませう」

「こわいねえ。さすがは悪の組織だ」

とてもそうは見えない不遜な笑みを浮かべながら、美緒は華の一挙手一投足を眺めている。まるで他人事のように、明らかに自分に攻撃を加えようとしている相手を。

「くたばりやがれ、でございます」

踏み抜くような勢いで床を蹴ったにもかかわらず、物音一つしない。ただ、勢いはやはり踏み抜く勢いそのままなので、一足飛びに教室を横切る軌道で華の体は飛び出し、

だんっ！

踏みとどまった。今度は音を立てて床を蹴りつけ、ロケットのような勢いを相殺する。

「おお、気づいたか。さすがに凄いいねえ。悪の秘密組織はだてじゃないようだ」

にやりと口の端をつり上げて、いやらしい笑みを浮かべる美緒。

「なんでございますの？ これは？」

踏みとどまったことに理由などなかった。ただ、この期に及んで諦めとは違う余裕を持っている美緒の態度に、直感としか言いようのない何かを加味した結果、華は急ブレーキをかけた。

室内を警戒しつつも、手近に干されてあった雑巾を指の先にひっかけて部屋の中に放り込む。と、バシッ！ という音を立てて雑巾が弾き飛ばされる。夏のコンビ二で、青い殺虫器に虫がやられる時のような音が、深夜の校舎に響く。

「ありがとう、実験は成功だよ。これが結界というやつか。いやあ、失敗したらどうしようかと肝を冷やしたが杞憂だったようだ」

あらかじめ部室を囲むようにして四方に配置された、美緒特性の結果発生器が淡い光を放って力の発動を示している。

「まあ、小さい上に電池式で稼働時間もたかが知れているが、初稼働としては十分だ」

「脱帽でございますね。まさかこんなものまで実在している……いや、実在せしめたとは。やはり手に入れるべき逸材、ということでございますでしょうか」

「買い被りすぎだよ。さあ、諦めて帰りたまえ。それとも実験台として手伝ってもらえるのかな？」

魔王。そんな二つ名がまさに相応しい、不遜なくせに蠱惑的な笑みでヒラヒラフリルのメイド服を見つめる。ただし、その瞳は一点の曇りもなくはつきり告げている。

『絶対に信念は曲げない』  
と。

「負けでございます。今日のところは」

「連勝記録が伸びたよ」

誇らしげに胸を張ると、ただでさえボリウム満点の胸元が恐ろしく自己主張をする。

華も決して小さい方ではないどころか、どちらかというときの方が、さすがに美緒と比べるとその差は歴然だ。腹の底に生まれたい理不尽な敗北感を飲み下しながら、個人的な恨みを込めた視線を投げつける。さすがの結界もこれは通さざるを得ない。

「では、メイド君にはいいものを見せてあげよう」

「いいもの？」

そこはかかない不安感に、先ほどとは比べ物にならない勢いで華の本能が警鐘を鳴らしている。今すぐ飛び出して行って止める、とぶん殴つてでもとめろ、と。

「本邦初公開。真正銘召喚魔法だ。可愛い妖精さんが」

一年生である華は、もちろん昼間の惨状を知っている。というか、修学院の反応があと数瞬遅ければあの場に飛び出したいたのは自分

だったのだが、それとて何とかできたかと言われると自信はない。

「ちよつと、あなたそれは」

「いでよ、妖精さ」

きしやあああああああ

「なぜあなたは同じミスを二度も繰り返すのです！　もしかしてあほなのですか？　栄養が乳にばかり行くからこんな残念な脳になるのでございますよ！」

メイドの鏡とも言うべき実に丁寧な口調で吐き出す罵詈雑言の破壊力たるや、既に凶器の域だ。これが健全でM要素を持たない男子だった日には、シヨックに打ちひしがれて数日は立ち直れないところだが、それでも堪えないのが美緒だ。「ありやりや失敗」と頭を掻きながら笑うだけだ。

ちなみに、M要素を持つ男子なら、別の意味で昇天間違いないだ。「シリラスシーンを演じた後だから成功すると思ったが、やはりノリだけでは駄目か」

「当たり前でございます。脳味噌わいてるとしか思えませんわ。ただちに精神科か脳外科、願わくばその両方を受診なさってください！」

「いやはや、弱ったな。医者嫌いなのだよ」

「くれたばれっ！　でございます！」

実に丁寧な罵倒の間に実体化した、悪魔としか形容できない奇妙な生き物は不愉快そうに口を開いて翼を開いた。

きしやあああああああ

耳障りな咆哮が、窓から差し込む月明かりの中をこだまする。

## 最不運人生

昼間であれば絶えることのない喧騒がそこにはない。それだけでも異質に思えるのに、それだけではない、どこか静謐ともいえる雰囲気、否応なく緊張してしまう。

「つつか、こええ」

中庭の草を踏む自分の足音でさえ異世界の音に聞こえるのは、臆病だからではない。と、ヘタレの真弘は自分に言い聞かせながら歩く。思ったよりもずっと静かだ。

「もつと部活の音とか、話し声ぐらいあると思ったのにな」

窓から漏れている消火栓や非常口を示す赤や緑の電灯ですら、今の真弘にはお化け屋敷にありがちな演出のように映っている。言うまでもなく、効果は覲面だ。

昼間を動とするなら、夜の学校はまさに静のそれだ。常に対流する昼間の空気に対して、今この場所には沈殿し、堆積するような静けさがある。

遠くの国道を走る車を背中に聞きながら、ようやく部室城にたどり着いた真弘が中に足を踏み入れると、そこにはほんの少しだが昼間の延長のような空気が流れていた。

「にしても」

廊下を覗き込んだ真弘は顔をしかめ、言葉を選ぶようにもう一度視界を一巡させる。

「きつたねえな」

雑多。そんな言葉ではとてもではないが形容しきれないほどに、中はカオスに満ちた空間だった。造りこそ通常の教室がある本館と変わりはないはずなのだが、同じに見えるのは窓の形ぐらいのものだ。

一体何に使うのか、冷蔵庫やら自転車のフレーム、果てはガソリン式のレシプロエンジンまでが所狭しと行く手を塞いでいる。とて

もではないが、高校の一施設とは思えない。物陰で百鬼夜行が日課になっていてもおかしくない。

足元のゴミともつかない何かを蹴散らしながら、軋む廊下を恐る恐る歩いてゆく。

「あんま怖くないのは、たぶん汚つたないからだな」

まさにその通りで、整然とした廊下であればそれなりの雰囲気もあるのに、両サイドを埋め尽くすゴミの山はコメディくさくて仕方がない。というか、何で高校の部室に夜の街のようなネオン看板があつて、しかも光っているのか。甚だ疑問である。怖いわけがない。「やっぱおつかしいわ、この学校」

明りが灯っていたのは二階以上だったのを思い出して、階段に足をかける。

一体いつから掃除されていないのか想像もつかないほどに汚れ放題の階段には、いくつもの足跡が、あるものはくつきりと、あるものはその上に堆積した新しい埃のせいであつたうすうすらと残されている。理科の地層の授業にでも使えそうだと苦笑しながら、真弘は一番新しい足跡を刻む。そこを狙つたように静寂を引き裂いたのは、

きしゃああああああ

聞き覚えのある、恐怖。

子供のように微笑んでいた真弘の心臓を思い切り驚掴みする。引きつった口元が痙攣するのが不快だ。

「これって、あれ、だよな」

発言の中に、こそあど言葉と呼ばれる指示語が増えたとおつさんと言われているが、そんなことを気にしている場合ではない。今はとにかく、思考を最短で巡らせる必要がある。

その結果掘り起こされたのは、数時間前の記憶。

体育館の舞台上に現れた、謎の存在。宗司は魔族だなんて言っていたが、正体は何であれあんなものが人間の味方のはずがない。

「うっそだろ」

妙に視界が揺れるなと思ったが、膝ががくがくと笑っているせい

だと気がついた時には決心がついていた。

逃げよう。

回れ右をして、今し方自分がつけたばかりの足跡を逆向きにたどって、来た道を寸分たがわずに辿って母親に牛乳を届けるために自転車車で夜の道を爆走して

「……………」

人の声がした。気がした。

足が止まる。

心臓は破裂しそうなほどに拍動しているし、慣れないアドレナリンの放出に手は小刻みに震えっぱなしだ。体が驚くほど暑いのに脳は妙に冷静。奇妙な感覚だった。

そんな、鋭敏になった感覚で一度だけ耳を澄ましてみると、確かに人の声がする。

「……………きましたわ。……………います。きやあ！」

微かながらも、声の中には悲鳴のようなものも混じっている。その合間にも、あの不愉快な生き物と思しき怪音は廊下にこだまし、悪夢の中のような残響を残していく。

逃げるべきだ。

あんな化け物は人間の手に負えるはずもない。魔法部とやらが何かをしでかして、またあれが出てきたのなら、自分には関係がない。全くない。ましてやそれで誰かが巻き込まれたとしても、

「あー！ もう！ なんだよこの感じ、くそっ！ くそっ！」

二度目の回れ右で三百六十度回った真弘が見たのは、月明りの差し込む踊り場の窓。

声が聞こえてくるのは上からで、どうやら移動しているらしいことも分かった。ばたばたという足音も響いている。

逃げるべきなのだ。見上げたところで何かをしようなんて思っていないのは、自分が一番よくわかっている。関わるだけ損なことがあるのは身を持って経験済みだ。むしろ、そんなことだらけなのだ。今朝だって、族から少女を救おうなんて思わなくても、あの生徒

会長だったので問題はなかったのだ。だから今度も同じようなものだ。何せ魔王さまらしい。

今朝の何もできなかった自分に、何もしなかった自分に、精いっぱい言い訳を与える。

「何でだよ、面白くねえな。いちんにちに、二回も」

正義感、なんて立派なものを持ち合わせているとは思わない。持っているはずがない。そんなものがいかに無駄であるかを悟り、自分の手で引き裂いて捨ててきたのだから。

むしろこれは、下品な野次馬根性やおせっかいの延長線ではない。自分にそう言い聞かせてと真弘の足は階段を駆け上がった。二階に踏み込んで左右を確認する。何もいない。声はまだ上の階から聞こえているが、先ほどよりはずっとはつきりと聞こえている。そう遠くはなさそうだ。

埃を巻き上げ、階段を真ん中あたりまで占拠する角材を飛び越え、何故かこんなところに転がっている、ベコベコにへこんで歪んだ金属バットを見つけた時には、考える前に手にしていた。明らかに野球以外の目的で使ったと思いき凹みが、何故か心強い。

踊り場で転びそうになりながら見上げた三階に、影が見えた。

非常灯に照らされた薄ぼんやりとした影が、ゆらりと動いている。息をのみ、唾を飲もうとして口がカラカラなことに気づく。

「きゃあ！　なんでございますの、もう！」

女の声が、最後のスイッチを入れた。

「おらああああ！」

一段飛ばしに駆け上がり、金属バットを振り上げて飛び出したのは、最悪のタイミング。

目の前を、何やらフリフリヒラヒラの女が猛スピードで横切る。目があったが、次の瞬間に女が視線を動かしたので、真弘がそれにならって右を向くと、

きしゃああああああああああああああ

振りあげられている右手。月明りに鈍く輝くのは、刃物にしか見

えないような極太の爪。そしてヌラヌラと唾液に濡れた、牙と思われる何かが本能的な嫌悪感を直撃した。

ただ、そんな感情もすぐに消え失せる。

爪が振り下ろされるのが見えた。

背後から絶叫に近い声が聞こえた。やけに通りのよい、柔らかな声だったのはわかったが、残念なことにその瞬間は言っている内容を理解できなかった。

でたらめに金属バットを振り抜いてみたら、大根のように輪切りになって宙を舞った。

バットを握った、左腕ごと。

恐ろしくスローモーションになった世界で、バットと腕を輪切りにした爪がゆっくりと近づいてくる。ここに至ってようやく、背後から掛けられた声の意味を理解して、納得する。

（『逃げる』って、そりゃそう言うわな、こんな化けもん。ってか、遅いし）

ゆっくりと迫りくる爪が、前髪を掠め、鼻っ面を切り、飛び散った赤い雫に目を奪われている間に、胸に突き刺さった。

（あ、やばい）

そう思った時には、体はコマのように回りながら宙を舞っていた。冷たいリノリウムの床に顔から落ちた時には、すでに意識は大半が闇に包まれていた。

（死ぬのか？）

そう思いながら動かした目玉がとらえたのは、どういうわけか悶え苦しみながら、溶けるようにして崩れ落ちた化け物の姿だった。

「なんだ、俺、やっぱいらなかったんじゃない……あほ、らし」

それが声になったかどうか、真弘にはもう判別できなかった。

（腕、くつつくのかな？）

他人事のようにそう思ったところで、意識が途切れる。

## 最恐少女

「さむっ」

開口一番、漏れたのはその一言だった。寒かった。

自分の体を抱きしめるようにして体をすばませると、露出した肩が手の平に触れる。どころか、二の腕にも腹にも肌と肌との触れ合いの感触がある。

「ん？」

さらに言うなら、この時の真弘は一糸まとわぬ生まれたままの姿。太ももの間に挟まったソレがむずむずと反応し出したので、慌てて思考の方に意識をかき集める。

まだぼやける意識の焦点を必死に合わせて、脳に血を巡らせる。

寝起きの悪い真弘にはありがちなことだが、こうしてしばらく暖気運転をしないと正常な思考ができない。

（ってことは眠っていたのか？）

それにしても、意識の覚醒は早いような気がする。それに、

「どこだここ？ ん？ あれ？ ん？」

見覚えのないその場所は、テレビドラマなんかで見えるような手術室みたいだが、真弘の知るそれと比べてもどこか殺風景な気がした。打ちっぱなしのコンクリートのせいで寒さは三割増しに感じられ、扉は無骨な鉄の扉だ。しかも鍵穴がこちら側を向いているという、監禁仕様。

「つかしいな……がつこにいたはずなんだけどな」

衣服を探して視線を巡らせながら言った自分の言葉に、ドキッと  
する。

夜の学校にいて、そこで何があったのか。

慌てて手首に視線をやっても、そこに腕時計はない。周囲を見回しても時計らしいものはなかった。しかも窓がないので、今が夜なのか昼なのかさえ分からない始末だ。

そして、もつと大事なところに、ようやく視線が行く。

「俺、怪我しなかったか？」

最後の瞬間の記憶では、自分はその化け物に胸を切り裂かれ腕を落とされたはずだ。

飛び散った血の赤や、床に倒れた時のぬるりとした感触が妙に生々しく思い出されて、今さらながら玉の縮む思いがする。吐き気も込み上げてくる。

ただ、それらしき痕跡は一切なかった。見下ろした先には風呂上がりの鏡に映るいつも通りの体が、いつも通りそこにあるだけだった。怪我どころか、その痕跡も見当たらない。腕もすっかりとある。「あつれー？ ってことは、夢？ 妙にリアルな……」

確認するようにさすって見るものの、見た目通りに普通の肌の感触があるだけだ。

腑に落ちない部分こそあるものの、いい年をして怖い夢を見て、それを現実になで持ち込んでしまったのが妙に照れくさくて、誰も聞いていないのに声に出して喋る。

「とりあえずどうしよっかな。フルチンだし、着るもんでも」  
「がちゃがちゃ、がっちゃっ」

鍵の開けられる音に、とっさに横たわって寝たふりをする。

（こっぴつとこ、根性無しだよな、俺）

仰向けになって目を閉じ、周囲の音に極限まで集中していると、いくつかの足音が部屋に入ってくるのがわかった。当然のごとく、足音だけでどんな人間が入ってきたのかを知るような特殊技能はないが、何故かこの時の真弘には、やけに靴音の一つ一つがクリアに判別できた。

足音は、全部で三種類。

スリッパか何かを履いている者と、革靴のような硬い靴を履いている者はわかったが、もう一つが全く想像できなかった。強いて言うなら、分厚い靴下で歩いているような、鈍い音だ。

「一応は成功ですが、よろしいのですか、このような……」

『構わんですよ。それよりも、このことであれに貸しを作ったことの方が大切なのです。費用対効果というやつです』

「さすがはお嬢様。さすがにさすがでございますね。その小さなお体とお胸でよくもそんな腹の黒いことを」

『お前は無礼という言葉を辞書で引いておくべきなのですよ』

「何をおっしゃいます。これが嘘いつわりのない私の本音でございます」

『だとしたら、なお最悪なのですよ。あと、ここではお嬢様と呼ぶなです』

何やら和気あいあいとした会話から、男一名女二名の構成らしいことが分かった。

（でも何で、一人の声が妙にくぐもってんだ？ 壁の向こうにいるみたいな）

そんなことを考えながら、真弘は再び耳をそばだてる。

「では、彼に関しては記憶の除去と、軽い洗脳ということで処置を施します」

『そうですね、それがいいです。お願いするです』

（彼つてのは、やっぱりこの場合俺のことだよな。他誰もいなかったし）

そう思っ、て、ようやく自分がただの傍観者ではないことを実感する。

「肉体の方はほぼ再生治療も終わり、あとは意識の覚醒を待つばかりです。厳しい部分もありましたが、概ねは成功です」

『それはよかったです。ここに運び込まれた時はもうだめかと思っただですよ』

どうやら自分の治療をしてくれたのだということまで確認して、ここは礼の一つも言うべきだろうと真弘は体を起こす。

「おや、お目覚めでございますか。お早い回復でございますね」

恐ろしく丁寧な口調に驚いたが、その服装を見て迂闊にも納得してしまった。

ヒラヒラフリフリのメイド服に、いかがわしい仮面。おそらく部屋城で会ったのと同じ人物のはずだ。こんな奇抜なファッション、そうそういるとは思えない。

ただ、それ以上に度肝を抜かれたのはその隣に立っている人物だった。

そもそも、そいつが人物であるかどうかというところから、まずは疑問だ。

「いか？」

ただ、この時の注目度で言うと、その一言に尽きた。

イカが、立っていた。

よく見れば着ぐるみであることはすぐにわかったはずだし、何よりも胴体からは十本の脚の他に人間の足も生えている。ただ、眠りから覚めて目を開けたところに飛び込んでくる等身大のイカの衝撃というのは、凶器以外の何でもない。

『おお、意識も戻ったですね。よかったです』

しかもそれが喋る。真弘はこの時点で、自分の中の常識というものが、どれほど意味をなさないものなのかを、じつくりと噛みしめていた。

「あの……やっぱ俺、死にかけたんすか？　で、ここで、治療された？」

とりあえず状況確認。イカとメイド服は避けて、その隣で控えている白衣の人物に聞いてみる。常識的な服装に安堵をおぼえるという、異常事態なのは間違いないが。

「ええ。そうですよ」

「ってことは、やっぱ……夢とかじゃなかった、ってことだよな」腕が飛び、胸が切り裂かる光景が鮮明に思い出されるが、今となってはそれすらもが現実感のない、フィクションのようだ。

「今さら何をおっしゃいます？　あなたは瀕死の重傷、というか、一時は実に新鮮な死体でいらっしやいましたよ？　それを蘇生させただででございます」

メイドの告げた内容のとてもなさにも実感はない。どこまでも他人事のようにだ。

だから、

「あ、ありがと、ごさいます」

礼の言葉も、どこか上の空になってしまふ。

「それが命を助けられたものの物言いとは思えませんがね」

『黙るですよ。それに、元はといえばこちらにも責任があります。』

口を慎むですよ。』

「これは、失礼をばいたしました。」

どうやら、メイドとイカではイカの方が偉いらしい。いったいどこの世界だ、ここは？

「いや、それでも助けてもらったんだから、こつちとしては礼を」

言つて、頭を下げようとしたところに飛び込んできた言葉に、真

弘は耳を疑つた。

「もちろん、私が追加で注文しておいた改造も施してくださつたのでごさいますよね？」

『え？』（え？）

「はい。ご指示の通り、体組成細胞の構成変更とそれに伴う肉体・感覚強化。あと、失つた腕に関しては細胞培養による高速再生のちくつつけておきましたが、しばらくは違和感が残るかもしれせん。心臓は使い物になりませんでしたので、きんぐすと」

「よろしい。では引き続き彼の脳改造を」

「ちよ、ちよ、ちよつと、待つて。ちよつと待つてくれ」

医師の説明を遮つての言葉にメイドは、不愉快そうに口元を歪める。

「何でございますか？ 元死体はおとなしくなさつて」

「俺、改造されたの？ その……手術つて、治療のことじゃ、ないの？ 俺、勝手に、改造、されちゃつたの？」

子供向けの特撮番組でしか出てこないような代物が、自分の身に降りかかったなんて、にわかには信じられない。というか、信じら

れるはずがない。

「何をおっしゃるかと思えば。もちろん治療はいたしております。ただ、その上での改造手術でございます。おわかりですか、あなた様は一時的には新鮮な死体だったのでございますよ？」

死体の鮮度というのはあまり考えたくはないが、改めて自分がそうだったと言われると、事情も変わってくる。

たしかに、切り落とされた左腕も、嘘のように元通りだし、痛みもなければつなぎ合わせたような跡もない。胸の傷にしても同じだ。あれだけの致命傷を負って、普通の治療だけでは回復が難しいと言われれば、納得せざるを得ない。

（そういや、医者もそれっぽいこと言ってたしな）

「やむを得なかった、ってことか」

そういうことならばと、改めて非礼を詫びるために向き直り、

「私の趣味でございます」

「つぎけんなよてめえ！」

キレておいた。

「心躍りませんか？」

「踊るか！　そもそも改造手術なんて特撮じゃあるまいし、そんなばかげた話が現実には」

「先ほど申しましたが、そう思われるのでしたらそれがあなた様の真実ということでしょうしいのでは？　所詮、人間というのは己の常識でしか世界を図ることのできない矮小な存在でございますからね。あなた様に限らず」

妙に悟りきつた一言だが、その裏では何が事実であるかを如実に告げているような無言の圧力がある。

「ってか、改造手術とか、冗談……だろ？」

「世界とは、それを見るものを映し出す鏡でございますよ」

説得力のあるメイドの言葉は、噛み締めれば噛み締めるほど真弘の心を深く沈みこませる。言葉のマジックに見事にはめられていることに気づかせない、巧妙な話術だ。

「どちらでもようございます。では早急に脳の改造手術も済ませて（まてまて、だからって鵜呑みにするほど俺だってガキじゃねえし。そもそも改造なんて、改造手術、なんて……）」

記憶に確かに残されている、体を引き裂かれる痛み、意識が薄れてうすら寒くなつてゆく不快感。それを嘘だと言つてしまふには、あまりにもリァリテイが濃厚すぎた。

（まさか、だよな）

『待つのですよ！ なぜそんな勝手をしたですか？ 一般人に』

意気揚々と注射針の先から薬液を飛ばすメイド服を、イカが止めにかかる。脳が空回りをしている真弘にはありがたかったが、いかんせん、イカである。

非常によく出来た着ぐるみで、十本の足の真ん中に二本の人間の足が生えているのはつきり見えたはずだ。ちなみにこの着ぐるみ、実に精巧にできていて、十本の足のうち二本が『触腕』と呼ばれる他の八本とは異なつた構造をしているのまで再現している。

『我々は誠意を持って悪の秘密組織としての業務を遂行するのですよ。カタギのものにこのようなことをするなど、非道ですよ』

言っていることがハチャメチャの矛盾まみれな気がしたが、今のこの流れは千載一遇であるのは間違いがなさそうだと、苦渋の決断をした真弘。

「そうだ、いくら悪の組織だからってやっていいことと悪いことが……悪の、組織？」

自分で口にして、ようやくその言葉のおかしさに気がつく。

『はわっ！ ば、ばれてしまったのですよ。こうなれば仕方がないのです。脳改造しゅじゅちゅをちて、我々に不都合のないように』

イカの胴体真ん中あたりの覗き穴から声がする、声の印象だけだと、中の人は幼い女の子のようだが、恥ずかしさのあまり上ずつた声なので何とも判別できない。

「お嬢様、言えておりません。脳改じようすずつでございます」

『ここではお嬢様と呼ぶなです！ えーい、何でもいいから改造し

てしまうですよ。組織の存在を知ったものは生かしておかんですよ」  
「御意」

「おい！ 無茶苦茶だ…… って、なんですか、その怖そうな武器の数々は」

じりじりと後ずさったところで、すぐにベッドの端が手の平に触れて後がなくなる。

改造手術云々は別として、迫りくるメイドと白衣の手が、それぞれのこぎりとメスを握っている状況を甘んじて受け入れるほどのお人よしではない。

「さあ、痛くありません。天井の染みを数えている間に完了いたしますので」

「嘘つけ、痛くねえわけねえし。ってか、天井染みだらけだぞ！ 終わらねえだろそれ」

「大丈夫でございます。術後は何を言われても「イエスだワン」、と素直に堪える忠実な下僕になりますので、すずち中の痛みのことなどきれいさっぱりでございます」

「他のものまで綺麗さっぱりだぞそれ！ 断る！ 一回ちゃんとも手術言えてねえし」

「拒否権はございません」

目の前まで迫ったメイドの、無表情な仮面の中に狂気を見た真弘は、意を決してベッドから飛び出した。フルチンのままで。

背中を壁にふさがれているのであれば、残された道は特攻のみだ。  
「うおっ！ 何でこんな飛ぶんだ！」

思ったよりも体は軽い。力いっぱい蹴りはしたが、想像以上の勢いで流れる景色に感覚がついて行かないほどだ。ちらりと振り返ると、先ほどまで寝ていた手術代が蹴りの勢いに耐えきれずにひしゃげている。

（まじかよ？ 肉体改造って、まじだったのかよ？ まあ、何にしまととりあえず）

「逃げる！」

『な、何と言うものを見せるですか！　へ、へんたい！』

玉砕覚悟でメイドと白衣の間を突っ切るようにダッシュし、背後で指示を飛ばしていたイカの隣を通り過ぎるところで、運悪く「ソレ」が丸見えになってしまった。というか、それまでもほぼ丸見えだったのだが、さすがに走りながら揺れる「ソレ」のインパクトというのは、幼い声の主には相当だったようだ。悲鳴に近い声をあげている。

チャンスとばかりに扉に手をかけるが、鍵がかかっていてびくともしない。重苦しい音が室内にこだまするだけだ。

「無駄でございます。その扉は、脱出も考慮して必要以上に分厚くしてございます」

のこぎりを振り上げながら迫る、狂気の仮面メイド。

「くっそ！　絶対に脳味噌改造なんかさせないからな！　くそ！」

やけクソ気味に振り返ると、強すぎる刺激に思考回路がオーバーヒートしたイカがふらふらと怪しい足取りでこちらに歩み寄っている。そして、

「おわっ」

ぼふん、という重いのか軽いのかよくわからない音を立てて、真弘の胸に倒れこんでくる。さすがに見捨てるわけにもいかず、イカの胸を抱えるようにして支えると、視界の外でガシャリと金属音がする。

「ん？」

「お嬢様を人質に取るとはなかなかの策士でございますね。そういうことでございますか、黙って見逃さなければその卑猥きわまる性剣エクスカリバーで卑猥きわまる狼藉三昧をなさるとおっしゃるのですね。くっ、万事休すでございます」

のこぎりを投げ捨て、両手を頭の高さに上げたメイドが苦虫をかみつぶしたような顔で悔しがっていた。口元だけなのに、やけに表情豊かなのが印象的だ。

「え？　いや、あの……誰もそんなこと」

「わかっております。鍵はここにございます。ですからなにとぞ、お嬢様だけは。お嬢様だけは。いくら粗末とはいえエクスカリバー。ああ、おかわいそうなお嬢様」

言いながらポケットから取り出した鍵束を放つてよこすと、時代劇のような動きでその場に崩れ落ちてがつくりとうなだれている。

（泣き崩れたいのはこっちだよ……）

グサリと突き刺さる一言に、心が修復不可能なほどに折れそうになったが、ギリギリで踏みとどまる。今大事なのはここから逃げ出すことなのだと、それだけを繰り返して心を守る。尊厳など命あつての物種だ、と。

果たして鍵は本物で、扉を開けることに成功する。が、ふと思い立って再び振り返る。

泣き崩れるメイドに倒れ伏しているイカ。事態において行かれ、呆然としている白衣の姿を見ると、なんだか自分が悪いことをしたような気になってしまふ。

「着るもん、ないか？」

さすがにこのままでは外を歩けない。

エクスカリバーをおさめる鞘が必要なのだと、自分を慰めた。そう、あくまでもエクスカリバーなのだ、と。サイズの問題ではないのだ、と。

心の傷は、しばらく癒えそうにない。

「お嬢様、これでよろしかったのでございますか？」

レンタルされた予備の制服に身を包んだ（この時点で、なぜ満貫寺の制服が出てくるのか、なんてことは気にならなくなっていたようだ）真弘はいそいそと部屋を後にした。

それを見送りながら仮面を外したメイド、雲雀谷華の表情は相変わらず変化に乏しい。

『よろしいわけではないのですよ。ないですが』

こちらはイカの着ぐるみの中で動いてもぞもぞと蠢いている。脱

「こうとしているのだが、着るのも脱ぐのも一人ではままならない大型の着ぐるみだ。しかも中にいるのは、小学生と見紛う程の小柄な体。」

「ふう。結果論としては、これでいいということにせざるを得ないですよ」

満貫寺指定の体操服に身を包んだ少女は、額の汗をぬぐいながら外見にそぐわない尊大な物言いだ。にもかかわらず、板についているというか、こなれている感じがする。

体操服の胸元には恐ろしく達筆な『鹿王』の文字が書かれたゼッケンが張り付いている。凄まじくいかめしいはずなのに、自己主張に乏しいささやかな胸元と、幼すぎる顔立ちのせいでその文字だけが浮いている。

「お嬢様ならこのようなシチュエーションを好まれるかと。さらに申しますなら、今朝の騒動の際にやけに熱心に彼を見ていらつしたと、さらにさらに申しますな」

「申さんでもいいです！　どこまでストーカーですか。時々お前が怖くなるですよ」

「恐縮でございます」

「本当に恐縮してくださいです」

「まあ冗談はさておき」

「私は本当にお前の人格を疑うですよ」

涼しい顔のまま眉毛一つ動かさず（そのくせ、ほんのちよつとだけ頬を紅潮させて）、華はイカの着ぐるみを拾い上げる。軽々と持ち上げているが、凝ったデザインな上にそこそのサイズなために、重量は二十キロを優に超えるほどだ。華奢な少女が片手でつまみあげられる代物ではない。

「これでようやく、我々も活動開始と相成るわけでございますね」

「そうですよ。株式会社パラ・ダイス、本格始動なのですよ」

汗のにじむ項をぬぐいもせず、ろくおつともみじ鹿王紅葉は誇らしげに胸を張る。汗でべったりと額に張り付いた前髪も、乱れた項さえもチャームポ

イントに見える程に整った外見は、見るものを問わずその将来の有望さを確信させる。

「ようやく出会えたですよ、運命の人……」

小柄な少女の頬を染めているのは、まぎれもなく淡い恋の色だ。腰まである髪が揺れる香りを、余すところなく吸い込もうと鼻息を荒くしたメイドの所業には、敢えて気付かないことにする。

そのメイドが、明らかすぎる殺意にイカの触腕を握りつぶしていたことまでは、さすがに気づかない。

## 最遅少年

翌日も半日授業だったのがせめてもの救いだった。

昨日のオリエンテーションで一通りの事務的なイベントはひと段落ついたとはいえ、実質初日なんて教師との顔合わせみたいなもので、どの授業も配布物や教科書の確認程度に時間を費やすだけだった。

「だからって、初日から寝てるとはなかなか剛の者さ」

「やるにやあ帝塚山君。大物の匂いだね」

「寝不足なんだよ。ってか、寝てなくて」

睡眠時間はゼロ時間。まあ、改造手術を受けていた間の意識がないのでその時間を眠っていた（死んでいた？）と考えてもよさそうだが、そのことはなかったことにしたい。

あの後、手術室を脱出した真弘はメイドの指示する通りに施設の廊下を歩いた。ひたすらに殺風景で、軍事施設か何かを彷彿とさせたのは時折恐ろしく分厚い鉄の扉を目にしたからだ。防火扉というよりは、映画などで見るシエルターの扉のようだった。

十分ほど歩いたところで言われた通りの出口に到達したのだが、そこからとんでもなく長い階段を上がるはめになり、ゴールの扉にたどり着いた時には膝が笑っていた。

（しかも、出口のところに腕時計が置いてあったんだよな）

その腕時計は入学祝にと祖父母が買ってくれたGショックで、かなり気に入っている。返ってこなかったらどうしようかと思ったが、今もしっかり腕に装着されているので一安心だ。

扉のすぐ手前で自分をじっと見つめている文字盤では、短い針が四の位置にいたのだが、そこに現実味はなかった。

（で、扉開けたらまだ薄暗くて、朝だつてわかって、家帰って……）  
何故か扉のすぐ向こう側には真弘の自転車置いてあり、ご丁寧に暗証番号式のキーロックまでセットされていた。悪の秘密結社と

もなれば、チェーンキーのロック解除ぐらいお手の物らしい。しかも、今朝になつてもう一度その場所に行つてみたところ、入り口の扉どころか、その痕跡までもがきれいさっぱりなくなつて、自動販売機が設置されていたというのだから、笑うほかない。

ベッドの上で眠れないままごろごろとしている間に夜が明けた、というわけだ。眠るうにも興奮した脳が次々にいろんなことを考えてしまい、しかもそのことごとくが悪いほうへ悪いほうへと舵を切ろうとした。典型的なマイナス思考。

「何浮かない顔してるさ？ 寝不足つて言うより、失恋つて感じの顔さ」

「それだつたらどんだけいいか」

いや、よくはない。よくはないのだが、だからといってこっちで良いかといわれるとそそれもまた別問題だ。何せ改造手術だ。特撮の登場人物にでもなつた気分だったが、手放して喜べないのは、自分がつまらない大人になりかかつているからなのだろうか、さらに自身に追い討ちをかけてみる。

無意識のうちに、左腕を見つめている。

「どうしたの？ もしかしてあれ？ ぢつとてをみる、つてやつ？ 詩人？」

「コリヤますます失恋路線が濃厚さね。はっ！ 右手に振られたから今度は左手とか」

「下ネタじゃねえか。だから失恋じゃないつつつてんだろ？」

「大丈夫！ 下ネタも華麗にスルーするスキルを持つてる大人の瞳さんだよ」

「それもどうか思うが……そうじゃなくて……そうだな、例えば、例えばだけど」

出会つて二日とは思えない距離感に、真弘の口は存外軽く動いた。「夜寝てる間にUFOにさらわれて、知らない間に機械埋め込まれたり洗脳されたりしたらどうするかな、とか」

言いきつた直後、二人のきょんとした眼を見て激しく後悔した。

出会って二日である。なのに何をとち狂ったのか、こんなたとえ話を本気でしてしまうなんて、失態もいいところだ。これを機にクラスから孤立しても文句が言えないレベルの電波、ないし中二秒病を発信したわけだ。事実はどうアレ、そうとしか思われない。

見る見る顔が赤くなっていくのがわかったが、意外にも反応は良好だった。

「まさかそんなこと考えてて根不足したさ？」

「帝塚山君って子供っぽいところあるんだ。人は見かけによらないにやあ」

どうやら、驚いたのは最初の一瞬だけだったらしい。

さらりと笑って流してくれたばかりか、宗司にいたっては真剣にUFOに拉致されるところからシミュレートし始めている。今はどうやら手術台で頭を空けられているらしく、「ぱか」という効果音まで入れている。

「や、そんなマジにならなくても」

「洗脳はいやだけど、機械埋め込まれるのは悪くないかもしれんさ」

「そのせいで超能力に目覚めたり？　どっきどきのドラマが始まりそうだなにやあ」

互いの顔を指差しあつた宗司と瞳は、実に屈託のない笑みを浮かべる。

ほっとすると同時に、思った以上に自分がマイナス思考に偏る根深な奴の気がしてきて、ちよつとだけへこんでしまった。これではモテモテ高校ライフをはじめられるはずもない。モテる男は前向きなのだ、と自身を鼓舞するように頷く。

「だよなー。すっげえちからに目覚めるかも知れねえもんな」

「爆弾埋め込まれて地球侵略の足がかりにされる可能性もあるけど、気にしないさ」

笑顔が凍りつく。何の他意もないはずなのに、ここまでピンポイントに心を抉られると、こいつもあの悪の組織とやらの一員じゃないのかと勘ぐってしまいそうになる。

「そのときは、間違いなく破壊王にぶっ飛ばされるにやあ。爆弾ごと宇宙の果てまで」

「うわ、ありそうで怖いさ」

授業も終わり、教室に残っているのは真弘たちのほかには、女子のグループが一つだけなので、笑い声はよく響く。春先の暖かな日差しも相まって、まるで数年来の付き合いがあるように錯覚してしまう。

つられて笑みをこぼしていた真弘が、ふと思い出したように疑問を口にする。

「あのびっくり人間って、中学のときからああなのか？ それにあと二人って？」

四人のびっくり人間の内二人を見た現時点ですでに食傷気味だが、逆に興味も尽きることはない。むしろ、毒食わば皿までの気分だ。

「ん？ ああ、最初はもうちょっとおとなしかったさ。や、魔王の天王寺のほうは最初っから全力だった気がするけど、会長はどうだったさ？」

「ん〜？ 一年の二学期だか三学期だったかにや？ いきなり生徒会室乗っ取って、先生とかと攻防戦があって、それからかにや？」

「ああ、生徒会室戦争さね。二学期さな、あれは。文化祭終わって代休明けだったさ」

「そうだそうだ。学校着たらいきなり体育の先生が窓の外で怒鳴ってたんだもん。アレはびっくりだったにや」

「戦争？」

穏やかではない響きだったが、「冗談を言い合うように笑う二人はさらりと続ける。

「はかい……あんときはまだそんなあだ名はなかったけど、修学院がブチ切れて生徒会を乗っ取った事件があったさ」

「なんで？」

「さあ……千里眼は覚えてるさ？」

ただでさえ細い目をなくなりそうなほどに細めた宗司は、首をか

しげながら瞳を見る。「うわ、目がにやいつ！」

「あるさ！　って、んなことより乗っ取り事件の原因さ。しょーもない理由だった気が」

「あれでしょ？　生徒会室で書記だったかがタバコ吸ってるとこ見つけて、小豆ちゃんの正義が爆発しちゃったんじゃないか？」

「お、そうだそうだ。それで、見て見ぬふりしてた役員もまとめてぶっ飛ばして追い出したさ。ちなみに全員全治一ヶ月」

あれにぶっ飛ばされればそうなるわな、と納得せざるを得ない。何せ、鉄の門がひしゃげるパワーである。むしろその程度で済んだのは幸いと思えない。ただそれより、

（下の名前、小豆っていうのか。まあ、外見はしっくりくるな。外見は）

なんてことをぼんやりと考える。

「で、選挙を間近に控えながら、初の腕力による政権交代が実現された、ってわけさ」

「ひでえな、そこに正義はあるのかよ」

「勝てば官軍だにや」

苦笑交じりだが、どこまで本気かわからない瞳の言葉には、多分の真実が含まれている。その後は正式な選挙も実施されるにはされたのだが、立候補は当然のごとく小豆のみであり、ほぼ満場一致の得票数で当選したのは言うまでもない。さらに言うなら、ほかの役職についても立候補者がおらず、予備選挙の準備を進める職員室に乗り込んで、

「一人で全部やります」

と言つてのけたのは、すでに伝説となっている。

「な？　びっくり人間さ」

「びっくり通り越して感動するわ。でも、それって中学の時の話だろ？」

昨日出会ったときは、自身のことを生徒会長と自称していた気が

する。

「そんなんが中学からあがってくるって聞いて生徒会続ける根性があるやつ、いないさ」

これも否応なしの納得だった。誰だって命は惜しい。数瞬の沈黙の後に、真弘はゆっくりと頷いた。

からり

と扉の開く音がして、教室の空気が止まる。

三人ともが教師による追い出しか何かだろうと、めんどくさそうな視線を向ける。女子のグループも同様のようで、こちらは駅前のドーナツ屋にでも移動しようかとかばんに手をかけているものまでいた。

「やあ、また遅刻をしてしまいました」

開いた扉から教室を覗き込むのは、真弘たちと同じ制服に身を包んだ男子生徒だ。どこかぼんやりとした表情に照れ笑いを浮かべながら、ぽりぽりと頭を掻いている。

見るからに優男といった様子の垂れ目に、真弘は見覚えがあるような気がしたが、今気になったのはそっちではなかった。

「遅刻？」

「おお、びつくり人間パートスリーさ。その名も遅刻王、住吉。これで帝塚山は満貫寺の三王を全部見たことになるさね」

「はあ」

拍子抜けもいいところだった。

目の前に現れたのは、どこにでもいそうな、どちらかというとはつとしない印象の男子生徒。眠そうな垂れ目も、照れたようにはにかむ口元も、何もかもが世間の標準値の中に納まってしまいうレベルだ。そして、その名前と先ほどの発言から想像できてしまう、びつくり人間の理由。

「なんか、ほかの二人がアレだっただけに、ちょっと期待はずれって言うか」

「あのこ、小豆ちゃんとかんかできる唯一の人間ね」

「うそだろ！」

すっかりボリウムが上がってしまい、帰り支度を始めていた女子グループの視線を浴びてしまう。すごすごと座りなおしながら、もう一度件の遅刻王とやらに目を向ける。

どこをどう見てもそんな要素など微塵もない。ともすれば自分でも喧嘩になれば勝てるんじゃないか、そんな気さえする見るからに優男だ。喧嘩だ暴力だというものとは縁遠い平和な日常を送ってきたヘタレでさえそう思う。

「まあ、信じられないのもわかるけど、そのうちいやでも目にするさ」

さすがにこればかりは鵜呑みにできないと、半信半疑になってしまふ。

喧嘩なんてしなさそうどころか、休みの日には縁側で猫を抱いています、といった風貌だ。住吉の家に縁側があるかどうかは別として。

「あれ？ すみよし？」

「はい？」

思いのほか大きな声が出たようで、途方にくれていた遅刻王、住吉と目が合った。

おっとりとした目元のまま、小さく首をかしげている。

「あのぉ……どちらさんで？」

そりやそうだろう。編入組みの自分を相手が知っているはずがない。それでも住吉は、自分が忘れているだけなのだろうかと必死になって記憶のゴミ箱を穿り返している。

「あ、ごめん。俺、編入組の帝塚山」

「道理で思い出せないわけだ。はじめまして」

律儀にぺこりとお辞儀をする姿は、やはりびっくり人間という言葉葉に結びつかない。

「いや、人違いだよ人違い。つい最近同じ名前を聞いたからちょっとびっくりしたけど、んなわけないよな。ごめんごめん」

昨日の朝、遅刻ぎりぎり登校した正門前。暴走族がしきりに呼び出していた人物も、確かスミヨシだったと記憶している。が、それはこじつけ、想像力が豊か過ぎるというものだ。この優男と、暴走族に接点がない。あるはずがない。いくらびつくり人間だとしても、この男と、まさか、暴走族が……

「『狩流覇血悪』って暴走族、知ってる？」

聞いてしまった。あるはずがないと思いながら、知ってどうにかなるものでもないとわかっていながら。

「はい。聞いたことはありますよ」

「だよな、聞いたことがある、程度だよな。いや、ごめんごめん」

「たしか、先日河川敷まで追いかけられたのがそんな名前だった気がしますが、あいにく名前を聞く前に皆さん川に沈めてしまいましたので、ちょっと定かでは」

笑顔が音を立てて引きつる。ガラスが割れるような音が自分の体の中からするのは初めてだった。

「もしかしてお知り合いとかですか？　だったら申し訳ない、とっさのことであわててしまいました。何せ、猫が飛び出してきたので猫が轢かれないようにと夢中になっていたらいつの間にか……」

びつくり人間三人目。

「というわけで、納得したかにや？」

「うん」と小さな子供のようにうなずく。

タイミングを計ったように、頭上のスピーカーが短いノイズをこぼし、録音されたピアノのピンポンパンポンというお馴染みの音が流れる。

『あー、一年、住吉。住吉一郎。学校に来ているなら職員室まで来なさい』

『来ているなら』とするあたりに、高校生活二日目にしてすでにこの人物の人となり、学校側にも知れ渡っているのだろぅと感じさせる。

「というわけで、すみません。行かなきゃいけないみたいです」

特に悪びれる様子もなく、呼ばれたから行くだけという様に、住吉は教室を後にした。

「ま、そういうわけで、君は二日目にして早くも満貫寺高校を無事に卒業するための、必要最低限にして実に重要な要素を知った、というわけさ。真弘」

「要素、って？」

探偵漫画の主人公が謎解きをするような、軽快な口調とともに宗司がほくそ笑む。

「実に簡単。あの三人には極力かわらないことさ」

あんまりといえばあんまりな物言いだったが、隣では瞳でさえもがうんうんと感慨深げにうなずいている。どちらかというと瞳は、そういう偏見じみた発言を止めにかかるタイプだと思っていただけに、この反応はリアリティを感じずにはいられない。

だから、素直な言葉が口をついて出た。

「みたいだな」

すでに三分の二を知った時点でうすうす感じていただけに、特に疑問はなかった。

もちろん言われなくてもそうするつもりだし、そうなるものだと思っていた。

そして後に真弘は実感する。このときの自分はどこまでもあほだったのだ、と。

## 最小兼美

事件はあっけなく日常を飲み込んだ。

真弘の常識がひっくり返されて完全崩壊したあの日から十日。二度ほど部室城で異臭騒ぎがあつたことを除けば、至って平凡な日常だった。その異臭騒ぎというのも、先日 of 召喚実験を改造した天王寺による、異世界の生物が原因なのだが、そのことはさておく。というか、その程度なら平凡な日常だと思えるようになっていた。

つまるところ『満貫寺高校における平凡』というものに真弘も慣れ始めていたのだ。

程よく肩の力も抜け、授業もそこそこに聞き流すようになっていた真弘は、ぼんやりと春の陽気の中を漂う雲を、見るともなく眺めていた。

というのは大嘘で、その思考の中では常に女のことを考えていた。昼休みを控えた四時間目の体育の待ち時間など退屈以外のなんでもなくせに、ちょっとでもしゃべろうものなら、体育教師による懲罰が待っている。

というわけで、この十日ほどでチェックした数名の女子生徒を頭の中に並べて、何とかしてお近づきになれないものかとひたすらに無駄な思考を繰り返していた。若気が至っている。

そんな若気の至りは、自分の体が改造を施されたなどという嘘とも本当ともつかない話題を、半ばほど頭からは消し去っていた。そんなことから、

「おーい、帝塚山！」

自分の順番が来たことにも気付かなかった。

「は、お、あい！」

何とも間抜けな返事をしながら慌ててスタートラインに並ぶ。背後からは宗司の「女子のことばっか考えてるからさ」という冗談めいた冷やかしが飛んでくる。当たっているのが凄まじく悔しい。

「おんゆあまーく、せつとお！」

完璧に日本語べたべたの発音で体育教師が叫び、スターターピストルを掲げる。

パン

乾いた火薬の音が春の空に響き渡る。思いの外大きな音に、敷地を囲むフェンスにとまっていた鳩が飛び立つのが見えた。ゆっくりと、羽の一枚一枚の動きまで、鮮明に。

次いでその目で見たのは、ひっくり返る空と地面。撒き上がる砂利。こちらを見つめる、八十個近い見開かれた目玉。

足元にあつても空は綺麗だ、なんて呑気なことを考えるあたり、冷静さは残っている。ただ、それとこれとは別問題、と言わんばかりに世界は大回転し、気がついた時には目の前に自分の足元があり、白線があり、

「あれ？」

どこんつ、という交通事故クラスの音がした。後に聞いたところによると、グラウンドの反対側でバレーボールの授業をしていた女子にも聞こえていたらしい。とは、瞳が「誰か死んだと思った」という笑えない冗談とともに語った内容だ。

死人こそ出なかったものの、男子の体育はその時点で中断。全力で顔面から地面に突っ込んだ真弘を保健室に運ぶために、担架まで持ち出されたというのだから大騒動だ。しつかりと白目をむいて気絶している真弘の顔は、どこか間抜けだった。

幸いだったのは、ものすごい勢いで顔面から地面にキスしに行っただというド派手なエフェクトのおかげで、その原因の方に誰も気がつかなかったことだ。

凄まじい勢いで蹴られた地面は、わずかにえぐれていた。蹴る力に対して地盤が弱すぎたたのが原因だが、通常なら重機でも使わない限り掘り起こせないような硬さだ。

「な、なんだ帝塚山ー。派手な名前の割に走るのもできんとは、運動音痴だな。ほほほ、ほら、ほ、保健室で休んで来い、な、鼻血も

出てるし。まったく最近のゆとり世代は」

引きつった笑みを何とか作りながら、それでも虚勢を張る体育教師、金谷の顔には動揺の色がありありと浮かんでいた。自分の授業中に事故が起きたらどうしよう、そんな保身にまみれた思考が垂れ流しになっている。ガタイの割に肝の小さい奴、それが金谷に対する生徒たちの率直な感想だったが、今はそれどころではない。

「俺が行くさ。あともう一人、誰かー」

率先して真弘を担ぐ役を買って出たのは宗司だが、もう一人がなかなか決まらないのは、ひとえに金谷の人徳のなさのせいだ。だけれも、こんな男に媚びを打っているなんて思われたくはない。

「お、おう。こういうのを率先してやるってのは、評価高いぞ」

震える声音で、あくまでも偉そうな態度をとり続ける金谷を早々に無視して、宗司は真弘を保健室に運びこんだ。結局もう一人は、背がでかいからという理由で体育委員に任命された守山だったが、「今日はもう金谷の顔見たくねー」とだけ言い置いて、早々に保健室を後にした。

というわけで真弘は今、真っ白なシートに体を横たえて、揺れる布製の仕切りを見つめている。その向こう側の、春独特の柔らかい日差しがわかる程の、薄いカーテンが微かな風に揺れる

時計を見ると、四時間目も終わりに近い。

ゆっくりと覚醒する意識は、昼寝から覚めるときのように心地よい。

（こうやって、もう少し……って思いながらまどろむのって、気持ちいい……）

とろけた意識でそんなことを思いながら、夢と現の境界線を楽しんでいると、不意に頬を風が撫でた。

さわやかな風に、普段なら寝起きが悪いはずの真弘も気持ちよく目を覚ます。

（こんななら毎朝でもいいのにな）

なんて思いながらゆっくりと瞼を開ける。

風の心地よさに頬を緩めていると、その風がふいに目の前のカーテンを持ちあげる。

間仕切りでもあるカーテンがふわりと持ちあがり、隣のベッドが現れ、そこに横たわる生徒と目があつた。

女子生徒だった。

青い瞳は磨き上げられた宝石のようで、真弘は夏の青空を押し込めたようだと思った。

見る者を吸い込むような美しさ。

それがじつと、こちらを見ている。首筋を流れる髪は少し赤みを帯びたブロンドで、染めて作り出せる鮮やかさではないように思えた。事実、少女のそれは数代前の母方にいた北欧系の血によるものなのだが、少女を構成する要素の一つ一つに目を奪われた。

そんな、女性なら誰もが望んで羨望の眼差しを向けるふわふわの髪が、風に揺れる。

「こ、こんにち、は」

恐る恐るといった感じで、少女が口を開く。消え入りそうな小さな声だが、静かな保健室にはそれで十分だった。透き通った、よく通る声だった。

「は、あ……はい」

あいさつに「はい」で返す馬鹿がどの世界にいる、と思うかもしれないが、その時の真弘にはこれが精いっぱいだった。それほどに少女は、綺麗だった。

人形のような、そんな言葉がしっくりくるような外見は、幼い顔立ちから来るものだ。

「はなち」

少女の口がその一言だけを呟いたが、最初は何のことかわからずに、横になたまま首をひねる。そこでようやく、口元を伝う生暖かさに気がついた。

「あ」

指先で拭ってみると、鮮やかな赤が指の腹に乗っていた。

「やべ、ぽちが取れたんかな？ あーあー」

見ると、枕のすぐ隣には血を吸ってちよつとスプラッタになったティッシュの塊が転がっていた。さすがにそれを拾い上げて装着する気にはなれず、まくら元に置かれたボックスティッシュの一枚を拝借することにした。

「ふおれでらいじょうぶ」

死にたくなつた。サイズが大きすぎたようで、思い切り鼻声になつてしまった。

鼻にポッチを詰めている時点でカッコよさなんてゼロなのに、けなしのプライドにすぎた結果がこれである。見事なまでの自爆、撃沈のフルコースだ。

恥ずかしさにもたえ死にそうになり、いつそ背後の窓から飛び出して逃げてやるうかと思つてしていると、少女がいきなり枕に顔をうずめる。

「くっ、くっ」

シート越しでもわかるほどの小さな肩が小刻みに震え、ついには枕をぎゅっと握りしめ、それでも我慢しきれずに、

「ぶっ、くすっ、ふふ、ふふふふ、あはははは」

声に出して笑い始める。しかも、なまじつか最初を我慢していたせいで、どうやら自分でも止められないらしい。やばいんじゃないかという勢いでが真っ赤になつていく。

呆然と見つめている真弘が、そろそろ止めるべきかと心配になつたところでようやく、ゲホゲホとむせながら笑いが収まり始めた少女は、涙まで浮かべている。

「怪我を、されたのです？」

唐突な質問だったので、うまく言葉が見つけれず、張り子の虎のようにかっくんかっくん首を動かすのがやっとだった。

「そうなのですか。体育です？」

少々怪しい日本語文法だったが、語尾が上がっているのでおそらく疑問文だろうと推測して、もう一度張子の虎になる。かっくんか

つくん。

「面白い人ですね。お名前は？」

「かっくんかっくん。」

「いえ、もうイエスのーの疑問文ではないです。ほんと、面白い人です」

まったくすすすと笑う。今度のは口元を手で隠しての少々上品な笑い方だったが、それもまた絵になっていて、お姫様を見ている気分になった。

「て、一年の、帝塚山、真弘、です」

「だったら同じ年です。わたしも一年生で、鹿王紅葉というですよ。よろしくです」

幼い顔立ちと、それに見合ったたどたどしい声音だが、仕草は少し大人びていて妙にそれが似合っている。

不思議な雰囲気だった。

色んな意味で同じ年には見えないが、先ほど自分で「同じ年」と言っていたので、それは信じることにした。

「こちらこそ、よろしく。そっちも怪我？ それとも」

「病気？」と聞こうとして、初対面で聞くにしては地雷要素が強すぎることにギリギリで気がついて、とっさに方向修正。

「さぼり？」

誤魔化せただろうかと、ポーカーフェイスを装いながら、胸の中では心臓が爆破三秒前だ。これで訝しがるような眼をされたり、あまつさえ悲しい眼なんてされた日には、残された選択肢は、本当に『背後の窓から飛び出す』の一択になってしまう。

緊張の一瞬が過ぎて、二瞬が過ぎて、もう駄目だ。脱出確定を覚悟したところで、

「ほ、保健室でさぼってみる、というのが、夢だったですよ」

先ほどの、笑いの時とは違う理由で耳まで真っ赤にした紅葉は改めて、自らの恥ずかしい告白に打ちのめされてもだえている。このまま放っておくと、世界初で初めての、死因が羞恥心という死者を

看取ってしまいそうになったので、

「お、俺も、ちょっと憧れかも。中学ん時の保健のば……先生がやたら女子ひいきで、男なんか骨折してもマキロンだけで返されたって伝説があるぐらいだったんだよ」

うつかり保健の「ばばあ」と言いそうになったのを、これも慌てて軌道修正。見るからにそういう汚い言葉に免疫がなさそうだったからだが、半分口から出てから気づくあたり、真弘らしい。

「そんな、マキロンで骨折は」

「都市伝説っていうか、あいつならやりかねないって感じたからたぶん作り話だけど、でも嘘じゃなくてもおかしくなさそうなばあだったしな。あ、保健の先生だったし」

今度は言ってから気がついた。慣れないことはするものではない、ということだ。

「興味津津なですよ」

ベッドから落っこちそうな勢いで身を乗り出した紅葉は、ただでさえ宝石のような目をキラキラ輝かせて、話の続きを催促している（やばい……無茶苦茶かわいい。ここにきてようやく俺の高校生活スタート？）

愚かな妄想の花を咲かせつつも、必死になって平静を装って口を動かす。

「そんなに？　こんなどこでも普通だと」

「うちはそういうことはなかったですよ。中学も高校も、専門の保健医を常駐させているので……そういう怠慢はなかったですね」

『怠慢』とはまた大仰な物言いだと思ったが、ここが私立高校であることと紅葉の振る舞いや口ぶりからそこそこ、いや、もしかしたらかなり育ちのいいお嬢さんか何かなのだらうとあたりをつけておく。

「そ、そうか。他、他、何かあったか」

そこでタイムリミット。保健室であっても変わることのないボリウムでチャイムが鳴り響き、見えてもいないのに学校中の空気が

弛緩するのを感じたように錯覚する。

「お昼、なのですよ」

「だな」

チャイムが鳴り終わるのをひとしきり待ってから再び向きあうと、今度は唐突に恥ずかしさがこみ上げてくる。

こんなうれしはずかしドキドキな時間が、入学二週間にして訪れるなどとは想定外にもほどがあつたが、この甘酸っぱい時間を限界まで堪能していたいのも本音だ。もしこの時間が永遠に続くのなら、悪魔に寿命のラスト三割までなら食わせてやる覚悟が、真弘の中にはできつつあるほどだ。

（これが、青春ってやつか）

が、それもそこまでだった。

目の前の紅葉が、気の毒なほどに顔を真つ赤にして今にもゆで上がりそうだ。そのまま放っておいたら本当に湯気の一つも上がりそうだったので、慌てて会話のつかかりを探す。青春満喫ボーナスタイム、終了だ。

「あ、えーっと、お昼、だな」

あろうことが、まさかのオウム返し。自分の無能っぷりに絶望しながら、先ほどよりも重くなった沈黙に身を沈めていると、深海にいるような気分になってくる。

どうにも耐えがたい空気が保健室に充満し、窓からあふれ出して世界中に広がっていくというあほな妄想をし始めたところで、現実の方が真弘に襲いかかった。

「また遅刻！」

よく通る、聞きおぼえがあるような気がする声が、窓から飛び込んできた。

もちろん、このチャンスを逃す手はない。

「あれ、生徒会長の声だよな」

誰に言うでもなく口にして、実に白々しい動作で立ち上がる。まだ顔に違和感があるが、痛みというほどでもなかったし、今はあの

恥ずかしい空気から逃げることを考えたい。

吹き込む柔らかな風を胸元に浴びると、それだけで清々しい気分になるが、そのせいですっかり忘れていた。この学校では、その行動が確実に死亡フラグだということを。

「今日という今日は、しっかり反省してもらおうからな！」

職員室や各種特殊教室が収められている本館の中でも、エントランスのすぐそばに配置された保健室からは、正門やそのすぐ近くの職員駐車場がよく見えた。

そのちょうど真ん中、正門と下足スペースの間を遮るようにして仁王立ちしているのは、カタログ見本さながらにびしっと着込んだセーラー服。トレードマークのツインテールが揺れている。

凜々しい口元が、他の人物ではありえないことを如実に物語っている。

修学院小豆、その人だ。

そして、その向かいのバツが悪そうな猫背はこれまた期待を裏切らない遅刻王、住吉。

「えーとですね、少々事情がありましてですね」

「言ってみろ」

「その、来る途中で銀行強盗に出くわしたのですよ。そしてまた運悪く人質ということで中に連れ込まれてしまいました」

（うそくせえ！）

「へえ、それでどうなったんだ？」

「他にも数名の銀行員さんとはしくはなくは人質にされていたのですが、このままでは遅刻どころか欠席になってしまうと判断しまして」

「それはいい判断だね。僕でも同じことを思っただろうね」

（会話が既におかしい！）

「そこで、せめて午後の授業に合うように、と力づくで脱出してきたしいです」

「大変だったね」

（信じるのか？）

「でも、それはそれ。遅刻は遅刻だよ。さあ、今日こそ制裁を受けてもらうよ!」

「はあ、やっぱりだめですか。こんなことなら倒した強盗を縛るのは銀行員さんにお任せすればよかったです。それがなければ、四時間目には間に合いましたのに」

「さあ、大人しくこの僕の正義の鉄拳を……だれ?」

勢いよく拳を天に向かって突き出した小豆が、不機嫌そうに眉間にしわを寄せる。

小豆にしてみれば、一番の見せどころで出鼻をくじかれたも同然なので、何だかもやもやした気分になる。こういう中途半端が一番嫌いなのに。

「さあ、誰でしょう?」

気がつけば、二人の周囲を十名以上の人影がぐるりと取り囲んでいた。

とにかく、その恰好が異常だった。

「全身タイツ……って」

そこにいる十名ほどの連中は、全員が例外なく同じ黒の全身タイツを身にまとっていた。頭のとっぺんまですっぽり隠すタイプのやつだ。胸元には模様もあるし、ベルトやブーツを装着もしているのだが、いかんせん全身タイツである。怪しむという方が無理というものだ。

実際には科学技術の粋を集めたオーバーテクノロジーで、驚異的な耐衝撃性と柔軟性を兼ね備えた上に、短時間なら宇宙服としても使用可能という夢のスーツなのだが、知らないものにすればただのタイツだ。

しかも、全員が仮面をつけているのだが、真弘はその仮面に見覚えがあった。

自分を改造したと告げた、あのメイドが付けていたのとはほぼ同じデザインの仮面。

(悪の秘密組織って、マジなのかよ?)

「お前の知り合いか？」

じろりと、突然現れた全身タイツたちを一瞥した小豆は、それでも一郎をロックオンしたままだ。

「いえ。タイツを着る趣味の知り合いはいませんが……もしかして今朝の強盗さんの仲間、とかでしょうか？」

「わかった！」

動く様子のない全身タイツ軍団と対峙しながら、小豆は唐突に声をあげ、ぱつと表情を明るくする。何かがわかるような要素もなかったはずなのだが、そんなことを思っている真弘の目の前で、小豆は「びしっ！」と音がするほどの勢いで指を突き立てる。

「貴様ら、悪だな！」

自信満々。尊大不遜。傲岸不遜。そんな四字熟語の挿絵に使われそうな、半ば独善の匂いすらする宣言。

さすがのタイツ軍団も動揺を隠せないが、一番驚いたのは傍で見ている真弘だ。

「何だその解釈は！」

思わず声に出して突っ込んでいた。

「おお！ お前はいつぞやの根性無し。なんだ鼻にティッシュ詰め  
て」

「ティッシュはかんけーねー！ それより何だよ、『悪』つてのは  
！ ガキか！」

「何を言う。全身タイツで、正義である僕を取り囲む。こんなことをするのは悪者だけと相場は決まっているじゃないか。だから」

「正義だあ？」

どんな相場だと、そんな相場は早く世界のマーケットから締め出すべきだと思ったかどうかはわからないが、全身タイツ軍団が動いた。

見事な連携を感じさせる無駄のない動きで、攪乱と間合いを詰めるのを同時にやってのける。格闘技に疎い真弘でも、これがよく訓練された動きであることはわかった。

ただ、相手が悪かった。

## 最善生徒会

「どっせええええいつ！」

「うわわわ、ちょ、こっち来ないくださいよぉ！」

一瞬だった。

小豆が気合一発腰を落としたかと思うと、次の瞬間には半円を形作っていた五人が、軒並み壁に叩きつけられてぐったり動かなくなった。一人などは業者が乗ってきたライトバンの、後部ドアを突き破って教材サンプルの中に埋もれている始末だ。

何が起こったのを時系列に記すのは実に困難だが、真弘が目で追えただけでも、全員が一発ずつハイキックか後ろ回し蹴りをもらっていた。しかも、寸分たがわず顔面に。

そして残りの半分が、さらに悲惨な結末を迎えていた。

最初の一人が住吉に足を掴まえられた。それが運のつきだった。バットのフルスイングよろしく、全力で、人間の体をぶん回したのである。何が起こったかについては推して知るべしだ。ただ、バットにされた奴が一番かわいそうで、吹っ飛ばされて床の上で伸びている連中はまだマシ、というところか。

この間約三秒。

「正義は勝つ」

自信満々のドヤ顔に、揺れるツインテールが妙に爽やかだ。

「うはぁ……相変わらず無茶しますねえ」

片や一郎は、バットにした一人を優しく地面に下ろしているが、今さらだ。既に意識は最初のフルスイングで吹っ飛ばされている。

「お前に言われたくないな。それよりなんだこいつらは？ どういう種類の悪だろう？」

ぶっ飛ばした後とは思えないセリフをさらりと言いながら、まったく悪びれる様子のない小豆。今の動きで乱れた胸元のリボンを直しながら、表情はピクリとも動かない。

「さあ……とりあえず、不法侵入でしょうかね？」

「じゃあそれで」

あつけにとられた真弘が、改めてこいつらに関わってはいけないという瞳や宗司の言葉を反芻して確認していると、ガサリとすぐそばで音が上がる。

ふと、窓のすぐ外、中庭との間の植え込みに目をやると、苦しそうなうめき声をあげながら立ち上がる全身タイツが一つ。

目があった。

「ミツシヨン、了解」

「へ？」

見えないどこかに返事をしたタイツは、固まった真弘の頭上をかすめるように跳躍する。そのまま軽業師のようにカーテンレールを掴まえると、くるとその場で回転して保健室に飛び込んだ。

タイツの目の前に晒され、呆然と時を止められている紅葉。ベッドの上で半身だけ起こしているが、状況を飲み込んでいるようにはとても見えない。

「鹿王、さん！」

全身タイツの手が伸び、紅葉の肩にかかるうとしたところでようやく、柔らかなブロードが揺れる。

「一緒に、きてくだ」

「きやあああああ！」

力の限り絞り出された叫び声が、耳をつんざく。

思い出される、二つの記憶。何の役にも立たなかった自分の、記憶。

小豆の時は、何の役にも立たなかった。

夜の校舎では役に立ったのかどうかもわからなかった。

だから、今回もそうなのかもしれないと思った。すぐ後ろには小豆も控えているし、へたに自分が動いて、逆に紅葉が危害を加えられては元も子もない、そうも思った。

ただそれ以上に、強く思ったことがある。

（ああ、またやつちまってる）

正義感なんて立派なものではない。ただ単にまた『発症』したわけだ。

「もうやだ、こんなトラウマ」

半泣きの声がこぼれたときにはもう、床を蹴っていた。

全力で全身タイツめがけて、力加減も作戦もへつたくれもない、タツクル。

ズドンッ！ という交通事故のような音が校舎中に響いたかと思うと、瞬きする間もなく真弘の肩口は、全身タイツの腰にめり込んでいた。

「え？ え？ ちょ、は、はなしがちがぶるえっ！」

何かを言いかけていたが、夢中の真弘はそれを拾うことができなかった。というか、

「わ、わ、うわわわわわ！」

自分の加速が理解できていなかった。先ほどの、体育の時と全く同じだ。

理解を遥かに越えて流れる景色と、想定以上の衝撃に真弘の思考もついていかずに、ただただ吹っ飛んでゆく景色を眺めていた。

絡まってちぎれるカーテン、吹き飛ぶパイプ椅子、外れて吹っ飛ば扉、そして廊下を一瞬で突っ切って、迫る……壁。

肩口を相手の腰に押し付けて突進した場合、必然的に頭の位置は相手の背中かその向こう側にあることになる。簡単な話で、その状態で壁に突っ込むと、どうなるか。

「あ、当たる」

めきやつ！ という、実に不快で鈍い音が、鼓膜ではなく骨格に直に響いた。

背中をしたたかに打ちつけた全身タイツは、泡を吹いて頂垂れているが、そちらが軽傷に見えてしまったというのは、飛び込んできた小豆の談だ。それどころか、

「死んだな」

惨状を見た、第一声がそれだった。

無理もない。コンクリートの壁に頭から突っ込んで、なおかつそこにこめかみのあたりまで突き刺さって生きていると思うものなど、いない。

事実、小豆の手によって引き抜かれた真弘の頸骨は曲がってはいけない方向に曲がり、目も胡乱で額はぱっくりと割れていた。これで生きていたらゾンビだ。

「ゾンビは生きていないか」

「あわわ、それって同じクラスの……たしか、帝塚山君ですよな？  
うわあ、なんかもう、だめっばいですねえ」

ひよっこり窓から覗き込んでいる一郎も、その惨状に顔をしかめながら合掌している。

ベッドからいまだ起き上がれないでいる紅葉にいたっては、状況を把握できていないように見受けられる。呆然と、小豆の背中とその手にぶら下げられた、動かない真弘を見つめている。

どう鼻屑目に見ても、真弘が死んでいるのは明白だ。生きていられる要素が、ひとつも見当たらない。

そんな真弘をつまみ上げ、わずかばかりの憐憫を向けながらも、どうやって始末しようかと小豆が思索し始めたところで異変が起きた。

「うん？」

どう見ても新鮮な死体でしかない真弘の、指先がピクリと動く。死後痙攣。そんな言葉が真っ先に小豆の脳裏をよぎったが、それにしては動きが緩慢で、どちらかというと何かを確認するような、意思を感じる動き。それが徐々に大きく、強くなり、動く範囲も指先だけだったのが上腕にまでいたり、

「！」

目の前で、首がめきめきと音を立てて元の角度に戻てゆく。さらに、割れていた額まで見る間に塞がり始め、しかも、

「血が……」

「戻ってますね」

逆再生映像を見せられているかのように、額からあふれ出ていた血液が傷口の再生にあわせて吸い込まれてゆく。

「再生しているのか？」

小豆のその言葉を裏づけるように、真弘の額には傷跡どころか血痕一つ残ってはいない。あるのは、年相応ないくつかのニキビだけだ。

さすがに驚きを隠しきれない小豆の前で、とうとう完全に復活した真弘が声を上げる。

「ってー。何だよ、何で廊下に飛び出すんだよ。あーあつたまいてえ」

「おい！」

「うおわっ！　なんだ！　お、あ、え？　あれ？　何でお前なんだ？」

猫のように襟首をつまみ上げられている真弘だが、身長差のせいで足の裏は床に届いている。

目の前には黒目がちな丸い目と、揺れるツインテール。きよろきよろと見回すと、先ほど自分がタックルを決めた全身タイツが床に伸びているが、わかったのはそれだけだ。

「お前、自分がどうなったのかわかっていないのか？」

「は？　どうって、そりゃまあ慌ててたけど、まさか戸を突き破るなんて思ってもなかったし、おかげで思いつきり頭打ったしな。あー、まだズキズキする」

言って、少々大げさに頭のとっぺんを手のひらでさする。

「それだけか？」

「なにが？」

「それだけか、って聞いているんだけど」

冷静な小豆の声に、真弘は血の気の引く音を聞いた。

この質問は詰問であり、ここは審判の場であり、目の前にいるのは死刑執行人なのだと。そう理解した真弘は、自分の舌の限界に挑

戦する勢いで言葉を並べたてる。

「それだけって……ああ、うあああごめんなさいごめんなさいごめんなさい！ 扉を壊してごめんなさい不可抗力なんです正義のためなんです襲われようとしている女子を助けようとしただけなんです悪気なんかなかったんだだから助けてください」

さらに混乱した脳みそは、信じられないことまで垂れ流してしまっただ。

それは、誰にも語るまいと固く封印していた、忌まわしいトラウマの存在。

「俺は目の前の女子が危機に晒されると後先考えずに飛び出してしまうというトラウマ持ちなんです嘘じゃないんです本当なんですだからほんとに不可抗力なんですこのせいでどれだけ女の子に嫌われてきたことかだから殺さないで！」

嘘のような冗談のような、ギャグ漫画のような……真実だった。

肺の中が空っぽになるまで声を出しつくした、全力の命乞い。

自分とごく一部の知人しか知り得ないトラウマまで吐き出して。

「それはまた……」

名前もない上に本人以外には大きな実害のないこの症状を、真弘はここに来て初めて暴露したわけだ。死への恐怖から。なりふり構わず。

当然のことながら、それが小豆の心にクリティカルヒットして興味を引くなんて、考える余裕などこれっポツチもなかった。

「ゆ、ゆるしてくれるんですか？」

「こら、半泣きになるな。大丈夫、扉を壊した咎は今では追求しないよ。僕が聞きたいのはあのとんでもない回復力のことだよ。それと

……まあいいか」

「は？ 回復？」

「そうか、自覚症状なし、というわけか」

合点が言ったというように、一人勝手に納得した小豆は力強く頷いている。

「何言つて」

「よしっ！ 一般生徒や教師たちも出てき始めたし、ここでは落ちていて話もできない。生徒会室に行こう。大丈夫、そこなら僕の許可なしには何人たりとも立ち入れないから」

それを死刑宣告なのだと理解した真弘は、がつくりとうなだれてわが身の不遇を呪った。自分に起こったことに全く自覚がないので仕方がないことではあるが、すでに記憶の走馬灯を回しているのは早すぎだと誰か言つてあげてほしい。

ずるずると、真弘を引き摺る音が廊下を遠ざかつてゆく。

残されたはずの全身タイツはいつの間にか姿を消していて、遅ればせで職員室から駆けつけた教師が見たのは、壊れた保健室の扉と壁にあいたなぞの穴だけという始末だった。当事者ゼロ、目撃者ゼロの謎の破壊事件。これが普通の高校なら即座に全校集会にでもなるような大事件だが、ここ満貫寺においてはそうはならない。

教師とて人の子。命は惜しいのだ。

「だから、お前は今から副会長だ、と言つたんだよ」

生徒会室の内装は実にシンプルで、ごく一般的なものだった。

広さは通常の教室の半分ほどで真ん中には折りたたみ式の長机と、それを取り囲むパイプ椅子。そして部屋の周囲をぐるりと取り囲むスチールラックには雑多な資料が整然と並べられている。ありふれた、生徒会室のイメージそのままの部屋。

それが、真弘にはかえって意外だった。

そんな意識の間隙を狙った一言は、なかなか破壊力抜群だったために、うっかり聞き返してしまった。まあ、聞かなかったことにしてダッシュで逃げ出しても捕まっただけなので、結果に変わりはないのだが。

「はあ？」

気の抜けた返事は、そんな葛藤の結果としての、魂の抜け殻のようなものだが、小豆にとってはそんな過程など知ったことではない。

当然のごとく承諾と受け取って続ける。

「というわけで、お前は僕の正義会の一員になったんだよ。今後ともよろしくね。ちなみに、今追いかけているのは街を賑わせている自動販売機連続窃盗事件だ」

逃げ出せないように扉を背にして、後ろ手に鍵を閉めた小豆は、につこりと微笑んでツインテールを揺らす。

「は？」

「は、じゃなくて。お前はさっき言っただろう？ 正義のために行動した、って」

「あ、あー、言ったかな？ 言ったような、言ってないような」

「だから、お前にはその資格がある。あ、役員に対してお前は失礼だよ。帝塚山君、下の名前は真弘でよかったよね？ というわけで、よろしく、真弘」

いきなり呼び捨てかよ、という突っ込みもあったが、その前に山盛りの突っ込みどころが大渋滞しているせいで言葉にはならずに、思考の藻屑と消えた。

呼び捨て、決定。

「というわけで、今日から正義会としての活動に邁進していこうな」  
差し出された手のひらは、常識的かつ好意的に解釈すれば握手を求めているはずなのだが、今の真弘はともではないがそんな気分になれそうもない。

「すまん、一個ずつ説明してくれないか？ どうやら頭が馬鹿になったみたいなんだ。いや、もともと馬鹿なんだけどさ。それと、こっつて生徒会、だよな？」

「自らの愚を知ることが重要だよ。無知の知ってやつだ。よし、一個ずつ説明していこう。まずは生徒会について」

「あ、やっぱ生徒会なんだ」

「生徒会というのはあくまでも世を忍ぶ仮の姿。その実態は正義を貫き、どんな小さな悪も許さず撲滅する正義の会、正義会だよ。というわけで、真弘はその正義の心と超絶身体能力を買われて副会長

に就任した、というわけだよ。言ってみれば正義の味方だね」

「うわー、また突っ込みどころだらけな」

「異論はないよね？ それじゃあ、目下最大の謎である全身タイツの悪者について」

「すまん、異論しかない」

めまいを抑えるように眉間にしわを寄せ、手近ないすに座ってしばし黙考する。

溢れんばかりの疑問はどれもこれも荒唐無稽で、言葉にするのもはばかられるようなあほらしいものばかりだが、その中でも比較的取っ掛かりやすいものから手をつける。

「あの、さっきから言ってる超絶身体能力だとか回復だとか、なんか俺のこと言ってるっぽいけど、身に覚えがないんだよな。何のことなんだ？」

「うん。もちろん真弘のことだけど、そうか、自覚症状がないんだね」

「いや、わかってるんならもうちょっと説明を」

「任せて、そういうのは得意だから。つまりはこういうことだよ」

フレンドリーな語り口とは裏腹に、相変わらず表情に乏しい。

がらりっ、と金属音。さして広くはない生徒会室で聞くと、その音はことさら凶悪だ。

「いっくよー」

小豆が手にしたのはボールだった。主な用途は自動販売機をこじ開けたりシャッターをこじ開けたり金庫をこじ開けたりと、万能工具の代表格だ。しかも、打撃系武器としてもかなり優秀という、犯罪業界御用達の一品だ。よい子は人に向けてはいけない。

根をはったように力強い足腰。いっばいまでひねられたせいで、セーラー服の腰からちらりとへそがのぞいている。

「まてまてまてまてまて、はなせばわか、はなせば！」

「百聞は一見に、百見は一触にしかずだよ。つまり、一触は万聞に」「万聞でよろ」ブオンッ

地軸がずれたのかと思うような衝撃波が生徒会室内を暴れまわり、その発生源であるバルノヨウナモノが一直線に真弘の腕を、捉えた。

「——っっっ！」

鈍く重い音はまるで交通事故のようだったが、真弘にはその音は届かなかった。声にならない痛みが頼んでもいないのに体の隅々に行き渡り、苦痛に耐えられないと判断した脳が、意識を体の外に投げ捨てようと画策し始める。

見ると、直撃したあたりで、関節が一つ増えたように腕が折れ曲がっていた。

「ぎいあああああああ！」

「さあ、ここからだよ」

にこやかな小豆の声には殺意を覚えたが、滾々と湧き出る痛みの前には無力だった。

奥歯を食いしばり、骨折の対処法を必死に思い出そうとしたところで、

「あれ？ 痛みが……ひいて、あれ？」

発狂しそうだった痛みが、いつの間にか軽くぶつけた程度に弱まっている。そして、そんなことを思う間にもどんどん弱まった痛みは、ついには残滓のようなものを残して完全に消え去ってしまった。しかも、先ほど完全に折れたはずの腕までもが、痛みが引くのにあわせてように、元通りになっている。

「あ、れ？」

確認するように動かしてみるが、痛みどころか違和感一つない。

「なに、これ？」

「それはこっちが聞きたいよ。治りが早い、なんてレベルじゃないからね。回復魔法でも使ったか？ だとしたら天王寺が妥当だけど、あいつはこんなことしそうにないしね」

それには真弘も同意せざるを得ない。あれはどちらかというと白魔法ではなく、黒魔法専門だろう。

「ってか、え？ 俺の腕、今折れたよな」

「あの感触だと確実にぼつきり真つ二つ、常人ならリハビリが必要なレベルの骨折だよ」

その感想を、加害者がさらりと言ってしまふのはどうかと思いなから、その診断は正しいはずだと記憶を反芻する。

思い出すだけで背筋がぞわぞわと泡立つが、それだけだ。ただの記憶でしかない。

「そっちの手品とかじゃないのか？ 幻覚を見せた、とか」

「そこに正義があるのならそうするけどね。それに僕は壊すほう専門だ」

（言い切りやがった）

どこに正義があるのかはなはだ疑問ながら、説得力たっぷりな切り返しに真弘は言葉を失う。

こうなると、残された可能性はあと一つ。

（改造手術って……マジで、マジなのか？）

じわじわと染み込むように、自分の心が現実を受け入れるのを自覚する。

ただし、下手な説明をするのも余計なトラブルの種をまくことになりかねない。ここは、そういうものだという前提で話を続けるほかない。

「というわけで、そのすさまじいまでの回復力を武器に正義の味方をやってもらうよ」

「だからなんで……って言っても聞いてくれないんだろうな」

「よくわかってるね、そのとおりだよ。僕は正義を行うのに手段は選ばない」

自信満々に、ポリウムとしては少々不足の感が否めない胸を張る。

「頼りになる正義だ」

「だろう？ それに……」

誇らしげにふふんと鼻を鳴らして、意味深な視線を真弘に向ける。

「真弘は、こういうのに自分から首を突っ込むタイプのようなだね」  
否定はできない。自分の意思とは関係なしとはいえ、入学からの  
たった二週間足らずでこれだけ事件に巻き込まれ、そのたびに踏み  
出さなくてもいい一步を踏み出したのは、紛れもない事実だ。

「たとえそれが、あんなわけわからんトラウマ持ちのPTSD発症  
でも、か？」

自虐気味に内心で呟いた真弘だったが、ここまで来ると自分がど  
こまで傷つき辱めら得るのかを見てみたいという、奇妙なサディズ  
ムさえ芽生えているから不思議だ。

底の読めない、冷たい視線を浴びながら見つめる小豆の表情はこ  
れっポッチも変わらずに、数秒の時が流れた。そして小豆が開口一  
番こぼしたのは、

「素晴らしいじゃないか」

「は？」

予想外に過ぎた。

「だから、素晴らしい、って言ったんだ」

どこがだよ？ そう言いかけて口にはしなかったが、どうやら顔  
が正直にクエスチョンマークを浮かべていたらしい。

「原因がなんだったかなど聞くつもりもない。トラウマだか何だか  
知らないけど、それが思考を飛び越えて実行できるなら、これほど  
正義の味方としてふさわしい体質はない」

「疑わないのかよ、こんな冗談みたいな体質」

「嘘なのか？」

見ている方がひるむほどの、真っ直ぐな視線。疑いなど一ミリも  
含んでいない瞳は、見つめるだけで呑みこまれそうなほどに力強い。  
「いや、嘘じゃねえけどよ……でもこんなただの病気で」

「PTSDだろうとHTPだろうと、お前のそれは、正義だ」  
さすがは生徒会長といったところか。そんな風に思っているとこ  
ろに、とどめがきた。

「もう、正義に言い訳をしなくてもいい」

何の気なしの一言でしかなかったのだが、その一言が真弘には重く、効果的だった。

こうして真弘は、入学二週間にして生徒会役員という名の正義の味方を務める羽目になったのだが、悪態ばかり零すのと裏腹に、ちよつとだけ心が軽くなつたのは内緒だ。

それも、破壊王こと小豆の一言で、などとは口が裂けても言えない。

その程度には処世術を身に付けている。学校という社会は実に微妙なパワーバランスで成り立っているのだ。その中で平穩に暮らす方法というのは、意外と難しいのだ。中にはとんでもないパワーでそんなバランスをもつものかもしれないものもあるが、あくまで例外だ。

と、自分がまだ例外ではないと信じている真弘は、そんな愚かなことを考えていた。

本当に、愚かだった。

## 最高落差

「ようやく肉体強化の影響も出始めたようでございますね」

「それを恍惚とした表情で眺めるお前の変態性に一抹の不安を覚えるですが」

「何をおっしゃいます。与えられた苦難にぶつかり、苦悩し、それ乗り越える者の強さほど美しく輝くものはございません」

「本音は？」

「ざまあでございます。私めの手であのようなゾンビと大差のない体にされて、悶えて悶えて救いのない無限地獄に落ちてゆくがよろしゅうございます。時間をかけてじっくりと不幸の泥沼に落ちゆくあの姿に私は、私はじゅるり……はっ」

「もう、いいです。聞いた私がバカだったです」

「こほん……あれで本当によろしいのでございますか、お嬢様？」  
昼休みの喧騒を見下ろしているのは、本来なら立ち入り禁止のはずの新館屋上。数年前に飛び降り自殺の未遂が出たとかで、それ以来硬く封印されてフェンスで覆われているのだが、そんなものが通用するのは一般生徒までだ。オーナー（厳密には最大出資者であり直接経営には手を出してはいないが）の孫ともなれば、そんなルールはないに等しい。何なら今すぐに自分の都合のいいように変えさせることも朝飯前だ。

「あれでいいですよ。正義の不在は、悪の衰退を招くですからね。悪の秘密結社としてやっと望ましいスタイルになったですよ」

屋上緑化のために植えられ、今でも整備だけはされている芝生の上に腰を下ろして、紅葉が言う。穏やかな表情なのはこの場所が好きだからだ。喧騒から隔離されたようで、けれど手を伸ばせばそこに日常がある。そんな夢と現の狭間のようなこの場所が。

屋上に吹く風は春とはいえまだまだ肌寒いが、それでも風の運んでくる匂いが好きだ。

隣では、なぜか制服ではなくメイド服に身を包んだ華が控えている。あくまでメイドとしての立場をわきまえ、立ったままなのがいいらしい。

「しかし、なぜ彼なのでございます？ もっと適任がいたように思いますが……いつそ生徒会長でも」

「アレはだめです。見たいです？ あんな何でもかんでも暴力で解決するヒーロー？」

「……でございますね」

「それにあれば、自らが正義の味方をやることを望んではいらないですよ」

（そこまでわかっていらつしやるのに、なぜご自身のことは……）  
「まったく。何であんなタイミングで奴らは現れるですかね。危うく計画が失敗するところでしたよ」

「さすがの私も肝を冷やしました。あのタイミングで現れるなんて、まるで三十分番組のヒーローのようでしたね」

『あのタイミング』というのは、先ほど保健室前で起きた騒動のことだが、もちろん首謀者が誰かなどは言うに及ばずだ。結果的にはおおよそ計画通りと言って差し支えはなかったものの、華は内心では失敗も覚悟していたほどだ。その場合は紅葉からのきついお仕置きが待っているのだが、それはそれで実は楽しみであることは絶対に秘密だ。

「それに、お前も原因の一つですよ。勝手に改造しゅじゅちゅまでやってしまつて。成功したから良いようなものの、です」

「お嬢様、改造すずつでございます。まあ、面白半分ではございましたが、あまりにもお嬢様の熱視線があつたございましたので、てつきりそつなさるものとばかり」

そこに過剰なまでの嫉妬と、それを燃料とした憎悪が込められているのは華だけが知る裏事情だ。

「口のへらないメイドです」

ありていに言うと一目ぼれだった。

一学期初日に校門前を埋め尽くした族の一団を、物見遊山で見に行ったところで出くわしたのが、あの破壊王を身を挺して守ろうとする一人の男子生徒の姿だった。

というのはあくまでも紅葉の主観なので、実際はしり込みしていたかどうかなどは問題ではない。肝心なのは、その姿に紅葉は男気を感じ、ときめいたという事実だ。

「しかも、お前もあの人に守られてるですよ。となれば、内面的な資格は十分なのです」

「そんなものでしょうか？ 疑問符は消えませんが、いくら阿呆らしいとはいえお嬢様がそうおっしゃるのであれば、私にできるのは黙って従うことだけでございます」

「どの口がそれを言うですかね？」

ジト目でねめあげるが、華はただ涼しい顔で受け流すだけだ。健全な主従関係とは、少々いいがたい気がしなくもない。

「まあいいですよ。結果オーライで」

「そうでございますよ？」

「ほんと、お前は一回頭を打つべきです」

「いたみいます」

しばし沈黙。

「で、彼の能力はいかなのです？ パラ・ダイスの抑止力となりうるです？」

「それはもう、自信作でございますから。ほぼ不死身の再生力に肉体強化。しかもキングストーンまで内蔵とくれば、わが組織にもアレにかなうものは存在いたしません」

「そうかそうか。それはよくやったです」

再び、間。次いで、息を吸う小さな音。

「ばかです！ 勝てなくしてどうするです！ 本末転倒もはなはだしいですよ！」

「ですが、見とうございますか、悪に屈するヒーローなどというものを。正義の味方というのは勝ってなんぼでございます。本当

にお嬢様は足りない御方でございます」

「お前はつくづく馬鹿ですね。わたし達が何の組織か言ってみるです」

「秘密組織、株式会社パラ・ダイス。裏社会に知らぬものなきアングラ社会の雄にして悪事の遂行をその存在意義とする悪のそしき…

…はっ！」

「思い出したですか、馬鹿メイド？」

「まさか、こんなブービートラップが仕込まれていようとは、想定外でございました」

「お前の脳みそが想定外ですよ。ま、何にせよ私達もしっかりと悪事にいそしまなければいけないということですよ。健全な悪あってこそその健全な世界です」

「いままでも散々、生徒会長や天王寺美緒に邪魔されて悪者らしいことができてございませんからね」

「忌々しいやつらですよ。とくに邪魔なのはあの会長です。何です、アレは？」

人形のように整った顔が忌々しげに歪む。声音が幼いのでいかんせん迫力不足ではあるが、なかなか堂に入った仕草だ。

「むしろ、今後もあちらのほうが続く引き続き障害になりそうな気もするのでございますが」

華のそんな言葉も届かないほどに、紅葉は向かい側の校舎の一角、生徒会室が収められているあたりを睨み付けている。

「しかし、これで」

立ち上がり、気持ちを切り替えて表情を作り直した紅葉は、高らかに言い放った。

「秘密結社パラ・ダイス、本格始動なのですよ」

答えるように、風が吹く。

芝生を撫で、紅葉と華の頬を撫で、ついでに膝上丈の紅葉のスカートをめくって。

「お嬢様、今日はいつものではなく、勝負パンツでございましたか。

おいたわしや」

外見だけでは中学生どころか小学生にも見られかねない紅葉だが、ピンクのレースはまだ早いとは口が裂けても言ってはならない。乙女であることと発育は、関係ないのだ。

見る間に、耳もうなじも真っ赤にして顔を伏せてしまふ。そして、「こんな世界、征服してやるですよー！」

やけくそな叫び声は高らかに、春の空に飲み込まれて消えた。

「世界はね、悪に満ちていると思うんだ。でも同様に、正義にも満ちていると思うんだ」

昼休みにお弁当をつつきながら、唐突にそんなことを言い出すのは小豆だ。というか、小豆以外にこんな突拍子もないことを平然と言うやつなんていない。

「で、なんで会長は俺の机で飯食ってんだよ？」

「小豆でいいよ。真弘が逃げ出すのを防ぐためだよ。思い出してらんよこの二週間を」

食べかけの焼きそばパンをくわえて胸に手を当てる。

生徒会に強制参加させられてからの二週間は、波乱に満ち溢れた時間で埋め尽くされていた。その前の二週間については思い出したくもない。

東で不良が喧嘩と聞けば行って両者をぶちのめし、西で運動部がグラウンドの利用でもめていると聞けば行って両者をぶちのめし、南でタバコを吸っているやつがいると聞けばタバコもろともそいつをぶちのめした。

「ああ、ひたすらあんたが人を殴っている二週間だったよ」

「正義に犠牲はつきものだよ」

これを一切悪びれることなく、世の真理であるかのように言うのだから質が悪い。

「しかし、問題なのはそういう小さな問題よりも、あの全身タイツだな」

恐ろしい勢いで飯を頬張りながら、それでも口の中にものがある状態ではしゃべらないという律儀さを発揮する小豆が、このときだけは箸を止めた。

「ほかの小競り合いとか、諸問題とは違う、なんと言つか……」  
「なんと言つか？」

かじりかけた焼きそばパンをいったんとめて聞き入る。できれば早く食べたい。ソースの香りが鼻腔をくすぐる。

「組織的な悪意、というか、そういうものを感じないか？」

「何だよそれ、悪の秘密結社でもいるのかよ」

そう言つて、この二週間ほどで全身タイツの連中に遭遇した件を思い出してみる。

回数にして三回。週に一〜二回程度のペースだ。そのどれも取るに足りないもので、うち一軒などはほうっておいてもよかったんじゃないかと思えてしまうほどだ。

最初は真弘が生徒会に無理矢理組み込まれた翌日。

焼却炉近くでゴミをあさる不審者がいるという連絡を受けて駆けつけると、四名ほどの全身タイツが、資材ゴミをあさっていた

「あれ、よかったのかよ？ 何してるのかの確認もなしにぶつとばしてたけど？」

「あの外見は間違いないく悪だよ。問答無用だ」  
実に危険な思想に、ため息が漏れる。

二度目は翌週の金曜日。職員用の駐車場で教頭のトヨタセルシオにいたずらをしているやつがいるというので言ってみたところ、ボンネットの中に上半身を突っ込んでいる全身タイツがいた。

「あれ、後ろから思いつき蹴ったせいで車までぶつ壊れただろ。教頭泣いてたぞ」

「不可抗力だよ。あの程度で壊れる車が悪い。それに、そのための自動車保険だよ」

保険が降りたかどうかは定かではないが、一時期自転車を通っていた教頭は、最近ようやく車での通勤を再開していた。同じ車種を

買うあたり、かなり愛着があるらしい。

「で、昨日。自動販売機の下から小銭を拾ってるけつを蹴り上げたんだよな」

真弘はその場に居合わせなかったが、呼び出されて行ってみると白目をむいて倒れている全身タイツが一人いた。

「見るからに怪しい行為だったのな。せつかく自販機連続窃盗事件解決かと思つたのに全く関係がなかった」

「まあ、あのかつこで自販機の下のぞいてりや怪しいのは認めるが、声かけるよりも先に蹴るのはどうかと思うぞ」

「いちいち口上を述べている間に悪が行われては本末転倒だからな」  
焼きそばパンの残りを一気に頬張って、ごつくんする。一番好きなのはカレーパンだが、購買に売っていないとなれば仕方がない。

初めて聞いたときには心を打ち抜かれた気分だったが、今は何とか立ち直った。購買への投書は欠かさない。

「で、暴力による恐怖が支配する世紀末を俺に見せてどうしようってんだ？」

「真弘はなぜ毎日毎日毎回逃げ出すんだ？ もう少し正義会としての自覚を。おっと、正義会というのは一般生徒には内緒だった、生徒会役員としてのだね」

「ほざけ、あんだけ何でもかんでも拳骨で解決するさまを見せられりや、逃げ出したくもなるわ。一回も成功してないけどな。あと、正義会の件はたぶんばれまくってるぞ」

「僕から逃げようなんて百年早いよ。悪党を追いかけ続けてあらゆる逃走パターンに対応できるようになっているからね。まさか、ばれるわけがない。情報操作は完璧だよ」

「とうとう悪党認定だよ。それと、暴力で口封じすることを情報操作とは言わないからな」

ぼやきながら、テトラパックの牛乳に手を伸ばす。

「くっそー、コンビニ手前の自販機なくなっただせいで抹茶オレ買えなかったさ。おお、今日もラブラブさ。やるねえ、真弘も」

背中から「余計なことを言うな」というオーラを放射しながら一応振り返ると、そこには予想通りの人物が、ビニール袋をぶら下げて立っていた。

「購買、まだいいのあったのか？」

宗司は「うんにゃ」と、首を振りながら否定する。その割には何やらにやけているなと思っていると、

「だから今日は遠征してきたさ」

やけに得意げにビニール袋の模様を見せ付ける。

「あ、てめ、脱走してコンビに行ってきたのか！ くっそ、それならカレーパン頼んどけばよかった！」

口の中に残ったソースの香りも決して悪くはないが、やはりカレーパンにかなうパンなどない。みすみすそのチャンスを逃してしまったことが、とにかく悔しかった。

「おー、やっと帰ってきたにゃ。どれどれ？」

どこから湧いたのか、背後にいきなり現れた瞳が、コンビの口ゴ入りビニール袋の中を物色しながら顔をほころばせている。

「ふむ。富田よ、おぬしもなかなかわかってきたではにゃいか。ほめてつかわそう」

言いながら袋から取り出したのは、ピンクの文字でロゴが描かれた、白いカップ。

「あ、それは俺が食うつもりのイチゴ牛乳プリンさ！ それだけは」名前を聞くだけで胸焼けしそうな一品だが、その実さっぱりとした口当たりにはさわやかな後味という、満貫寺周辺で絶大な人気を誇るスイーツである。満貫寺を含む一色市でしか流通していないという曰くつきでもある。

「べー、すでに遅いにゃ。あららふたが開いて瞳さんに食べてほしそうにプリンがゆれてるにゃー。これは食べてあげるのが愛というものだにゃ」

喜色満面とはまさにこのことで、とろけそうな笑顔で瞳がカップを覗き込んでいる。

実にほほえましい光景だ。

ただ一つの要素を除いて。

「くー！ 俺がどれだけ苦労したと思ってるさ。ゲリラのように、  
隠密のよう」

「へえ。それは大変だったね」

宗司の顔が凍りつく。文字通り微動だにせずに、時が止まったように表情は動かない。おそらく思考も動いていないだろう。もしかしたら走馬灯が回っているかもしれない。

「僕の前で堂々と悪事を告白とは、覚悟はできているよね？」

ちなみに、校則で下校時刻前の外出を禁止しているのは言うまでもない。

広辞苑のような特大サイズの弁当箱から顔を上げた小豆は、鉄板面のような無表情でじつと宗司と、その手にぶら下がったコンビニロゴ入りのビニール袋を見つめている。

「瞳さん、フェードアウトにや〜」

密集する人垣をすり抜けるように遠ざかり、そのまま教室端っこの集団に合流する。

「さて、俺も。今までありがとう宗司。卒業写真にはちゃんと載せてもらえるように」

「待って、お願い、助けて、見捨てないでほしいさ。死ぬのはいやさ」

これほど悲痛な叫びを聞いたことがあっただろうか。教室にいた誰もが視線を伏せ、唇をかみ締めて胸の痛みに耐え、クラスメイトの冥福を祈らずにいられない。

「断腸の思いとは、まさにこのことだな」

「真弘、俺たちは親友さ！ な、だから」

「もちろん親友だ……永遠にな」

「いやさああああ」

悲鳴がこだまし、特大弁当箱が机に置かれ、

「そうさ！ 真弘は俺が脱走するのを知っていたさ。ということは、

それを容認した真弘にも責任が、いや、むしろ生徒会なのにそれをとがめなかった真弘の罪のほうが背任分上乗せで重いさ」

「てめえ！ 言うに事欠いて何言ってやがる！ 親友を売るのが」

「親友も命あつてのものだねさ。こうなったら地獄の釜の底まで付き合ってもらうさ」

「さあ、覚悟はいいか？ ふたりとも」

「ちくしょおおお！」

叫ばずにはいられない。

「だいじょうぶ。二度としないと誓うのなら、正義の鉄拳一発で許してあげるよ」

本来はずっと小柄な小豆の姿が、このときだけは見上げるような巨漢に見えたのは錯覚だとしても、押しつぶされるようなプレッシャーは紛れもなく本物だ。真弘はこの三週間で何度となく見てきたのだ。この圧力に心をへし折られ、次の瞬間に正義の鉄拳と証する殺人パンチで体をへし折られたものたちを。

その分リアルに、記憶の中の被害者と自分が重なる。

教室の中には、いるだけで胃に穴が開くような緊張感が充満していて、気の弱い女子生徒の中には貧血でへたり込むものまでいる始末だ。

「やあ、今日は間に合いました。二時間も授業が受けられます」

そんな空気に、唐突に穴が開いた。

昼休みに登校してきて『間に合った』と大真面目で言うのはもちろん住吉一郎以外にありえない。だれもが「またかよ」と思う登校姿だが、このときばかりはクラスの全員が心の中で大賛辞を贈っていた。

「住吉一郎！ また性懲りもなく！」

条件反射的に、小豆の意識が一郎に向けられる。

「あ、修学院さん、おはようございます。あれ？ どうして違うクラスなのにここに」

「僕の目の前で堂々と遅刻とは！ 今日という今日こそ」

「今さ！」

「応よ！」

もちろん、このチャンスを逃すような愚は犯さない。

完璧なコンビネーションで教室を飛び出し、示し合わせたかのよう  
に二手に分かれた真弘と宗司は、互いを振り返ることなく力いっ  
ぱい床をけた。とはいっても、さすがに最近は力の加減がわかり  
始めた真弘は、床を傷めない程度の力に調整をして。

「友よ、きつとまた会うさ！」

遠ざかる宗司のノリノリのせりふは、昼休みで賑わっている廊下  
で聞くには恥ずかしかったが、本人が楽しそうなのでよしとした。  
ただ、

（それ、死亡フラグだぞ、宗司）

と声には出さずに突っ込んでおいた。

「おりゃ！」

改造手術のおかげで頑丈になった体にものを言わせて、一気に踊  
り場までの数段を飛び降りて階下へと駆け抜ける。

踊り場の窓からこぼれる春の日差しが、頬に心地よい温もりを感  
じさせた。

昼休みの喧騒が漣のように届く階段を駆け抜ける。油断はできな  
い、相手はあの小豆だ。どこで待ち伏せていてもおかしくはないの  
だから。

「というわけで、俺は万全の対策を採るわけだ」

一階と二階の間の踊り場に差し掛かった真弘は、唐突に窓を開け  
放ち、窓の外に飛び出す。これまた体の頑丈さに物を言わせて飛び  
降りたのだが、タイミングが悪かった。

「おわっ！」

「な、なな、なん」

「うわあああああああ、あ、あ？」

ケツの下に感じる、人間としか思えない感触。どうやらヒップア  
タックを食らわしてしまったらしいことに気がついた真弘は、とに

かく頭を下げた。

「あああ、ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい……あれ？」

その中で目の前の三人に見覚えがあることに気がついた。

「えーっと……ども」

スリッパの色は二年生の緑色。入学一ヶ月で部活にも所属していない真弘が知り合う上級生というのは限られており、その大半は、「おい、おまえ、あの暴力馬鹿のつれだよな？」

小豆の正義活動の過程で知り合う、できれば知り合いたくない類の先輩方だ。

もちろんこの三名も、そういうことなのだろう。というか、そのはずだ。周囲に漂うや二くさい空気と、足元に落ちてい短い吸殻がそれを物語っている。

「えーっと、暴力馬鹿といいますと……」

「あ、おれぶつとばされる前を見た。こいつ、あの馬鹿の後ろにいた！」

どうやら言い逃れもできないらしい。万事休す。

「いやいや、このことはもちろん黙ってますし、今日はちょっと急いで」

薄暗い、いかにもといった感じの校舎裏。足元には目の前の三人（伸びているのも入れると四人だが）のものではない吸殻も、そこかしこに落ちている。

じめつとした空気が否応なく真弘の危機感をあおる。さすがに本気で殴り合いの喧嘩となれば、ある程度自分の身体能力を把握し始めている真弘にとっては、三人程度なら赤子の手をひねるようなものだ。が、できれば穏便に済ませたい。

（なんていうと、あいつにぶん殴られそうだけだな。ま、逃げるのが得策だよな）

じりじりと包囲の輪を狭める三人に、真弘は逃げ出せるように身構えながら後ずさる。

「ちようどいいところに。君達を成敗させてもらおう」

## 最高圧電撃

視線だけで退路を確認していると、そんな声とともに一つのシルエイトが現れた。日が差し込む校舎の向こう側から現れたので、その瞬間は逆光で誰だかわからなかった一同だったが、誰しもが同様に最悪の事態を想定した。

「げっ！」

声に出したのは真弘だけ。その他三人は完璧に恐怖におびえて声も出ない有様だ。よほどこっぴどくやられた連中のようだ。

「ん？ 何をそんなにおびえているんだい？」

一切の迷いが無い足取りや、見るものをひるませる存在感は小豆のそれと比してもなんら遜色はないが、明らかに違う箇所があった。圧倒的なまでの、完成されたプロポーション。

歩くたびに揺れる胸はブラウスのボタンをはじけ飛びそうに押し上げ、第二ボタンがあげられているせいでグランドキャニオンのような谷間がさらけ出されている。

一同の目が釘付けになる。先ほどとは違った意味合いで。  
「すげえ」

誰かが言つと、真弘を含めた三人は無言で首を縦に振る。

以前、彼女のプロポーションを評して『神の造形』と証したのは中学時代の美術部部长だが、その言葉は実に言いえて妙だった。

ただし、神は造形に力を費やしたぶん、その代償をしっかりと差し引いていたらしい。主に脳みそから。

「さて、では諸君、私の実験に付き合ってくれたまえ。大丈夫だ、今回の魔法陣を使った簡単な攻撃魔法だ」

残念きわまる発言が、同姓から羨望と嫉妬の視線を集めてやまない唇からこぼれる。はつきり言つて中二病を患っているとは思えない。かなり重度に。

ただし、これが天王寺美緒による発言ではなく、ここが満貫寺高

校でなければの話だ。

「さて、まてまてまてまて、話せばわかる！ な、タバコもやめる、だから」

必死になって拝むように手を合わせた不良その一は、有言実行とでもいうようにポケットから取り出したセブンスターの箱を投げ捨てる。が、実に大きな勘違いだった。

「タバコ？ ああ、そんなものは関係ないよ。そういう倫理的な話は門外漢でね。そういうのは生徒会長君にでも言ってくれたまえ」

正義や悪、そんな価値観は意味をなさないとでもいう、ある意味独善の頂点のような発言に、不良の手はタバコを投げたそのままに固まる。

「では、びりびり、っと」

言いながら、美緒の手の中には一枚の紙切れが現れ、風に揺れる。そっけない、抑揚のない一言とは裏腹に、世界の全てが振動しているような轟音が裏庭に溢れかえり、一筋の光がほとばしった。

「！」

四人の視界が、白一色に染まる。

雷に匹敵する大電力が、一本の柱となって地面に突き刺さった。電撃魔法とのことだが、まさに魔法の名にふさわしい大出力だ。

その衝撃は周囲の窓ガラスを軒並み砕き、職員室で起動中だったすべてのパソコンのデータが吹っ飛び、超々高電圧に耐え切れなくなったブレーカーが落ちたせいですべての教室の電気が消えた。

四人の目の前数十センチのところで、クレーターのように穿たれた大穴が空を見上げている。ぴりぴりと肌がひりつくのは、帯電した空気が四散しきっていないからで、産毛が総立ちになっている。

ついでにいうなら、真弘は鳥肌も総立ちだった。

（なんだ……こいつ？）

少し遅れて、頭上で木っ端微塵に砕けた窓ガラスが雪のように舞い落ち、きらきらと輝いて地面に落ちてくる。校舎から少し距離があったのが幸いしたが、それでも物騒な音を立てて碎けるガラス片

には、恐怖を禁じえない

直撃していれば間違いなく死人が出たレベルなのを、改めて突きつけるように。

「ん、成功だな」

満足そうに胸を張り、周囲を睥睨した美緒は望んだとおりの結果に頷く。

焦げ臭い空気に鼻腔をくすぐられ、真弘がようやく言葉を見つける。

「成功じゃねえ！」

「ん？ 君は生徒会の副会長君だね。どうしてだい？ これだけ立派に魔法が発動して」

「死にかけたぞ！」

へたり込むことも忘れて目をむいていた不良が、追従するように首を縦に動かす。

「おかしなことを言うね、君は。結果として無傷なのだから大成功だよ」

「あたってた……どうするつもりだったんだ？」

ごくりと、すぐ隣の不良がのどを鳴らす。どうなっていたのかなんて聞かなくてもわかる。問題は、美緒の「つもり」だ。その答え如何によつては笑えない可能性もある。

「むろん、速攻で回復魔法だ。うまくすれば事なきを得る。ほら、そのための回復魔法の陣もこのとおり、れ？ れれ？ どこにいった？」

どうやら、笑えない可能性大だったらしい。というか、むしろこの結果が奇跡の産物であることが想像に難くない。

「おい、あのな、いくらなんでも刃傷沙汰、っていうか殺生はどうかと」

「天王寺美緒、今のはお前の仕業だな！ あ、しかも真弘までこんなところにいる！」

頭上から振ってきた声に思わず視線を向けると、太陽を覆い隠す

黒い影が一つ飛び込んできて、そのまま、  
どすんっ

地響きと土煙を上げて目の前に降り立った。

言うまでもない。今度こそ小豆だ。

「今度は何をした？ 学校中が停電になったうえに窓ガラスまで！」

「なに、偉大なる実験に犠牲はつきものさ」

どっかで聞いた物言いだと思いながら、真弘はじつと二人のやり取りを観察することにした。純粹に面白そうだったからというものがあるが、それ以上にここで働いたのは本能だ。生存本能という、実に単純な。

「それに、彼だったらこの程度の電撃、痛くもかゆくもないだろうし影響もないだろう」

「いや、痛くもかゆくもあるぞ」

「もちろんだ、これは正義のためなら命も惜しまずに差し出す優秀なメンバーだからな」

「まてまて、おかしいおかしい。そういうのはまず自分が率先して」

「ほう、さすがに生徒会長君が自らスカウトした人材だけはあるね、頼もしい限りだ」

「もしもーし」

真弘の声は残念なほどに二人に届かない。いや、届いたことなど今までにもなかったなと、改めて思い出してちよっとだけ泣きたくなった。

「何をたくらんでいるのかは知らないけど、僕達正義の生徒会、略して正義会の前にお前のような悪の魔法使いは無力なんだよ」

「ふんっ、正義だの悪だのと、私はそんな茶番に付き合っているほど暇じゃないんだよ」

ノリノリのきめきめで、自衛隊の勧誘ポスターのようなポーズをとった小豆の口元が吊り上がる。愛嬌のある黒目がきらりと輝いたかと思うと、

「というわけで真弘、アレは僕たちの敵だよ」

「なんでそうなる！」

思わず突っ込むために立ち上がったが、小豆の表情は曇り一つ見せない。それどころか、謎の根拠に裏打ちされて自信に満ち溢れている始末だ。

「アレが正義に見えるか？」

本人の意思そのものにまっすぐ伸びた指の先では、これまた自信たっぷりに美緒がほくそ笑み、まるで小豆に見せ付けるようにたわわな二つの水蜜桃を押し上げている。

体型以外はまるでコピィのように共通点たっぷりの二人。

「まあ、正義には、見えねえかな」

率直な感想を口にする。実際、美緒の姿は正義の魔法使いというより、二つ名のとおりの魔女といった具合だ。とくにその不遜な表情など、まんまだ。

「はは、相変わらず君は二元論で動くのだな。まあ、君の言う正義ではないことは否定しないよ」

「だったら悪だ！ 力を正義のために使おうとしない者は特に！」

「それも悪くはないね。君を相手にすれば、それこそ手加減なしに魔法実験が可能だ。ただ、君の隣にいるその彼にも、同じことが言えるかな？」

「何のことだ？ わけのわからないことを言っでないで、かかってこい！」

先に突っかけたのは小豆だった。

力いっぱい地面を蹴りつけ、湿った土を巻き上げて弾丸のように加速する。一連の動作を追っていなければ、瞬間移動したように見えるほどの大加速は、コマ落としのように小豆の体を美緒の懷にねじ込ませ、

「長年の決着だよ。さあ、おとなしく出頭を」

「ざーんねん」

屈伸の要領でひざを跳ね上げ、体格に似合った小さな手のひらが美緒の腕に届くその瞬間、ほくそ笑んだのは美緒のほうだった。

どこかから取り出した紙切れが一枚、二人の間に割って入るように揺らめき、

「うわっ！」

すると、美緒の体が手のひらをすり抜けるようにして、上方に跳ね上がる。

飛びやがった。跳躍の方ではなく、明らかに重力を無視して浮いている。ここまで来るともう魔法の實在云々という議論よりも、魔女という二つ名の信憑性について議論せざるを得ない。もちろん、本当に魔女だったのでしよう、といった具合に。

「さて、君に関わるのはさすがに得策ではないのでね、このあたりで退散させてもらうよ。くれぐれも追わないでくれよ」

見上げる五人の目の前で、相変わらず不適で不遜な笑みを浮かべたままの美緒は、すいすいと空中を歩いていつてしまう。まるでそこにガラス板でもあるかのような、空中散歩。

さすがにこれには度肝を抜かれたのか、あの小豆でさえもが呆然とその姿を見送るだけだ。不良一―三号に関してはもう、魂が抜けたようにあほ面を晒すだけだ。

「待つ」

かろうじてそれだけを言いかけた小豆に、足を止めた美緒が振り返る。

「そうそう、君の正義を貫くというのなら、もう少し敵を見る目を養わないとね。輝くものすべて金に非ず。同様に、悪事をなすものすべて悪にあらず、だ」

「なんだと？」

文字通り見下ろしている美緒の口元は意地悪く歪み、対照的に小豆の目元には明確な敵意が浮かんでいる。わかりやすすぎるコントラストだ。

「文字通りの意味だ、他意はないよ。それと……」

ちらりと視線が真弘に移される。

思わず身構えはしたものの、何ができるわけではないことなど先

刻承知の上だ。

「ふふ、君には興味がある。またどこかで」

「ふざけるな！ これは僕のだ！ 誰が渡すものか！」

「え？ や、あの、小豆さん？」

唐突な言葉に真弘の青春センサーは不覚にも反応してしまう。夜寝る前に思い出して、枕に顔をうずめて悶え苦しむレベルの不覚だ。

「ほほう、それは愛の告白と受け取ればいいのかな？」

「な、なな、な」

見る間に耳まで真っ赤にした小豆が、自らの失言を悔いる間もなく美緒は続ける。

「では、今回彼が下からパンツをガン見していることについては、黙っておいたほうがいいね。ちなみに今日は気合を入れてオキ二なので、しっかり目に焼き付けたまえ」

「言ってんじゃねえ！」

思わず絶叫して、慌てて口をふさぐ。これでは認めているようなものだと思ったが、後の祭り。それまで美緒に固定されていた小豆の視線が、ものすごい勢いで真弘をロックオンする。視線だけで人が殺せると言われても信じられる。

高笑いと共に去っていく美緒の背中を追う、という選択肢も用意されてはいたのだが、いささか目の前の問題が重大すぎて、微動だにできなかった。

「まあーひいーろくくーん」

いつもの無表情だが、その仮面の向こう側にある何かが、今ははつきりと透けて見えていた。

殺意だ。

「ちょっと、打ち合わせをしようか。今後の生徒会の方針について」「いや、そうだな、そういうのはまた後日ゆっくりまったりと時間のあるときに。ほら、魔女王がにげてしまうぞ」

「いやいや、何事も先手必勝、手遅れになる前に早急にだね」

「いやいやいやいや、小豆さん、ちょっと待ちましよう？ ね？」

殺人は罪なんですよ」

「大丈夫、ちよつと記憶を失ってもらっただけだよ。部分的に、ピンポイントに」

「ちよつ！ 一体何を？ 記憶って」

「さあ、大丈夫だ。正義に犠牲はつきものだ」

昼休みの裏庭に、悲痛きわまる絶叫がこだまする。人間の悲哀と、愚かさ、矮小さを詰め込んだような、みじめな絶叫。

その叫びにこだまするように、近くでもう一度、電撃の柱がほとばしる。

後日談ではあるが、この光景を見ていた不良三人はその後数日欠席したかと思うと、唐突に髪を黒く染め直して登校し、ただ一言「不良、やめるわあ」と魂の抜け落ちたような声で呟いたと言う。

これもまた、ある種の正義である、といえはご都合主義だろうか。

## 最大トラブル

「また君たちかね？　あまり夜遅くに何度も人の部屋を訪ねるとい  
うのは、あまり感心しないよ。特にうら若き乙女の部屋ならなおさ  
らだ」

「誰があなたの部屋でございますか？　ここはれっきとした学校の  
施設、ひいては鹿王家の所有物でございますよ。そして」

こほん、とわざとらしく咳払いをして続ける。

「金輪際、乙女などという戯言を努々ぬかしやがりませんようお氣  
を付けくださいませ。あなた様は決して乙女などではございません  
断じて」

ゴシツクロリータを連想させるメイド服に、仮面舞踏会の様な仮  
面をつけてはいるが、この場においては意味を持たない変装だ。

「メイド君も大変だね、足しげくこんな場所に通わされて。それと  
ここは私の部屋だ」

「それがお嬢様のためとあらば、私にとっては朝飯前でございます」  
楚々と立ちつく姿は一輪の花を連想させるが、それが仮面をつけ  
て深夜の校舎にあるとなれば何やらオカルト的なものを感じてしま  
う。

「しかも今日はそのお嬢様までおいでとは。よほど本気らしいね、  
君たちも」

読書灯だけのついた薄暗い部屋の中、本に落とされていた美緒の  
視線が向けられたのは、その一輪の花の隣。こちらも花が咲いてい  
るような美しさを感じさせたが、隣の楚々とした雰囲気とはまた違  
う、華やかさを振りまいている。

ただし、それは顔に関してだけで、シルエットは全く花とはい  
がたい。何せ、イカの着ぐるみだ。実に良くできていて、魚介類特  
有の腫の感じや、うねうねとランダムに動く触手が無駄にリアルだ。  
そのイカの胴体の真ん中に開いた窓から、切実な視線を投げかけ

る。

「話していた件、考えてもらえないですか？」

メイド服の華と比べて体格も小柄で、声も幼いので、それこそ姉妹か、下手をすれば親子に見えなくもないが、こちらも仮面をつけているのでそのアンバランスさが現実感を損なわせる。仮面というものを持つのに、美緒はほくそ笑む。

「考えたよ。オーケーだ。先日借りもあるし、帳消しになるのならやむなしだ」

「マジでございますか？」

えらくそつけなく言い放ち、再び興味なさそうに本に意識を戻した美緒。対して、驚きを隠しきれない華は仮面を引きむしるように外して素顔を晒す。それもそのはずで、ここ数週間足しげく通い詰めていたにもかかわらず、頑として要望を突っぱねられ続けていたので、どうせ今日もダメだろうと半ば以上諦めていたからだ。

そこにきて、昨日までが嘘のような快諾である。

「何か、企んでいらつしやいますね？」

疑わざるを得ない。そういう性分だ。そうしなければ、守れるものも守れなくなってしまう。信ずるより疑え、騙されるよりも騙せ。権謀術数にまみれた世界で紅葉を守り抜くために身につけた、半ば本能となりかけている教訓が鎌首をもたげる。

「失敬だね君も。まあ、確かにここまで百八十度言うことが変われば私でも信じないな」

「だったら」

「簡単なことさ。面白そうだからだよ」

視線を本に落としたまま、美緒の口元がゆがむ。

「おもしろ、そう、って」

「ふふ。いいじゃないか。しかもこの件にはあの正義の味方君まで絡んでいるときている。となれば、賽の目一つでどんなことでも起こりそう、そんな気がしたのさ」

パタリと音を立てて本を閉じ、立ち上がる。

「今日、この目で確認してきたよ。なかなかどうしていいじゃないか。ね」

魔女の名に恥じぬ笑みは怖いほどに綺麗で、傲慢さに溢れている。「なにやら乗ってはいけない誘いのような気もしてきたですが、こちらとしては願ったりかなったりなのですよ」

「まあ、実際に叶ったりなのかどうかはわかりませんが」

余計なことを言うな、という目で睨みつける紅葉の視線を華麗に受け流し、華は続ける。

「私どもといたしましたは、ただお嬢様のご意志に従うのみです」

「じゃ、決まったね。ふふ、面白くなってきた。大好きだよ、面白いことは、ふふ」

さすがにこの時点で紅葉も、何となく頼む相手間違えたな、という気がしまくっていたが今さらだ。乗りかかった船から降りる方法は、どうやらないらしい。

「人生は不安定な航海、とはよく言ったものだ。そうは思わないかい、正義の味方君？」

かくして、満貫寺高校全土を巻き込むことになる一大犯罪の幕は、深夜の部室城の一室で静かに切って落とされたのである。

当事者の大半をカヤの外に残したまま、ゆつくりと船は走り出す。

「じゃ、あれが最後のびつくり人間だったわけだ」

窓から見下ろしているのは昼休みの中庭。思い思いの場所で昼食を広げる生徒達に交じって、明らかに浮きまくっている一団が視界に入ってくる。というか、否応なく視界を占拠する。

「ま、他の三人とは明らかに色は違うけど、あれも立派にびつくり人間さ」

小豆の制裁を恐れ、コンビ二への遠征回数を減らすことにした宗司が、購買部で購入したパックのオレンジジュースに口をつけている。

「たしかにな。学校の昼休みに優雅にお茶会なんて、びつくりだわ

な」

ぼんやりと男二人で廊下に並んで窓の外を見下ろす様というのも間抜けだと思いつながら、窓枠に肘を乗せて体重を預ける。見下ろす先にあるのは、真っ白なパラソルと、そこを出たり入ったりする数名のメイド服。何やら終始忙しくティーパーツやカップを運んでいる。

「なんせ、この学校の唯一の出資者であり、最高意思決定権保有者の孫ってんだから、そりゃ超ド級の金持ちだろうとは思っさ。しかし」

半ばあきれにも似た宗司の視線から、意図をくみ取る。

「ああ、ありやすげえな。もう、別世界の生き物だ」

住む世界が違うというのが、ただの修辞表現ではないと思わざるを得ない。

「しかし、あの鹿王と面識があるとは、真弘の手の早さはもはやびつくり人間の域さね。噂じゃ、あの天王寺にまで手を出したとか」「ばっ！ そんなんデマに決まってるだろ！ それに、その話はすんな！ 絶対だ！」

「何でさ？ 何かまずいさ？ お前が天王寺を狙ってるって」「しーーーーー！」

人差し指を鼻先に立てて黙らせる。ポーズの親しみやすさと裏腹に、必死さがこぼれ出している。

「ほう、いい度胸だね、真弘。やっぱり天王寺と」

背後からの声は、振り返らなくても小豆のものであることが分かる。耳ではなく、恐怖に怯えた本能がそう告げている。

「いや、何言ってるんだよ小豆。そもそも俺はあいつに襲撃されて、危うく殺されかけて」

「吊り橋効果ということもある。やはりもう一度、念入りに記憶を消しておいた方がいいようだね。正義の味方が悪に心を奪われるなどあってはならな」

「まてまてまて！ 何故襟が掴まれて、お前は頭突きの準備に入っ

ている！」

「決まっているじゃないか、僕の頭突きで君の記憶を叩きだすのさ」  
頭を振りかぶり、流し眼でギロリと獲物を確認し、あとは全力で叩きつけるだけとなったところで、

「かいちよーお、大変にやよお！　こんなとこで油売ってる場合じやにやいによだー」

噛み気味に叫んで駆け寄ってきたのは、瞳だ。

舌つ足らずな喋りでも、必死さはちゃんと伝わるから不思議だ。

「千里山さん、どうしたんだ？」

『大変』の一言にちゃんと反応するあたり、さすがは正義の味方だが、とにかく真弘は命拾いをした。一気に汗が吹き出し、腰から下の力が抜けて、その場にへたりこむ。

真弘のそんな様子にいつもなら茶々の一つも入れる筈の瞳が、この時ばかりは目もくれずに小豆に飛びついたのだから、よほどの一大事なのだろうと男二人も息をのむ。

「す、住吉君が、住吉君がうご、動かなくなつて、いき、いき、息もして」

「落ち着いて。住吉がどうしたんだい？　遅刻以外に何をしでかしたんだ？」

そう言えば、昨日の美緒による電撃事件のどさくさで忘れていたが、昼休みに来たはずの一郎の姿を、あれ以来全く見ていないことを思い出す。遅刻こそすれ、登校した後は比較のおとなしく教室にいる男だと思っていたので、意外ではあった。

パニック映画のワンシーンのようにあわあわと慌てる瞳を、背中をさすってなだめる姿は実に生徒会長然としている。こういう姿を見ると、頼れる会長なのだと実感できる。

「息をしてなくて！　しん、しん、で！　裏庭、で！」

辛うじて聞き取れた内容に真弘が驚く間もなく、廊下に嵐が吹き荒れた。

瞳のセリフをそこまで聞いて、小豆は床を蹴った。といえただ

のスタートダッシュにしか聞こえないが、そこは小豆の脚力である。爆発でも起こったような勢いで体は飛びだし、巻き起こった風圧で女子のスカートは捲れまくり。狂喜乱舞と阿鼻叫喚を一枚の絵にかいたような光景が繰り広げられる。

「うわ、さすがは会長さ。生徒のピンチには問答無用さね」

「相手が誰であれ、な」

そこは素直にえらいと思う。住吉一郎といえば、小豆にとっては仇敵もいいところのはずだ。それこそ思春期真っ最中の女子なら、不幸を笑っても心配などしないとされてもおかしくないほどだ。

なのに小豆は、躊躇も逡巡もなく、ただ己の正義に従って駆け出した。

「で、真弘も心配で仕方がなくせに照れが邪魔をして燻っている、ってわけさね」

「ちょ、なに心読んだ風なことやってんだよ！ ちげえわ！」

「叫ぶのは凶星だからさ。くふ、真弘も怖い外見の割にまだまださ」先ほどの小豆の代わりにと、瞳の肩をさすっている宗司が意地悪くほほ笑む。口角をいっぱいにつり上げる笑い方は、童話に出てくるチエシヤ猫を連想させる

「外見怖いゆーな。それに、俺が行くのはまたあとでごちゃごちゃ言われてぶっ飛ばされるのが嫌だからで、心配なんかしてねえからな！」

「はいはい、さっさと行け。千里眼が落ち着いたら俺らも行つてやるさ」

「こんでもいい！」

悪態をつきながら、結局真弘は走り出していた。どこに行けばいいのかなど考える必要もなかった。とにかく悲鳴を追いかけていけばよかったのだから。

「正義がそれでいいのかよ？」

苦笑交じりにそういう自分の顔が、どこか楽しそうだと言われても、もちろん真弘は否定しただろうが。

ともかくも、そこらじゅうで「見た」「見てない」という修羅場の炎が燃え盛る廊下を駆け抜ける。爆風スカートめくりの主犯と同じ組織に所属する人間としてはいささか心苦しかったが、それでも校舎を抜け、裏庭へと抜ける通路に足を踏み入れる。

自転車通学の生徒が駐輪場からの近道として利用するその通路は、登校時間以外は人通りも少なく、校内の数少ない静かなスポットでもあった。

「おい、会長。何かいた……か」

薄暗い校舎裏を抜け、角からひよつこりと顔を出した真弘が最初に見たのは、まさに惨状としか言いようのない光景だった。

「おい、あずき……」

最初に目に入っただのは、呆然と立ち尽くす小豆の、小さな背中とツインテール。

その向こう側に、隕石でも落ちたのかと思うようなクレーターと、その中心から生えた、人間のものとは思えない下半身。

「犬神家ごっこ？」

## 最狂変人

「あずき、珍しく冗談言うのはいいんだが、タイミングわりいわ」  
しかし、そんな冗談を言いたくなる気持ちもやむなしなその光景は、まさしく名作推理作品のワンシーンを彷彿とさせる。それほど見事に、突き刺さっていた。

「まさか、これが……」

瞳の言葉からは、裏庭で一郎がえらい目にあっているのだろうことはわかったが、まさここまでとは、真弘の想像のはるか斜め上だ。

「だろうな。スリッパに名前が書いてある」

「うわ、ご丁寧な話だな……」って、このスリッパ焦げてねえか？」

よく見ると、スリッパだけではなく制服の裾にもかすかに焦げたような跡が見受けられたが、状況のインパクトにそうした冷静な観察がおろそかになってしまう。

それは小豆も同じようで、いつもならもうちょっと慎重なはずが、  
「とりあえず引っこ抜いてみようか」

と、おもむろに歩み寄り、無造作に天に向かって突き出された足に手を伸ばす。

「にしても、何でこんなところに突き刺さって」

「うわあ！」

「ど、ど、どしたあ！」

小豆の悲鳴という予想外すぎる展開に、真弘は完璧にビビりきって大きく飛び退る。何せ、あの小豆の悲鳴である。天地がひっくり返る方がまだ落ち着いていられる。

「ビリって、ビリってきた！」

「ビリって何だよ？ 毒か、毒なのか？」

「いや、どちらかという静電気のような、痺れる感じがしたんだけど」

と、その小豆の一言に真弘の中で思考の糸がどこかにつながる。周囲に堆積している空気の匂いや、じっとしているだけでも産毛がピリピリとするような感覚が、ごく最近の記憶の中から掘り起こされ、線でつながる。

「もしかして、雷でも落ちたのか？ いや」

決め手になったのは、一郎（ほぼ間違いない）の下半身を中心に形作られたクレーターだ。これと同じものをほんの二十四時間ほど前に目にしている。不良三人組と一緒に。

となると犯人は、

「雷だな。ってか、電撃魔法って言った方がいいのか？」

さすがに言い切ってしまうには証拠が少なすぎたが、昨日の今日でこれを見せられた真弘の中では、半ば確定事項として犯人の顔がよぎる。

「で、お前は魔女のパンツを思い出している、というわけだ。いい度胸だよ、ほんと」

「何を言つとるんだお前は！」

「いや、これは大事な話だよ！ いい機会だ、はつきりさせよう。

真弘はあれか？ ああいうぼんきゅっぼんで不敵なのが好みなのか？ それとも」

「まてまてまてまて！ 思いつきり脱線しとる！」

「していないよ、今これ以上に大事な問題なんて」

「あるだろ！ 目の前に、明らかに、でっかい問題が！」

詰め寄る小豆のプレッシャーに壁際まで追い詰められた真弘は、苦し紛れに犬神家状態の下半身を指差し、絶叫する。

それが合図になったかどうかはわからないが、それまでじっと動かなかった足がゆらゆらと揺れ、どさりと音を立てて倒れてしまった。残念なことに、その動きに生きた人間の意志を感じることはできなかつたが、上半身が引っこ抜かれたおかげで誰の下半身であったかが明らかになった。

間違いなく、住吉一郎その人だ。

「こりゃ……もう」

その続きは言葉にできなかった。何となく、してはいけない気がした。

開ききつた瞳孔に、微動だにしない手足。固まった表情は人形とはまた違う生々しさだが、生気を感じることはできない。

こういつときに冷静な行動ができるあたりも、生徒会長たる資格とでも言うのだろうか。小豆は落ち着いた足取りで近づき、

「真弘は先生を。僕は念のために脈やこきゅうのかくに」

駆け寄り、感電しないようにハンカチを持った小豆の手が一郎の肩に触れた瞬間、

「……」と、小豆。

「。」と、真弘。

首がもげた。ぼろっ、と。

言葉はなかったが、絶句というコミュニケーションがこれほど重く、また深い理解につながるとは思ってもみなかった。

「も、もげ、もげ、もげ、くびくびくびくび」

もう駄目だった。

「先生を呼んでくる前にまずは首をくつつけなければいけなくなつた。技術室からボンドを取ってきて」

ふっきたのか、恐ろしいほどの冷静さを発揮した小豆だったが、何やら一周してしまった感がなくもない、とは真弘の主観だ。

「ん？」

「どしたんだよ、小豆？　ってか、人体はボンドじゃ」

「これ、見る」

無造作に手を伸ばし、無残にも転がっている一郎の頭に手をかけた小豆。

「ちょ、まてまて！　お前いくらなんでもそれは人道に反する」

「いいから！」

思わず目をそむけた真弘の顔を鷲掴みにし、力ずくで目を開かせる。

小豆の力に抵抗できるはずもなく、むき出しになった眼球の前に晒されたのはもげた首の断面で、そこには

「うあああああ、あ、あ……あ？」

真弘の考えるグロくてえぐいものは一切なく、あるのは金属質な輝きやビニールにまかれた配線類。奥の方にLEDのような明かりもちらちらと見えている。

何であるかはわからないが少なくともこれが人体の、というか、生物の中身ではないことは明らかだった。

「機械？」

「だな。どう見ても人類ではありえない。とんでもない奴だとは思っていたが、まさかロボットだったとは。驚きだ」

小豆はもげた首と、それが元々ついていた胴体を交互にみて、「ふむ」と一息。

「どうするべきだと思う？」

さすがの小豆もこれの対処を即座に考える、というわけにはいかないらしい。表情もいつもの自信満々のものではなく、陰りと迷いが塗りこめられている。

「まあ、普通に考えたら……普通に考えたら……普通って、なんだ？」

「普通ということとは、とりあえず正義であるということだ」

かくして、昼休み終了のチャイムが響くまでこの無駄な問答は延々続けられることとなったのだが、結局まともな解答には至らなかった、という残念な結果だけをここに記す。

遠くに六時間目のはじまるチャイムを聞きながら、真弘と小豆がたどり着いたのは、一軒の住宅。これと言って特筆する要素のないごく普通の建売住宅だ。田舎にありがちな無駄に広い庭が門の向こうでは、きれいに手入れされた緑が、午後の日を浴びて輝いている。「ここで、あつてんだよな？」

チャイムを押す前にもう一度確認した表札には『葉迦杜』とある。

「そのはずだ。職員室のデータベースで検索してきたので間違いはない。この名前だ」

「昨日の今日でよくデータ復旧できたな。天王寺の魔法のせいでデータ全部とんだんじゃないかったのか？」

「どうやら外部サーバーにバックアップがあっただけで、そちらでヒットがあつた」

一郎の扱いに苦慮した二人が最終的に到達したのは、「一郎の保護者に報告する」という、実にオーソドックスな方法だった。さすがに、いきなり職員室に壊れたロボットを持って言つて、「クラスメイトが壊れました、実はロボットでした」なんて言つたところで、こちらの頭が壊れていると思われるのが関の山だ。

それならまだいいが、へたをすれば一郎の立場やなんかも危うくなるかもしれない。そこまで考えたのは小豆で、真弘は単純に「学校で死んだら普通は親に言うよな」ぐらいの感覚だった。

ともあれ、方向性は決まつたのだが、そこで新たな問題が浮上した。

クラスの誰一人として、一郎の自宅を知るものがいなかったのだ。しかも校内連絡網には何故か一郎の自宅は、住所も電話番号も記載されておらず、間の悪いことにポケットから引っぱり出した一郎の生徒手帳は黒焦げという有様だった。

万策尽きたかに思われたときに実力を発揮したのが小豆だった。

自信たつぷりにほほ笑み、五時間目も始まっている校舎をずんずんと歩いて向かつた先は職員室だった。

「結果オーライとはいえ、教頭泣いてたぞ」

「正義のためだよ。教師の体裁とクラスメイトの安否。秤にかけるまでもない」

その意見には全力で同意する真弘だったが、だからといって教職員専用の端末を半ば力ずくで立ち上げ、無断でデータベースを閲覧するのはいかかと思わなくもない。

背中に背負つた特大リュックサックの中で、一郎の体がガチャリ

と音を立てる。死体を背負っているようで不気味だったが、真弘は必死になって『背負っているのは機械だ』と自分に言い聞かせ続けた。

「というわけで」

ぴん……ぽーん

チャイムの音がかすかに家の中から漏れ聞こえ、しばらくの間をおいてインターホンがつかがる。

『はい、どちらさまでしょう？』

落ち着いた雰囲気女性の声。警戒心を前面に出しているが、日中のこんな時間の、予期せぬ来訪者に対してはごく普通の対応だ。「私たち、満貫寺高校生徒会のもですが、住吉一郎君の件で伺いました」

こちらはいつも通りの堂々とした態度に、実に丁寧な物腰という、生徒会長として百点の対応を小豆が見せる。日頃の独善じみた物言いがなければこんなにも印象が違うものかと、感心してしまう。そんな真弘の関心をよそに、小豆の表情は少々険しい。返事がないのだ。ただ、インターホンそのものはつながっているらしく、微かなノイズが聞こえたままだ。

通常の会話ではありえないほどの間が空いたので、もう一度呼びかけるべきかと小豆が動く。

「あの」

と、それを見計らったかのように、

『裏の方へお回りいただけますか？ はなれの方に主人がおりますので』

『主人』という物言いに、一介の、しかも自分の息子が通っている高校の生徒にこんな言い方をするものだろうかと首をひねったが、不毛な思考だと考えるのをやめる。

「おー！ 何だ君たちは？ 何かの押し売りか？ それとも宗教か？ だったら吾輩にそんなものは無用だぞ。なぜなら吾輩は科学以外を崇拜する気はないからなわはははは」

「どわあ！」

いきなり背後から、でかい声で話しかけられた。

腰が抜けるほどびっくりしたが、小豆も同じように驚かされたように、臨戦態勢を取って構えている。

「お？　ん？　見たところ満貫寺の学生のようなだが？」

そこにいたのは、漫画から飛び出してきたような、絵にかいたような科学者。それも、頭にマッドを付けたくなるサイエンティストだった。

ぼさぼさの頭にとんでもなくレンズの分厚い黒ぶち眼鏡。よれよれの白衣の裾はぼろぼろで、所々に焦げたような汚れがある。

「あなたは？」

警戒心バリバリの小豆が、先ほどのインターホン越しの会話が嘘のような口調になる。

「吾輩か？　おかしいこと言う、君たちの方が吾輩を訪ねてきたというのに、その上で尋ねるのかな？」

どこかすつとぼけた口調だが、本人はどこまでも真面目なようだ。「私たちは、満貫寺高校の生徒会です。今日は、その……住吉一郎君のことで」

珍しく会話の勢いに押されている小豆が、何とかいつもどおりに自己紹介をする。

「おー！　あの悪名高い生徒会か。わははは、しかしいいぞ、吾輩は自らの信念にまつすぐなものは大好きだ。それになに？　今、住吉といったか？　イチゴウのことか？」

（やっぱ悪名高いんだ、小豆のやつ）

「いちごう？」という疑問符は浮かんだが、だみ声なのでそう聞こえたのだろうと、話を続ける。

「その一郎君なんですが、その……何と言いますか、ですね」

どう説明したものかと真弘が言いあぐねていると、

「おたくの息子さんが、壊れました」

「をいっ！　お前、ものには言い方ってもんがだな」

「なんと！ あの、あのいちごうが壊れたと？ なんとなくなんと！ 一大事だ！ して、いちごうはいずこに？」

（またいちごうって言ったな）

「息子さんはこちらです。で、どうしたものかと」

ガバッとリュックの口を開け、真弘の体ごとマッドサイエンティストに差し出す。

間近で見るとますますマッドな感じが伝わって怖かったが、男の目はリュックの中をしげしげと見つめている。

かと思うと、おもむろに「うむ」と頷き、

「あいわかった。今回は特別に、この葉迦杜丞はかもりじょうごうしやう一郎博士のラボにご招待しよう！」

そう言つて、こちらの返答も待たずにマッドサイエンティストは意気揚々と歩きだす。

どんどん遠ざかる白衣の背中を呆然と見送りながら真弘は、隣で同じように呆けている小豆に視線を向ける。

「葉迦杜、丞一郎だつてさ。行くのか？ 住吉じゃないのか？」

本音としては九対一で行きたくない。

「しかないだろうね。これを見ても驚かないってことは、どうやら僕たちよりも真相を知っているだろうからね。あつ」

「なんだよ？ この期に及んでなんだよ？」

既に歩き出していた小豆が、足を止めずに言う。

「親御さんに会つのだから、手土産の菓子折でも持つてくるべきだったな」

こいつは間違いなく大物だ、と痛感しながらリュックを背負い直す。

遅刻王の修理のために破壊王が歩くというシュールな光景に、真弘はそろそろ自分が普通の高校生活を送れないことを実感し始める。もちろん、遅すぎるのだが。

## 最小恋愛フラグ

案内されたのは、先ほど二人がインターホンを押したのとは敷地を挟んだ反対側。

というところでもない距離に聞こえるが、たつぷり二十分は歩かされた。

「何だこれ、むっちゃくちや遠いぞ」

「たしかに、広い敷地だな」

どこまでも延々と続くんじゃないかと思える長い長い壁沿いに歩き、ようやくたどり着いた入口の向こうに顔を見せたのは、いくつもの小高い山だった。

ある所からは冷蔵庫が顔をのぞかせ、ふもとには電子レンジが転がり、てっぺんにはどう見てもロケットかミサイルかというような物体が突き刺さった、人工物の作りあげた山の数々。

ジャンクヤードというやつだ。

「うへっ、すげえ数のゴミだな」

「ゴミとは失敬な！ これは立派な資源、宝の山なのだぞ！」

うっかり口を滑らせた真弘の言葉を拾った葉迦杜博士は、たしなめるような口調でそう言って、手近な山から何かを拾い上げる。

「たとえばこれだ。一見ただの電気ポットに見えるがその実」

たたたっ、っと駆け出して少し離れたところにポットを置き、ポタンを押してから今度はえらい勢いで走って戻ってきた。

しゅごごごごごごごごおおおお……

とんでもない大音量とともに、目がくらむような光で、一瞬全てが白く染まる。

びっくりしすぎて、目玉がこぼれおちるんじゃないかというほどに目を向いた真弘が見たのは、白煙の尾を引きながら一直線に天に昇ってゆく、電気ポットだった。

「というように、簡易型の軍事衛星なのだよ」

「何でポットなんだよ！」

「ポットは優秀だよ。断熱性、密閉性に優れ、なおかつカップラーメンまで作れる」

「いみわかんねえし。小豆も何で「ふむ」なんて頷いてんだよ」

「いや、こういう発想の転換もあるのかと、少々感動して」

「ねえよ！」

「さあ、何をやっているのだね？ 君たちはいちごうのことで話があったのだろうか？ 来たまえ」

今飛ばしたポットになどまるで興味がなさそうに、葉迦杜博士は小山の間に埋もれるようにして建っている小屋の入口から、ひよいひよいと手招きをしている。

既に辟易とし始めてはいるものの、ここまで来てあとに引くこともできず、真弘は呼ばれるままに小屋に足を踏み入れると、そこはまるでSF映画から切り取ってきたような、機械が山と詰め込まれた部屋だった。

広さにして二十畳以上はあるのかというスペースだが、手狭に感じるほどに壁という壁を何かの電子機器が埋め尽くし、外のジャンクヤードも顔色なからしむる勢いで雑多にものが置かれていた。ただし、こちらは何に使うのかわからないものばかりだ。

「まあ座りたまえ。ふむ、こりやひどい、よくここまでコテンパンにできたものだ」

いつの間にか葉迦杜博士はリュックを広げ、中から無造作に頭やら腕やらを引っ張り出しては渋い表情を浮かべている。

「う、うえ？ いつの間に、え？」

背負っているリュックがなくなっていたのに全く気づかなかった真弘は、慌てて周囲を見回すが、隣にいた小豆にもわからなかったらしく、首を振るばかりだ。

「僕たちが見つけた時にはもうその状態で。その、雷にでもうたれたのかも」

「いや、これはただの雷ではない」

じつと首の断面や足首のパーツを見つめていた葉迦杜博士は、おもむろにそう言つと、何かを考え込むように口を一字に結ぶ。しばらくは抱え上げた顔とにらめっこをするようにじつと黙りこくつていたのが、結論が出たようで、おもむろに口を開く。

「こりゃ、魔術の類だな。電氣的なエネルギーだけではない、純粋なエネルギー体による破壊の跡も見られる」

「そんなもの、見ただけでわかるのですか？」

「吾輩を誰だと思つておる、小娘。この程度朝飯前よ。しかしそうかそうか、それならさすがのいちごうも耐えられないか。ふむ、改良の余地が」

「あの」

思わず真弘が声をかけると、これまた意外そうな顔で葉迦杜博士は振る。

「ん？ おお、おお、失敬失敬。つい夢中になってしまったよ。いやいや、まずは礼を言わねばならんな。いちごうをここまで運んでくれたことに」

「その、一郎君のことなんですが」

放つておくとマイペースにどんどん喋りまくると思つたので、ちよつと乱暴だとは思いつながらも、会話に割り込みをかける。

「ロボット、なんですか？」

まさかいきなりこんな確信を突く質問をしてしまうとは、自身でも思つていなかった真弘は、聞いた直後に自分が地雷を踏んだことを理解する。小豆が「馬鹿」と口の動きだけで言つて、眉間を揉んでいる。

リカバリーのために何を言ふべきかと必死に頭を巡らせるが、その間もなく、葉迦杜博士が手にしていた首を作業台において立ち上がる。

ごくりと喉を鳴らすが、口の中はからからで唾も飲めない。無言の迫力に自らの失態を全力で悔いていると、

「すごいだろう？」

「へ？」

「いや、だからすごいだろう、と。こんなにも精巧なロボットを作るって、吾輩はすごいだろうと聞いているんだよ。すごいと思わないかね？」

「え、ええ、まあ」

「わははは、そうだろうそうだろう。しかし、その私も完璧ではなかったというわけだ。うゝむ、満貫寺には魔道を使う魔物までいるのか。これは早急に対策を」

「あの……一郎君は、なおるんですか？」

この場合『治る』だろうが『直る』だろうかなんてことを思いはしたが、どちらでも同じなのでどうでもいい。

「なおる」

「へ？」

「いや、だからなおるかと思われたから直ると答えたのだ。吾輩を誰だと思っておる？」

「いえ……」

あっさりした回答に拍子抜けしたが、何となく大丈夫な気がしてくるから不思議だ。

「ときに葉迦杜博士」

「何だね生徒会長？ 君も機械の体がほしいのかね？」

「けっこうです。それよりも、なぜ一郎君はロボットで、学校に通っているのです？ 会長として、ある程度のことは知っておきたいのです」

他の人間がこれを言うに興味本位以外の何でもないように思われるが、小豆の場合は百パーセント善意でそう言っているのがわかる。その程度には自分が小豆と一緒にいることに気がついた真弘は、ちよつとだけ悲しくなった。

もう抜け出せない。

「なんだ、そんなことか。実に単純な質問だ。満貫寺だからだよ」「うちの学校、だから？」

「ああ、満貫寺だからさ。あの学校は色々あるからな、こういう存在がいても許容されるだろうし、それに」

「それに？」

真弘だ。興味本位であることは否めない。

「あの学校には色々あるからな。わははは、こういう戦力の一つや二つは配備しておつてもいいだろう」

思わせぶりだが、それ以上は語る気はないようで、再び作業台の上に意識を戻す。

「戦力については我々生徒会だけで充分ですが、博士は何か御存じなのですか？」

「充分なんだ」

「まあ、ここをこうして、電源は……これでいいわい。ほれ」  
突き刺すような小豆の視線も涼しい顔でスルーし、葉迦杜博士が首に何やら施すと、

「やや、どうしたことでしょう？ ああ、これはご無沙汰しております、お父さん」

首が喋った。

「うむ、いちごうよ、死んでしまうとは何事じゃ」

どこかで聞いた、というか、見たことのあるやり取りだと思いいながら呆然とする真弘の前で、会話は実に淡々と、しかし確信にえぐりこむように続けられる。

「面目次第ありません。気がつけば予備電源も全て馬鹿になってましてね。いやはや、往生しました」

「彼らが見つけなければ本当に往生するところだったぞ。まあ、往生したところで吾輩のところにくればいつでも生き返らせてやるがな、ぬはははは」

「これはこれは、いつもお世話をかけます。帝塚山君に修学院さん命というものを深く考えさせられる会話だが、さすがにこれ以上は見えない。」

「まあ、なんというか、無事でよかったよ。いや、無事でもないの

か？」

「まったく、遅刻どころか欠席したと思ったら、まさか死んでいるとはな」

「え？ 欠席？」

小豆の一言に慌てた一郎は、きよろきよろと目玉だけで室内を見回す。

「あわわわ、もう六時間目が始まる！ これは一大事です、欠席になっちゃいます！」

「そこかよ！」

「いえ、大事なことです。勉学は学生の本分ですから、疎かにすることはできません」

「僕の前でよくそれが言えたものだね、遅刻王」

父親（というか、制作者か？）の目の前で吐く暴言にしてはなかなかひどかったが、葉迦杜博士は唸るばかり。天才というのはやはり凡人には理解しがたいものようだ。

「帝塚山君、なんとか私の頭だけでも教室に持っていってもらえませんか？」

「たぶん教室だけじゃなくて世界がひっくり返るからパスだ」

当然だが、この世界にはここまで精巧な人型ロボットを許容する地盤はまだ出来上がっていない。パニックどころか、一郎自身の安全も保証できないというのが実情だ。

それに、

（学校にはよくわからん組織もあるみたいだな。こういうのは極力秘密の方がいいんだろうし）

「そうだぞ。それに、お前の力を悪用しようとする悪の秘密結社が……はっ、そういうことかあ！」

相変わらず独走というか暴走というか、火のついたロケット花火もかくやという勢いで飛びだした小豆の姿は、あっという間に見えなくなる。遠くから何やら「点と点が線になったあ」という叫びが聞こえたが、もちろん無視だ。追いかける気も最初からさらさらな

かったので、そちらはなかったことにして、真弘は葉迦杜博士と一郎に向き直る。

「では」

「うむ、いちごうのことは任せておきたまえ。これでもかというほどに強化した、最強のバージョンアップをお見せしよう。表面はルナチタニウム合金、骨格はムーバブル」

「いや、そういうのはいいですから、普通に直してください。たぶんそのままでも充分強いですから。それより、さっきからずっと一郎君のこと、いちごうって呼んでますけど、もしかして」

最初は聞き間違いか発音の問題かと思っていたが、こつも毎回だとさすがに気づく。

「おお、これは私が開発した人型ロボットの正式一号機だな」

やっぱりという感じだが、これが一号機というのだから凄いとか言いようがない。

「アップグレード後は対魔道用の最終決戦兵器だ。期待しておれよ、ぬはははははは」

「ぬはははははは」

何故お前も笑う、と突っ込む元気はもうなかったが、一郎に関しては大丈夫そうだと踏ん切りはついた。となれば、真弘が追いかけるのは、今や暴走特急となってどこかに突撃を続けているであろう上司だ。

「じゃ、お願いしますよ。ちゃんと直してくださいよ」

もうこの辺りになると、脳内での漢字変換が「直す」であることに違和感を感じなくなっていた。

高笑いの響く小屋をあとにし、ジャンクヤードを見渡すと、春らしい柔らかな日差しが各種ジャンクを照らしていた。そのさわやささが、今の真弘には唯一の救いだ。

「さて、正義の味方出勤だ……したくねえ」

最後の一言は、魂が絞り出した本音だ。とは、死んでも小豆に知られてはならない。

六時間目の終了を告げるチャイムを聞きながら、真弘は学校から少し離れた道をのんびりと歩いている。

「間に合ってもろくなことなさそうだしな。君子危うきに近寄らず、だ」

意味があるのかないのかわからないことを言いながら、ぼんやりと空を見上げる。春特有の薄い雲がゆつくりと流れていた。

ただ一つ、確信を持って言えることを胸に秘めて。

今日の放課後は、荒れる。

飛び出していった小豆の勢いが何よりの根拠で、あれほど燃料が投入された小豆が問題を起こさないはずがない。胸を張って言える。「言いたくねえけどな。いつそ俺が悪の秘密結社にでもなつてあいつ止めるかあ？」

「本当です？」

どこから聞こえたのかわからない声に、それまでの静けさに慣れていた意識が波打つ。

「本当に、悪の秘密結社に入るつもりですか？」

やばい。まず最初に感じたのはそれだった。この展開はまさに死亡フラグ。バキバキと拳を鳴らす小豆が現れて問い詰められるところまでが想像できてしまった。

「いや、その何と言うか出来心と言いますか……もちろん俺の心は正義一色で」

冷や汗をうなじに感じながら、ダメもとで言い訳を考えたところで、目があった。

視線の高さでは小豆とさして変わらないが、こちらを見つめる瞳の色に思わず吸い込まれそうになる。

先ほどまで見上げていた空よりも、なお深い青。

「聞いているですよ。本当の本当に、悪の秘密結社なんかに入ります？」

よくよく思い出せば喋り方も特徴的で、小豆とは全然違う。これ

を小豆だと思ってしまうほうが難しいのだが、自分がどれだけパニックっていたのかがよくわかる。

「あ、えと……鹿王、さん？」

「はいです。それよりも、本当に悪の秘密結社に入って、悪いことするですか？」

純粋な瞳はどこまでもまっすぐで、心の一番弱いところに突き刺さるようだ。

しかも、両サイドに控えるように立っているのは、満貫寺の制服こそ着ているが、明らかに「友人」と言うよりは「お供」といった感じの、すらりとした長身の女子。本当に同い年なのかどうかすら怪しい。ネコ科の肉食獣を思わせるしなやかな足に息を呑む。

そんな状況でこの子にへたなことを言えば殺されかねないのは、本能で察する。

「え、や、まさか。そもそも悪の秘密結社なんて子供向けの特撮じやあるまいし、冗談だよ冗談。はははは」

乾いた笑いを浮かべるしかない。

笑いながら、自分の体を改造した組織を思い出したが、当然口になどするはずがない。言ったところで、冗談として受け流すか頭がおかしいと思われるのがオチだ。

紅葉の問答無用な美少女っぷりに、宝石のような瞳や、果ては絹のように艶やかな髪が華を添えている。そんな完璧な美少女を相手に、自分が悪の道に走ろうとしているなどと言える筈がない。むしろ、真実だとしてもこの子にだけは言ってはならない。

「そうですか、冗談ですか……」

(ん?)

情けなく笑う真弘に対して、紅葉が一瞬だけ残念そうな表情を見せたような気がしたが、それを汲み取るほどの時間はなかった。

「それよりも、て、帝塚山、君は、生徒会の人ですよ？」

名前を呼ぶところで声が裏返ったが、真弘はその真意に深く突っ込むことはせず、ただ自分の名前のややこしさを詫びるばかりだ。

そんな紅葉の不憫さに、片方の御付きはハンカチを取り出して「よよよ」と泣き真似をし、もう片方はスカートをまくって、ガーターベルトに装着された実に物騒な何かに手をかけていた。共通しているのは、目が完璧にカタギじゃないことだ。

「そ、そうだけど。それが、どうした？」

ここで選択を誤ると、取り返しがつかなさそうだったので、回答には慎重を期した。

「では、早く行ってあげた方がいいです。会長さんが、修学院さんが、屋上に呼び出されていたですよ」

「マジで？」

当然だが、ここで真弘が案じたのは呼び出された小豆の身ではなく、小豆を呼び出した何者かの方だ。まあ、小豆に殺人を犯させないという意味では小豆を心配したことになるのかもしれないが、それは副次的なものでしかない。

「屋上だな！　ありがと、のんびり行ったら手遅れになるとこだったよ」

「あ、あの」

「ありがとなー。この礼は後日必ず！」

走り去った背中を、紅葉がどんな顔で眺めていたのかを知る由もない。

ただ、あとわずかばかり御付きの女子生徒の忍耐力がなかったら、真弘は二秒で蜂の巣、三秒で挽肉だった、と記すのみにとどめる。

## 最大落差

願ったりかなったりの光景が目の前に展開されていた。

程良く晴れた穏やかな日差しに、自分たち以外には誰もいない屋上。

自分と、自分を取り囲む十数名の全身タイツ。そして、そいつらを統率するように正面に仁王立ちしている一人の女性。どういう趣向なのか、その女だけは黒を基調としたゴシックロリータなメイド服に、なにやら仮面らしきものをつけている。

「とうとうお出まし、だね。」

メイド衣装とは趣向の異なる、口元から上を覆うような鳥の嘴のようなデザインのマスクだが、そのミスマッチ加減が程良く相手の存在を謎めかせている。

「まるでこうなることが予想できていた、というような口調でございますね」

「予想も何も、僕にはお前たちが悪の秘密結社なのは最初からわかっていたよ」

「これだから、何でも力で解決なさる御仁は、恐ろしゅうございませう」

「僕に正義がある限り、真実は僕とともにあるよ」

レーザーでも出そうな勢いで指を突き出し、自信満々に胸を張るが、残念なことにその辺のボリュームに関しては完敗だ。相対する先では、隠しても隠しきれない盛り上がり、モノトーンの衣装に華を添えている。

「名乗ってもらおうか。お前たちは何者だ？」

気分は特撮ヒーローそのものだ。ギロリと、周囲の全身タイツを睨みつける。

残念なことに、コンパクトなボディに黒髪ツインテールでは自身が想定している半分も迫力は醸し出せていないのだが、それを言わ

ないのもオヤクソクだ。

「うふふ、そういうノリ、嫌いではございませんわ。ではこうしましうか、聞きたければ実力で聞いてもらんなさい、と」

「ベストな回答だね」

たがいに想定しているものは同じようで、どうやらここから先は説明は不要のようだ。

「さあ、コテンパンになさい！」

こちらもどうやら乗ってきたようで、わざとらしく腰をくねらせたかと思うと、どこから取り出したのか、鞭を振りまわしている。

「い、いでえっ！」

ただその扱いは決して巧くはなく、というか下手くそで、振りまわした先端が手近にいた全身タイツの顔面を直撃して、ノックアウトしている。まずは一人目。

「上等だよ。では……まかり通るよ」

まさに、その言葉の通りになった。

まかり通った、としか思えないあとに残されたのは、死屍累々。

転落防止の柵に、避雷針に校内放送用のスピーカーに、果ては貯水タンクにまでぶら下がった全身タイツ達は、誰一人として意識がないという惨状だ。

「地獄だ」

最後の一人がもろにボディを蹴りあげられ、くの字に折れたところに現れた真弘には、その一言しかなかった。

「真弘、遅い！ 正義はすでに実行済みだぞ」

「どう見てもそのセリフと状況が一致しないのは、毎度のことながらすげえわ」

「そうか？」

わずかに口角をつり上げて、ほほ笑む。

この何気ない仕草が真弘には意外であり、驚きだった。

出会った当初は、氷のような無表情で自らの主義を貫くのみだった小豆。そこに何か超越したものすら感じた真弘だったが、今の小

豆はそれが薄れている。

そして、その分どこか、

「楽しそうだな」

「僕はただ、僕の正義を信じているだけだよ」

そういう顔にも、以前にはなかった表情が浮かんでいる。

こういう状況だからなのか、それとも別の要因が小豆を変えたのかは定かではないが、小豆の見せた笑みに、真弘は何を言うつもりもなかった。

ただ「こんな顔で笑うやつだったんだな」と、思うだけだ。

「あとはお前だけだよ、メイド。聞かせてもらおうか、君たちの組織のことや、目的を」

怪我どころか汚れ一つ食らっていない小豆は、スカートをなびかせて一步を踏み出す。

屋上の風は春先とはいえまだ肌寒いのに、この場所だけは熱気に満たされているようで、じつとりと背中が汗ばんでシャツが張り付いている。

まさか小豆の体温ではあるまいと思いながら、否定しきれない真弘は苦笑する。

「あれ？ あんた」

と、思いもよらない再開にうつかり口が滑ってしまふ。

（しまった、こんなこと言うと小豆に勘づかれる）

「ご無沙汰しております。お元気そうでなによりでございます」

恭しく頭を垂れたメイドは、仮面越しの視線なのに、微笑んでいるのをわからせると言う妙技を見せた。

「知り合いか？」

「あ、いや、ちょっと、な」

「その話は後でじっくり聞かせてもらおうよ。というか、まさか……」  
メイド服に向けられていた鋭い視線が、くると真弘に向き直る。

「真弘もあいつらの構成員だった、なんてオチじゃないよな？」

ぶんぶんと言がするほどの勢いで、真弘が首を振る。

「めっそうもない！ 断じてそのようなことはございません！」

仮にそうだとしても、ここでそうだと言えは待っているのは間違  
いなく死だ。何があっても首を縦に振るわけがない。

「ご安心を。彼と我々は無関係でございますよ……まだ」

「まだ？」

「は、話を続ける」

真弘の動揺がよほどおかしかったのか、仮面の下の口元だけでく  
すりと微笑み、メイド服は続ける。

「しかし、予想していたとはいえ、そのはるか斜め上に行く奮闘ぶ  
りでございますね。さすがに感動すら覚えますわ」

「悪党に感動されても嬉しくないよ」

互いに余裕しやくしやくな表情だが、メイドの方からはさらにま  
だ奥の手があるとも言いたげな、底の見えない余裕が垣間見えて  
いる。そのせいか、小豆も一步を踏み出せずにいるようだ。

「ようございます、約束通り正体を明かしましょう。私たちは『秘  
密結社パラ・ダイス』。世界征服にも人類抹殺にも興味はございま  
せんが、歴とした悪の組織でございます」

自称悪の組織。そういえばあの夜もそんなことを言っていたかと、  
再び思いだす。というか意識的に忘れていたのだが、真弘はとりあ  
えず事態を静観することにした。

「というわけで、先ほどは『まだ』と申しましたが、私たちが必要  
としておりますのはそちらの殿方」

優雅さを感じさせる動きで、白い手袋をした指先が動く。艶めか  
しさを感じさせる色っぽい動きだが、不思議と下品ではない。そん  
な指先が、迷わずに真弘に向けられる。

「残念ながら、うちの副会長は」

「そちらの、不死身の殿方でございます」

いつも通り自信満々な小豆の口が止まり、息のつまる音まで聞こ  
える。

「さあ、こちらにおいでくださいませ。あなた様が必要なのでござ

います」

「真弘？ 命が惜しければ正直に」

「し、し、知らん！ 俺は断じてその組織の人間なんかじゃない！ それに、もしそうだとしたらあっちもあんな物言いするわけないだろう！」

嘘は言っていない。何ともこざかしい言い回しをしたものと、自分の小物っぷりが情けなくなるが、命あつての物種だといつかの夜のような言い訳を、心の中で連呼する。

「ならどうしてあいつが真弘の不死身を」

「そうそう、会長様にもお伝えしなければならぬことがございまして」

「なんだ？ 今忙しい」

表情の変化が乏しい割には、小豆の言葉はやけに刺々しく怒気を孕んでいる。

そんな、満貫寺の生徒なら土下座して命乞いをするような状況をもっともせず、メイドはスカートを翻してフェンスに歩み寄る。

「あちらに見えます銀色の自動車ですが、爆薬が仕込んでございましてですね」

指差した先にあるのは。トヨタクレスタ。保険が下りて新車になったという、教頭のいわくつきの車なのは有名だ。が、今はそのことはさておく。

「このボタンを押して」

エプロンのポケットからシャーペンのようなものを取り出し、その頭に親指をかける。

「三分後に爆発いたします。では」  
カチッ

「貴様、卑怯だ！」

「悪の組織です。さあ、いかがなさいます？ 真偽のほどはさておき、もしも私が嘘についておりません場合、ここで私と問答しておりましたら三分などあつという間。この下校時刻にあんな場所

で爆弾が爆発すれば、おわかりですね？」

「くっ」という呻き声に近い声をあげた小豆だったが、決断までは一瞬だった。

「真弘！ 僕があれを処理する間、ここは任せた！」

言いながら足はすでにフェンスを乗り越え、風にスカートを捲りあげられるのも気にせず立ち上がる。淡いピンクが目には鮮やかだ。

「おい、何するつもり」

「真弘、僕は信じているぞ！」

それだけ言っ、飛び降りた。

「ちよっ！ おい、あずきっ！」

フェンスに駆けより、突き破るような勢いで顔を押し付ける。

目の間に繰り広げられているのは、雑技団顔負けの軽業だった。

飛び降りたと同時に一瞬だけ屋上の縁石に手をかけ、落下速度を殺しながら次の階へ。再び加速したところで一つ下の階の窓枠に、その次は壁に雨樋を止めている金具にといった具合に、次々に手足を引っ掛けてうまく勢いを殺しながら、あっという間に地面にたどり着いてしまう。

この間約数秒。

「すげえ……」

スーパーマン、さもなくば野生のサル。どちらにしても人間の域を超えた身体能力であるのは間違いないが、それにしても目の前で起こったことが信じられない。

「ほんとうに、想定の変か斜め上を行かれる方ですわね。これですから恐ろしい」

同じくフェンスから地上を覗きこんでいるメイドも、口元には素直な驚きが浮かんでいる。想定外の度が過ぎたのだということがよくわかる。

「彼女に関しては何が起ころうともおかしくはございませんので、この際無視いたします」

「同意だ」

「というわけで、あなた様のお話に移りましょう。改めまして、ご機嫌麗しゅう」

再び、先ほどもよりもさらに礼をつくした動作で頭を垂れる。その姿はメイドというよりも、どこぞの貴族のようだ。

「ああ。おかげで色々大変なことになってるけどな。主に、あの正義の味方のせいで」

「あのような子供っぽいピンクの下着がお好み、ということ？」

「そっちじゃねえだろ。何でおれの周りは、パンツ見せる女ばっかなんだ」

（まあ、いやな気はしないけどな）

「ですが、それも今日まで。これより、秘密結社パラ・ダイスの秘密の計画のために、御身をささげていただきます」

微動だにしない立ち姿を風が撫でると、草原で風になびく花を連想させる。仮面が甚だ違和感を与えるが、それもまたアクセントだと思えるから不思議だ。

『パラダイス』という悪党らしからぬ名前に、言い知れないかがわしさを感じ取った真弘は、わざとらしく顔をゆがめる。

「秘密結社の、秘密の計画、ね。悪の臭いがプンプンだな」

「かぐわしゅうございましょう？ 特にあなた様のように、ご自身の弱さを意味嫌いながらもそれを言い訳に何もなさらない方には」

『どいて！ 生徒会長命令だ！ グラウンド中央を開ける、早く！』

どこで手に入れたのか、拡声器越しの小豆の声がここまで響いてくる。見ると、宙に浮いたクレスタが水平移動していくところだった。当然、小豆が持ちあげているのだが、拡声器を持っているので、車は片手で支えているわけだ。真弘には、もはや言葉はない。

「なんのことを」

「中学三年の秋、でございますよね」

ずきりと、真弘の胸に痛みに似た感覚が走る。

思い出したくもない、不愉快な記憶の波がざわめく。

「私どもといたしましてはあのような行為そのものは許容致しかね

ますが、その結果あなたの中に芽生えたであろうもの、これは、評価に値いたします」

「やめろ」

どす黒く、自分の腹の底が塗り固められていくのが見えるようだった。吐き気に似た不快感がこみ上げる。自分の中がゲロと、それと同じ成分でできた記憶だけになる。

「結局はだれも救えなかった。結局は、あなたが一人疎まれることになった。正しいことなど、この世においては無価値なのだと悟られた。すばらし」

「やめろ！ 何知ってんのかしらねえけど、黙れ」

踏みつけたアスファルトが、放射状にひび割れる。

「その御顔でございますよ。それこそ我が組織に相応しゅうございます」

『ほらそこおー！ もつと離れて！』

相変わらず拡声器越しの声が聞こえたかと思うと、

『どおっせえええい！』

どおおおおお……………つずずずず……………

衝撃波に似た振動が空気を伝わり、続いて地響きが足元を揺さぶっている。

「三分、でございますね。彼女は立派に正義の味方でございますね、忌々しいほどに。というわけで、私の持ち時間は終了でございます」  
先ほど同様に恭しく礼をすると、あるうことか小豆と同じように、フェンスを乗り越える。翻るスカートから見えるのは艶めかし太ももに、白のガーターベルト。

「あなた様は、我々とともにあったほうがよろしいのでは？ 私どものご主人様も、そうお考えでございます」

それだけを振り返りもせずと言って、ふわりとスカートを膨らませて飛び降りる。

「まあいずれ、あなた様は我々のものになりますかね」

もう飛び降り行為自体に異常性を覚えることもなかったが、真弘

の目はじつとメイドのいなくなったフェンスを見つめて、離せなかった。

いや、実際にはフェンスなんて見てはいない。ただ自分の中にあふれかえった、もう忘れていた、忘れたことしたはずの記憶を踏みつぶす作業を続けているだけだ。

「不愉快だ」

トラウマと対面させられた不快感に、目の前がくらくらした。

再び踏みしめた床が、もう一度放射状に砕け散る。先ほどよりも深く、広く。

背後の空に、狼煙のように爆煙が立ち上っていたが、どうでもいいことだ。

「で、お前は散々挑発して、拳句に心の傷を抉ってきたですか」

「それはもう、錆びたナイフで生肉を切りつけるようにこりこりと窓一つないその部屋だが、間接照明の柔らかい明かりに照らされているおかげで暗さや閉塞感を感じない。むしろ部屋の広さが錯覚されて、実際以上に広く感じる。」

そういう設計になっているのだが、部屋の主にとってその程度のことは当たり前だ。そういう環境で育ってきたからなのだが、おかげでその贅沢さには気づいていない。

「まったく！ お前はどれだけアホです？ それでもしこちらに寝返ってしまえば、誰が我々の抑止力として」

「しかし、お嬢様としては願ったりかなったりでございましょう？」

「そ、そりゃもちろんあの人がすぐ傍にいてくれれば、そりゃ、うれし（ごによごによ）」

小さな体をさらに小さくして、もごもと言い淀む顔はもう真っ赤だ。うなじや耳まで真っ赤なのだが、残念なことに今日はイルカのコスプレをしているので、そこは見えない。手を動かすと胸ビレがパタパタと動くのが可愛らしい。

コスプレ衣装が海産物縛りなのに、特に理由はない。

「そうすればお嬢様の稚拙な、もとい、純情かんな乙女の恋心も  
じょうじゅ」

「お前の本音が見え隠れするのが腹立たしいですよ」

「恐縮でございます」

ささやかな膨らみを上下させて、小さくため息をこぼす。隣に静々と寄り添っているメイド服姿とは物心つく前からの付き合いだが、いまだに距離感をつかみかねることがある。

「それはさておき、本筋の計画のほうは順調でございましょうか？ 私といたしましては、お嬢様があのお方のことばかり考えて忘我の境地に至り、拳句の果てにろくすっぽ指示も出さずに呆けていらつしゃったのではないかと気が気ではございませんでした」

「垣間見えるどころか、とうとう本音を直球で言葉にしましたですね。その豪胆さだけは買ってやるです」

「恐縮でございます」

しかも、あながちその指摘が間違いでなかったのがなおのこと腹立たしい。ちよつと夢うつつになつていたところを、部下の一人に指摘されなければ、華が帰ってくるまでの時間を夢と妄想に費やしてしまつたかもしれないとは口が裂けても言えない。それはそれで悪くもなかったのだが。

「ともかく、発動に向けてのキーはそろつたですが、魔法陣の発動まではユ努々油断するなです。生徒会長とキングストーン、この二人が敵である限りは」

無数の靴音が閉じられた空間に響く。

紅葉の眼前に広がる、体育館ほどの広さの空間。そこを埋め尽くすほどの全身タイツが、一糸乱れぬ動きで踵を合わせていた。

それを睥睨する、イルカの着ぐるみ。表面処理に関しては本物と見分けがつかないほどの艶やかさと生々しさだ。

秘密結社パラ・ダイスの計画は、いよいよ最終段階に突入する。

「で、お嬢様、本日の下着も勝負下着で？」

「おまえ、あとでちよつと屋上来いや、です」

クライマックスに向けて、  
まずは悪の組織から、  
加速を始める。

## 最終？ 確認

「で、一つ聞きたい」

振り上げられた小豆の拳が、ぴたりと止まる。

本来ならそのまま扉に叩きつけられ、ノックという名の打撃兵器となつて扉をぶち抜くところなのだが、今回はそうならなかった。

「何だ、珍しいな」

真弘は、質問があることにではなく、ノックを途中で止めたことに対してそう言った。

「何で意気消沈してるんだ？」

拳をそのまま軌道修正してお前に叩きこむぞ、という感じで睨みつける小豆。唇を尖らせて、拗ねたように頬を膨らませている。

何がそんな気に食わないのか真弘には皆目見当もつかないが、小豆にも自分のもやもやした気持ちの正体はわかつてはいない。

「なんでもねえよ」

「ある」

半ば真弘の言葉にかぶせるように小豆は断言する。真弘のことなのに、何故か小豆が断言すると、そちらの方が真実味を帯びる。

「あるに決まつている。僕が言うんだから間違いない」

まっすぐに見つめる小豆の視線に、物理的な重さを感じたかのように真弘は後ずさつたが、意を決して手を伸ばす。

「ねえつたらねえんだよ。ほら、それよか目的は天王寺だろ。問い詰めんだろ」

わざとらしいとは思いながら、これ以上追及される責め苦を受け続けるぐらいならと無理やり事態を動かすことにした。わざとらしくすぎて、小学生でもその裏に何かあることに気づく誤魔化し方だ。

「誤魔化した」

小豆の言葉を聞き流したふりをして、ノブに手をかける。扉にかけられた札はまだ真新しく、鮮やかな色のマジックで『魔法部』と

書かれている。よく言えば味のある字、ありていに言えばへたくそ極まりない字だ。とても高校生女子が書いたとは思えない。

「天王寺、いるか？」

この呼びかけも手なれたもので、魔法部が問題を起こすたびに小豆と連れ立って（正確には、力ずくで連れて来られているのだが）訪れているのだ。そして、

「勝手に入るぞ」

返事がないことも百も承知だ。部室で研究に没頭している美緒は、声をかけたぐらいではその集中力を途切れさせることはない。

相変わらず雑多にものの詰め込まれた部室内は足の踏み場もない始末で、辛うじて部屋の主が残したのであろう足跡をたどることで、部屋の奥に踏み入ることができる。

以前、勝手にものを掻き分けて進もうとしたときに、「勝手なことをするな。この部屋の物を動かすと宇宙の法則が乱れるぞ」と淡々と、しかし妙に圧迫感のある声で言われたのを思い出す。本当だとは思えないが、否定もできないのが怖い。

薄暗くて、学校施設の中とは思えない、異世界のような雰囲気。例えるなら、化学部と博物館とオカルト研究会を一緒くたにして色の濃いところだけを抽出して押し込めたような部屋。

何度来ても、この雰囲気慣れることはない。

「おい、てんのう……じ」

背中に突き刺さるような小豆の視線から、逃げるようにして本棚の奥を覗き込む。

「はい？」「あれ？」

いつもならたわわすぎるほどに実った二つの果実が飛び込んでくるアングルのはずだが、今日に限ってはやけに小粒な木の実が見えた。二つ。くるとまん丸いその目は、野苺のような赤と、ブルーベリーのよう鮮やかな青。

左右で瞳の色が違うのを何と言ったか思い出せずにいると、背後から小豆が追いついてきて、さらりと答えを言ってしまう。

「オッドアイとはめずらしい。しかし、天王寺はいないようだね」  
きよろきよろと見回して、他に誰もいないのを確認する。

「ってか、誰だこの子？ 初めて会ったけど、天王寺の妹とかそんなのか？」

「あれに兄弟はいないよ。一人っ子だ。しかも両親は海外暮らしだとかで、今はどちらかの御実家に住まっているはずだ」

生徒会長情報網は、あの天王寺美緒さえも漏らしてはいないようだ。

（ある意味、これが一番恐ろしい能力かもな）

「ってか、あいつの場合は部屋に住んでんじゃねえのか、半分以上」  
「かもしれないね」

そう言って部屋のアちこちを見回すと、格納された電気ポットやカセットコンロ、果ては飯盒と言ったようなサバイバルキットの類が散見される。

「あの……お兄さんたち、なにか御用？」

二人のやり取りに警戒心を包み隠さずに溢れさせた少女が、上目づかいに尋ねる。

小豆よりも一回りほど小さな体格に、幼い顔立ちは紅葉といい勝負に見えた。小学校高学年といったところだろうか。もちろん、この推理過程が比較対象の二人にばれた場合に、真弘が抹殺されるのは確定だが。

しかし何より目を引いたのは、少女の服装だった。

ついさっきまでゴスロリメイド服を見ていた真弘にも、この服のインパクトはあまりに衝撃的だった。シルクやサテンのような艶やかな生地ワンピースで、スカートは大きく広がってヒラヒラ。過剰なまでにレースで装飾されており、胸元には顔が半分ほど隠せてしまうほどの巨大なりボンが華を咲かせている。

言ってしまうと、日曜朝の魔女っ子番組に出てくるような服だ。

「俺達はこの学校の生徒会だな。ちよつとここの部長に用事があったんだ。どこに行ったか知らないか？」

少女はフルフルと首を振るが、やはりまだ警戒は解けていないらしく、唇を一文字に結んで、じっと真弘を睨むようにねめ上げている。

「こら、子供になんて口のきき方をするんだ。怯えているだろう」

「あ、すまん。じゃなかった、ごめんな」

ふるふると少女は首を振る。どうやら多少警戒は解けたようだが、それにしても標準よりは人見知りというか、引つ込み思案であるらしい。こうして話している間も、ずっと本棚の影に隠れるようにして真弘らの様子をうかがっている。

「君は小学部の子かな？　だめだよ、勝手にここに入っては」

「うつん、いいの」

子供らしい高めの声音だったが、緊張のせいか声が震えている。

「悪いこと言わねえから、逃げたほうがよくねえか？　悪い魔女に眠らされるぞ」

あながちこれも冗談と言いきれないところに、美緒の持つ特異性を実感させられる。

「いいの、だいじょうぶ」

少女はそう言うと、胸元できゅっと手を握って黙りこんでしまう。こうなれば、引き下がるほかはない。ここで待つと言うのも、少女に悪いように思えたからだ。

「そう。じゃ、僕たちは行くね。天王寺が帰ってきたらよろしく」

「よろしくって、なんて言うておいてもらうんだよ？」

「その無駄に大きな胸をはずかし」

「わーあーよろしく、よろしくなー！」

とても小学生に聞かせる内容ではないと早急に判断した真弘は、ぐいぐいと小豆の背中を押して教室の外に押しやる。

「お前は小学生になんちゅうことを聞かせるんだ！」

「何をとは失敬な、真弘が何を伝えるのかなんて聞くか……はっ、まさかあんな小学生にまでお前は欲情して恥ずかしい言葉を聞かせようつ」

ぐつと拳が握られ、小豆の無表情に危険なオーラが漂い始める。

「まで！ そんな他意はない！ あるわけがないし、そもそも」  
がらつ

「人の部室の前で騒々しいな君たちは。人前で見せつけるようにしないと、いちゃラブできないのかね？」

振り返ると、二つのたわわな膨らみが歓待してくれた。第二ボタ  
ンまで開いた改造ブラウスから覗く、艶やかに桃色を帯びた谷間は、  
本当にいつ見ても反則だと真弘は思う。

「おおう！ 天王寺」

「胸に向かつて話すのはやめてもらえないか？ さすがに恥じらい  
を禁じ得ない」

「真弘、あとでちよつと生徒会室で会議をしよう」

ざつと、首から上の血液が音を立てて引くのがわかった。

そんな様をあざ笑うかのように美緒はいつものポーズとばかりに  
腕を組み、胸を持ちあげる。切れ長な瞳と相まって、相変わらず破  
壊力抜群だ。しかも、今日はいつもと違って髪を一つに括っている  
のだが、何だか新鮮だ。

「というか天王寺、どこにいたんだ？ 部屋の中には女の子がいた  
だけだ」と

「女の子？ そんなものがどこにいたんだい？ 私はずっと部室に  
いたが？」

怪訝そうに眉根を寄せ、部室の中を見るように促す。

「何を言ってるんだ？ さっき僕たちが入った時にいたあのフリフ  
リヒラヒラオッドアイの子は……」

いない。

「ありや？ いねえな。まさか窓から捨てたのか？」

念のため窓の外を覗いてみるが、あるのは十メートルほど下に広  
がる校舎裏の空間だけだ。少女の姿どころか猫の子一匹見当たらな  
い。煙草をふかしている生徒も、数日前までならこの場所で観察で  
きたが、今は誰かさんの活躍が功を奏している。

「君は極悪非道だな。仮にもし少女がいたとして、窓から捨てるなんて人でなしだよ」

さすがにそれは言い過ぎたとは思ったが、そうとでも思わないと腑に落ちない。

「白昼夢でも見たんじゃないのかい？　しかも二人仲良く。お熱いことだね」

「っざけんな、変なこと言うとまた俺がぼこぼこにされ」

恐怖にひきつった顔で小豆を見るが、今回ののはさほど気にしていないらしく、そっぽを向いただけで特にこれといった反応がない。頬がほんのり赤いのは怒りをこらえているからだろうと、真弘はこれ以上この件については触れない方が賢明だと判断する。

（おやおや。片や野暮天、片や天然記念物級の超奥手。楽しめそうじゃないか）

心の声が限りなく表情に出ている美緒の、魔女そのものな笑みに別の意図をくみ取った真弘が、慌てて話題を別に振っている。その様に、さらに美緒は口角をつり上げる。

「で、その幻のような少女はいいとして、私に何の用だね？　まさか遊びに来たわけではあるまい？　他ならぬ正義の生徒会が」

相変わらず何をしゃべっても含みや他意があるように聞こえる。

「そつえば天王寺、お前は全身タイツの組織について知っているか？　いや、知っているはずだ。吐いてもらうぞ」

いつもの無表情に戻った小豆が一步進み出る。こちらも胸を張っているが、残念なことに相手が美緒では、いつもの半分もプレッシャーを出せていない。

「どうしたね藪から棒に？　全身タイツというと、最近学内でちょくちょく出没するという、あれかい？」

タイツ軍団。正式名称、秘密結社パラ・ダイスは、どうやらそれなりには有名になっているようで、存在そのものは当初の秘匿性を失っているらしい。

（ま、あんだだけぼこ出てきて細かい悪さを繰り広げりゃ、いや

でも目撃されるわな。その実態がなんなのかは別としても」

実際、生徒会として遭遇（そして一方的に殲滅）した以外にも、校内のあちこちに現れては、子供のいたずらとも呼べないレベルの悪さをしては去っていくというのを繰り返していたらしく、ちよつとした都市伝説のようにその存在が認知されている。昼休みの雑談の中で、宗司と瞳から聞かされた。

その活動内容の小物っぷりとともに。

「先ほどあれが、自らを悪の秘密結社であると認めた。お前もあれの一員、いや、何なら幹部として悪を働いているのだろう。そして、そのための力としてロボットの住吉を狙った、そうだろう？」

あまりにもあっさりと一郎のプライベートを暴露したのには目を剥いたが、さすがにこの内容であれば本気にされることはないだろうと、ジト目で睨むだけにとどめた。

「へえ、彼はロボットだったのか。道理で、他の人とは違ったわけだ。そりゃ、魅力的なわけだね」

「信じた！」

驚くべきことに、美緒はそのカミングアウトをあっさりと受け入れた。眉一つ動かさず。

「否定する要素がないからね。ただ仮にそうだったとして、会長君の推理は外れだね」

「どういうことだ？」

「答えは簡単、私はそんな組織に所属していない、それだけだ」

「じゃあどうして、お前は住吉を攻撃したんだ？ 雷の魔法で」

「雷の魔法？ 攻撃？ 何のことかね？」

「とぼけるな」

声を荒らげるでもなく、淡々と追い詰める小豆もさることながら、ここで真弘が疑問に感じたのは美緒の態度だった。

「とぼけるも何も、私は遅刻王君に向かって魔法を放った記憶などないよ。そうはいはい使うものでもないからね、魔法なんて」

その言葉には嘘偽りはないように見える。腕を組んでうんうん唸

る様子は、とても演技には見えない。と、

「ん？」

何かに思い当たったように、ぴたりと美緒の動きが止まる。

「なんだ？ 白状する気になったか？」

「いや、心当たりがあるとするなら、一つある」

「こころあたり？ 何かもったいぶった言い方だな」

美緒にしては珍しく歯切れが悪いと思いながら、真弘は小豆をけん制する。ともすれば生徒会室にしょっ引きかねない勢いだ。味方をけん制しなければならぬ苦労は、思いのほかヘビーだ。

「うん。あのあと、ちょうど君に雷の魔法を披露したあの直後だ。魔法が誤発動してね。どうも、私の持っていた魔方陣に何らかの外的な力場が作用したようなのだが、何の効果も顕現しなかったので不発だと思っていたのがあるのだよ」

「もしかしてあの、お前が逃げてからの一発は」

「私も、あのときは何が起こったのかわからなかったのだが、どうやらそうらしい」

「それがたまたま、屋上を逃げていた住吉を直撃した、と」

あり得なさそうだとは思いつながら、魔法については門外漢なのでそんなものかと思ってみる。

「もう少しうまい言い訳を、と言いたいところけど……確かに納得できなくもないね」

「納得してもらわねば困る。それ以外に思い当たる節がないのでね。それに彼の場合は……いや、いい」

言いかけて止められたせいで、胸のあたりにもやもやしたものが残ってしまうが、美緒はすでに考え事モードに入ってしまった。こうなった美緒は、例えばすぐ隣で殺人事件が起きても集中を乱さない。

「ふむ、この状態だと乳を揉んでも気づかなさそうだな」

「おいしい！ お前は何を言って」

「冗談だ。そんなことばかり考えているから反応が過剰になるんだ。」

真弘、わかっていると思うけど、あとできつちり僕が指導してあげるからね」

どうやら、今日が自分の命日になるらしいと、真弘は腹をくくった。

「天王寺美緒はグレーだ。とはいえ、パラ・ダイスの連中が本格的に動き出したのは紛れもない事実。とすると、僕らの取るべき道は一つ」

廊下を歩く足取りはいつにも増して力強く、表情は水を得た魚のように生き生きとしている。悪の組織の存在を嬉々として受け入れる正義の味方、というのも甚だ疑問ではあるが、悪の組織あつての正義の味方というのもわからないでもない。

「ってか、世界征服も人類抹殺もしないって言ってたけど、じゃあ何すんだ、あいつら？」

真弘の疑問に、小豆の足が止まる。

「何をたくらんでるかなんて、関係ないよ」

振り向きざまに、ぴっと人差し指を突き立てる。いつものポーズだ。

「あつちが悪でこつちが正義。だったら、やることは一つ」

危険な思想に繋がりそうな気もしたが、何故か小豆が言うと言説得力たっぷりだ。

「お前らしいな。羨ましいわ」

「ふん、何を言ってるんだ？ 真弘は正義の味方なんだから、そんなことじゃ困る」

くるりと踵を返し、再びずんずんと歩き始める。

その背と揺れるツインテールをぼんやりと眺めながら、どこか自信なさげな自分の足取りに、真弘は唇を噛む。

（そう言われても、残念ながら俺は）

胸の真ん中にぽっかり穴があいたような、そんな喪失感を噛みしめて、ポケットに手をつ突っ込んだ。

「？」

かさり、と指先に触れる感触にそれをつまんで引つ張り出してみ  
る。レシートか何かのゴミかとも思ったが、摘まれていたのは、一  
枚のメモ帳。

その内容を眺めてもう一度ポケットに押し込み、歩き出す。

「それにしても」

そのタイミングを見計らったように、再び小豆が足を止めて話し  
出す。

「あいつらはどうして真弘を狙ったんだ？ それにお前とあのメイ  
ドには面識もありそうだったし」

（やはりそうきたか）

心中で緊張の糸が一気に張りつめる。さすがにこのまま忘れてう  
やむやに、なんて都合のいい展開を期待したのは甘かったが、ここ  
まで直球で切りこまれると逃げ場がない。

「ああ、ちよつと、な」

「悪の組織と正義の味方の間には、『ちよつと』も大問題だぞ。吐  
いてしまえ」

「う、いや、な、なんつうか」

誤魔化すにしても思考の糸はぐちゃぐちゃに絡まっていい手が思  
いつく気配もない。かといって正直にすべてを打ち明けるのは死亡  
フラグだ。真弘も、十五の身空で散りたくはない。

「それよか、あいつらの目的とか次の行動を予測する方が」

「出てくれば潰す、それだけだよ。さあ、真弘とあの組織のつなが  
りって、何？」

万事休す。まさかこんなにも唐突に自分の死が訪れようとは思っ  
てもいなかったが、黙っていても殺されるのは同じ。だったら、

「あいつらなんだよ、俺のこと改造したの」

「改造？」

ぶちまけて、清々しい気持ちで死んでやろう。なんとも後ろ向き  
な潔さだ。

「そう。ちょっと前にな、夜の学校で死にかけたんだよ、俺。そんなときに、どんな理由かは知らないけどあいつらの改造手術で命が助かって、それ以来あんな異常な回復力とか身体能力が身についたみたいでな。最初は半信半疑だったんだけどよ、実際にこんな体だし、それ以外に原因は考えられないしな」

誰がどう聞いても、電波にやられた脳味噌で考えた設定。しかもどこぞの特撮ヒーローからばくつてきたとしか思えない設定。ともすれば、ふざけるなとぼこぼこにされて軽蔑されてもおかしくはない。おかしくはないが、何故か小豆ならこの話を信じるような気もしていた。信じたからどうということもないのだが。

「脳は？」

俯いた小豆が、ボソリと呟く。

「ノー？」

襟首を掴まれた。全力で。おかげで一瞬体が浮き上がり、脳が揺れたように視界がぐにゃぐにゃに歪む。

「脳、脳は、今揺れて」

「違う！ 脳の改造までされたのか、って聞いてるんだよ」

「は？ なんでいきなり」

ネックハンギングの要領で吊るしあげられているが、身長差が身長差だけにわずかに真弘はつま先が床についている。とはいえ、苦しいのに変わりはないのだが。

「そういう話では、脳の改造がネックになるのが王道だろ？ だから、どうなんだ？ 脳改造は？」

どうやらマジらしい。ここまで真剣に受け止められると、真弘としてもうれしいような、怖いような不思議な気持ちになる。

「そ、それは、ないらしい。そういう処置を受ける前に、気がついて、逃げ出してきた」

それを聞いた小豆は、何の予備動作もなく手を離す。

「えでっ！ いきなり離すなよな！ おかげでケツうって……おい？」

「本当なんだな！」

「うおっ！」

目をきらきらに輝かせた小豆が、再び襟首をつかんで真弘を引きあげる。

「顔、近い、近い。顔近い」

「本当だな、本当に本当に、脳は改造されていないんだな？ 体だけだな？」

目を輝かせながら無表情という器用な技を見せているが、隠しきれないほど嬉しいらしいというのはわかった。ただし、この感情の正体に気づくほど、真弘の思考が回復していないのは幸か不幸かは不明だが。

うつかりすると鼻の頭がぶつかる距離にも小豆は遠慮なくぐぐぐと真弘を揺さぶる。

「あぶな、あぶ、ちょ、口が、当たる。チューになる、チューに」

「よかった。不安だったんだぞ、僕は。真弘がもし悪い組織につくられた怪人だったらとか、不死身なのも何か悪の組織のせいで、洗脳とか脳改造されてたりしたとか、そしたらそしたら、真弘と、その、戦わなきゃいけないのか、とか」

意外なことを言う。

「あず、き？」

「でも、そうじゃないって、わかって……本当に……って、何を言わせるんだ、真弘！」

抑えが利かなくなってしまうたのを悔いたが、言葉をなかったことにはできない。

一瞬の沈黙が妙に気まずい。

「いや、お前が勝手に」

「はっ」

何に思い至ったのか、ものすごい速さで首からうなじ、ほっぺた、耳まで真っ赤にしてぎゅっと唇を引き絞った。

「真弘の、ぶわあああああああああ……！」

飛んできた拳が当たった記憶はない。だから、十トントラックに全速力で跳ね飛ばされたような衝撃も、壁に叩きつけられてめり込む時の激痛も、その衝撃で全身の骨が残らず砕けるという地獄のよくな責め苦も、幸いに記憶にはない。記憶にあるのはただ、壁にめり込みながら感じた、ばらばらの骨が再生するときの死ぬほどの苦痛だけだ。

「助けて、正義の味方」

心からそう願って、そつと目を閉じた。

最後に見たのは、こちらに背を向けて廊下につづくまり、口元を隠している小豆の、真っ赤なうなじだった。

## 最深部へ

そんな渡り廊下の光景を、中庭を挟んだ反対側から覗く姿がある。  
「これはこれは、一大事でございますね」

風にたなびくゴスロリメイド服に、学校指定のスリッパというのは何ともアンバランスだが、日中はちゃんと生徒としての体面も保たねばならない。とは、華独特の主張だ。

双眼鏡の中には、真っ赤になった顔を隠してうずくまる小豆の姿がバッチリ映し出されている。

「あれだけ本気でぶっ飛ばしておいて、よくあんなかわいらしい態度がとれたものでございますね。これですから天然は恐ろしいでございます」

「ちよつと、何が見えるです？ 何があつたです？」

いつぞやと同じイカの着ぐるみに身を包んだ紅葉が、ぴよこぴよこと跳びはねて双眼鏡を奪おうと試みるが、無駄に終わる。ワンテンポ遅れて揺れる触手が悲しい。

今日は仮面をつけているので顔はわからないが、口元の幼い雰囲気は隠しきれない。

「いやはや、お嬢様、のんびりしている場合ではございませんね。早く魔方陣を完成させませんことには、色々とまずうございますよ」  
「まずい、って……はあ……何が……です？ はあ」

跳びはねたせいで荒くなつた息を整えながら、紅葉も目を細めて華の見つめる先を見る。辛うじて渡り廊下に誰かがいるのはわかったが、細部はさっぱり分らない。

わかつていないからこそ、こんな冷静な会話ができるのだとわかつた上での華の行動なのだが、こいつの場合は純粹に自分が見たいだけという要素も半分はある。

「陣の完成が遅れますと、様々な矛盾が生じます。そうならば不都合が生じる、とあの魔女も申してございましたので」

『そういえば、そんなことも言ってたですね』

「最悪、心に抱えたジレンマで精神が崩壊してしまわれることある  
とかないとか」

『へ？』

「おや、申し上げておりませんでしたか？　ですがまあ、今申しましたのでよろしゅうございますよね」

双眼鏡を顔につけたままぐるりとイカに向き直る。当然、距離が近すぎて華の視界は紅葉の口元だけでいっぱいになってしまつが、それで十分だった。華はこれだけで飯三杯はいける口だ。鼻血が出そうになるのをぐつとこらえる。

『いいわけないです！　この、ばかもの！　そういう大事なことは最初にですね』

「まあ、過ぎたことは仕方がございません。人にできるのは前向き  
の努力だけでございます。さあ、こんなところで油をお売りになつていらつしやる暇はございませんよ」

メイド服を翻し、華がアサツテの空を指差す。

『ほんと、いい性格してるですよ』

「恐縮でございます。それに彼ら、あてずっぽうながら天王寺美緒に辿りついておりますので、早く陣を発動いたしませんことには」  
本館屋上に取り付けられた時計塔の上で演じられたこのコメディは、幸いにして誰に見とがめられることもなかったが、見たものがいたところで冗談以上の何かと捉えられることはなかっただろう。

『むう……止むをえんですね……不本意です』

うなだれるイカと、空を指差すメイドという、奇妙奇天烈極まりない寸劇は幕を閉じ、再び全身タイツの暗躍が始まる。そっちは本当に誰にも見咎められることはなかった。

ライン引き用の石灰倉庫の裏に、今は使われていないプールの脱衣室の隅に、校庭の隅っこに撃ち捨てられた猫車の中に、そして校舎を飛び出した一色市のいたるところの、あらかじめ決められた位置に仕掛けが施されてゆく。

万が一その姿を見られたとしても、何をしているのかは全く分からない。そんな巧妙なカムフラージュのもと、計画は着々と進行してゆく。

「私の手の中で踊っているとも知らずに、だがね」

いそいそと時計塔を後にする二つのシルエットを眺めるのは、薄っすらと笑みを浮かべる切れ長な瞳。たわわに実った二つの果実が、悩ましげに揺れて跳ねる。

「だが、このままでは少々アンフェアだ」

とても染めたとは思えない髪質の金髪を揺らし、くすりとほくそ笑む。

「ちよつとおせっかいをさせてもらうよ。正義の味方君」

例外なくいつも通りの、魔女を彷彿とさせる含みのある笑みは、決して意図的なものではない。が、彼女を魔女と言わしめるのも、間違いなくこの笑顔だ。

ずたばろの体を引きずって、真弘は階段を上る。

実際には骨折はおろか、打撲からすり傷まですべて完治しているのだが、気持ちが重い。気乗りがしない時の体というのは、体調が芳しくない時以上に重く感じてしまう。

「はあ」

無意識のうちに、何度目とも知れないため息がこぼれる。

無人の校舎には自分の足音のほかは、窓から差し込む月明りがあるだけだ。その足音も、ゆっくりと遠ざかって消えてしまうので、歩くのをやめると柔らかな光だけが真弘を包みこんだ。

ポケットから取り出した一枚のメモを眺める。昼間見つけたあれだ。

『今夜十時、新館屋上』

ただそれだけが書かれたシンプルなものだが、真弘を呼び出すには十分だな仕掛けが施されていた。というのも、

「へつたくそな字に、この絵……たぶんゾンビだよな」

不死者、アンデッド、リビングデッド等々。さまざまな呼び方をされている、世界でもトップクラスに有名なモンスターの絵が、メモの隅っこに添えられていた。その意味するところは言わずもがな、「俺のこと知ってるって言いたいんだろうけど……あゝあ、俺、とうとうゾンビかよ」

不死身であることを暗に示しているにしても、それを敏感に感じ取るあたり、真弘のネガティブな思考回路がしっかり仕事をしている証拠だろう。

こんな予想ができてしまう自分にかっかりしながら、再び階段を上り始める。重い足取りはそのままに、今はがっくりと肩を落とすてうなだれている。その様はまさにゾンビそのものだ。とは決して言うてはならない。

引きずるような足取りで昇る階段は永久に続くように思われたが、当然そんなことはなく、何度かの折り返しののちに真弘は鉄製の扉の前にたどり着く。

普段であれば鍵がかけられた上で鎖と南京錠で嚴重に封印されているのだが、今日に限ってはそれはない。昼間の騒動のせいだ。無残に引きちぎられた鎖と南京錠はモンスターが食いちぎったようだが、誰がこれをやったのかなど考えるまでもない。

敢えて思考を停止状態にし、ノブに手をかける。出来ることならここで鍵がかかっていたせいで屋上に行けなかったという展開が望ましいのだが、現実は無情である。

錆びたような音とともに扉は外側に向かって開き、春の夜特有の冷気が頬をなぶる。

「よく来てくれたね」

予想は三パターンあったが、見事にそのうちの一つの的中した。ちなみに真弘の予想だが、本命がメイド、対抗が美緒、大穴狙いでまだ見ぬ誰かという期待もあったが、残念なことにそこにいたのは、新天地を開く新キャラではなかった。

「天王寺か。ある意味助かった……わけでもねえか」

手紙の字の汚さから考慮していた可能性の一つが、見事に的中したわけだ。

「おや、なにやら酷い言われようだね？ 私は君に悪い印象を持たれているのかい？」

「まあ、否定はしねえよ」

夜の風に体を震わせ、自分の腕を抱きしめるようにして暖を取る。どうやら、この辺りの感覚は強化されていないらしく、暑さ寒さなどは以前と変わりなく感じる。不便なような、便利なような、だ。

「どうだい、その体には慣れたかい？」

「おかげさまでな……やっぱ、俺の体のこと知ってんだな。だったら聞きたいんだけど」

「君が死にかけた原因は私だよ。あの夜、君を襲った魔人は私が召喚したものだ。これでいいかい？」

全てお見通しというわけだ。気に食わないながら、胸の中で何かが弾けてすつとした。

「魔人で、あっさりともないこというんだな」

しかも、あのクラブ紹介オリエンテーションでの宗司の言った「魔族」というのも、あながち大外れではなかったことも証明される。「便宜上そう名付けたただだよ。それで、君は私に復讐でもするのかな？」

にやりとほくそ笑む表情は月明かりに映えてあまりにも扇情的で、うつかり見つめてしまつと今度はテンプテーションの術にでもかかつてしまいそうだ。

「いや、もうそれはいいわ。のこのこ首突っ込んだ俺の自業自得でもあるし」

「謙虚だね。私だったら迷わず灰にしてやるところだけだね」

「器がでけえんだよ」

よく言うよ、と胸中で突っ込みながら自嘲する。

「で、何で呼び出されてんだ？ まさか、お前まで俺の力を手に入れるとか言いだすんじゃないやねえよな？」

自分の存在を知るものが、力としての自分を欲する。当然のような気もするし、何故自分などという戸惑いもあるが、警戒しておくに越したことはない。

「そうだね、君への興味も、ないと言えばうそになるね」

「お前が言つと含みがありすぎて怖いわ」

これには返事をするのではなく、美緒はゆつくりと口の端を持ち上げる。何をやっても様になるやつだと真弘は感心する。特にこんな、月の明るい夜空をバックに立ったりなんかすると、何も知らないような男子だったら惚れてしまいかねない。

神というのはとことん不公平で非常識だ。

（ま、常識的で公平だから、こいつの中身がこうなってる、ってのもあるんだけどな）

「私はただ、君に助言を与えただけだよ。正義を貫く君の姿に感銘を受けてね」

踵を返して、全力で床を蹴る。とにかく今は逃げるべきだと脊髄が反応した。

知っている。この展開は間違いなく死亡フラグだ。迂闊だった、油断していた、軽率だった。どれだけ言葉を連ねても自分の軽薄な行いが招いた結果が死に直結するという事実は変えられない。だとしても、全力でそれに抗うだけだ。なのに、

「えうっ」

「おいおい、酷いな」

体が動かない。

手を伸ばせば何なく掴めるはずの距離に先ほど自分が開けたノブがあるのに、その数十センチが届かない。まるで幾本もの縄で縛りあげられたように体は自由にならない。さらに言うなら、足の裏も接着剤でも塗られたかのように貼りついていてる。

「どうして逃げるんだい？」

「逃げるにきまってんだろ、胡散臭すぎだ！」

天王寺がほくそ笑む。とことん人を小馬鹿にしたような態度だが、

嫌味には見えない。

「ちよつと結界を張らせてもらつたよ。もしかして思ったけど、君は想像以上に危機管理には長けているようだね」

「うっせえ、俺はできることなら騒ぎに巻き込まれたくねえし、出しゃばつた真似して波風立てるのも」

「嘘だね」

月を背負つた美緒は、腕を組んで傲然と言いつた。

「君のその言葉は、嘘だ。それが証拠に、あの生徒会長君が君を引き入れた。今まで誰とも共闘しようとしなかった彼女が、だ」

「それがどうして証拠に」

「彼女の本能的な嗅覚は本物だよ。それが証拠に、今回の件で私に行きついた」

言葉が出ない。今美緒の口から吐き出された言葉をゆっくり反芻する。

「誤解のないように言っておくが、私は君らに嘘をついてはいないよ。事実、昼間にも言ったとおり、私はあの組織に所属してはいないからね」

「だったらお前に行きつくつてのは、どういう意味なんだよ？ 関わり、ないんだろ？」

本人は気づいてはいないが、そう言う真弘の目にはぎらぎらとした光が宿っている。荒削りで、素直ではないせいで生々しい、しかし隠しようのないその意志は紛れもなく、

（正義、か。正直、こんな言葉を私が使うとは思つてもみなかったよ）

睨むようにまっすぐ見つめる真弘の視線を、美緒は涼しい顔で受け流しながら内心ではほくそ笑む。

「彼女らが今やろうとしているのは、大規模な魔法実験だよ」

「彼女らって……パラダイスのことか」

「正確にはパラ・ダイス。パラのところで切るのが正式名称らしいよ」

「どっちでもいいわ。って、魔法実験？ お前じゃあるまいし」

呆れ気味に溜息をこぼそうとするが、真弘の体はまだまだ自由が戻っておらず、先ほどの踵を返した時のポーズのままだ。不思議と、無理をして体を支えている感覚がなく、むしろ走り出そうとした形のまま何かにもたれかかっているような感覚だ。

「まあ聞きたまえ。目的やどのような魔法かを語ることはできないが、そのネタを提供したのは私だ」

堂々と語る姿に思わず納得しそうになるが、寸前で踏みとどまる。「はあ？」

理解が全く追いつかない。美緒が今言った言葉が、本当に日本語だったかどうか危ぶまれるレベルで。

「彼女らは今、私の作成した設計図にしたがって確実に魔法陣を完成させつつある。最初はうっかり設計図を盗み出されたのが始まりだったのだがね」

美緒以外が口にすればただの電波な狂言だが、残念なことにその信憑性については身をもって経験済みだ。だから、今回のこの言葉もすんなり受け入れてしまう。

「ちなみにこれが、彼女らが手に入れた設計図のコピーだ。さて、君らはどうするね？」

どこか楽しそうな目は、観察者のそれだ。フラスコの中に入れた化学物質の反応を超然的な立場から見守る、そんな目。天王寺美緒にとつて、世界のすべては実験なのだ。つくづく思い知る。

「俺には関係ない。会長に言っておくよ。あいつならあつという間に解決だろ」

「卑怯だねえ」

ピクリとこめかみが引きつるのがわかった。まるで、それを狙っていたかのような美緒の態度も腹立たしかったが、何よりそんな安っぽい挑発に乗ってしまったのが悔しい。

「何とでも言ってくれ」

極力平静を装ってそれだけを言う。背を向けたままで身動きでき

ないのが幸いした。

「そうやってまた逃げ出すんだね。この満貫寺を選んだように」  
みしみしと、理性が音を立てて軋む。

それは、誰一人として知らないはずの、知られてはならないはずの、真弘の過去。忘れたくて、忘れられなくて、なかったことにしたくて、今も真弘を縛りつける。

そんなはずはない。誰にも、それこそ真弘は宗司にさえ自分のことは語ってはいない。知られているはずがないのだ。なのに、

「彼女を救うことは誰にもできなかったよ。彼女の選んだ道だ」  
「うつせえ！」

動かない体を無理やり振りまわす。体が引きちぎられるような痛みが全身をかけずり回る。体中の神経という神経を引き裂かれるような痛み悶えそうになったが、奥歯を噛みしめて声を殺す。

「ほう、まさかあの結界を力で振りほどくとはね。やはり並ではない」

ただ、代償は大きい。眩暈がするほどの激痛に、体はいうことを聞いてくれない。もしかしたら骨や筋肉にも損傷が及んでいるのかもしれない。が、それでも真弘は気力だけで踏み出し、美緒を睨みつける。

「何で、知ってんだよ、そんなこと。メイドといいお前といい、どいつもこいつも」

不愉快さだけが胸の中にあふれ、先ほどまで瞳に宿っていた光は、沼の底に沈んだように淀み、濁っている。

ぼやける目で美緒を睨みつけながら、真弘は記憶の中の少女をそこに重ねていた。

一年前の、記憶の中。少女は笑っていた。  
まだ。

## 最後の安息

中学三年生になったばかりの目には、桜並木の美しさよりも、自分が受験生になってしまったという現実ばかりがちらついて見えた。それが証拠に、舞い散る花びらを見ながら考えているのは、来年の今頃、どんな顔で自分がこの花を眺めているかというようなことばかりだ。

もちろん、誰しもがそうだとは言わない。

クラス編成に一喜一憂して隣の友達と抱き合う女子生徒や、担任の当たりはずれで気にいらぬ教師を口汚くののしるばかりの自称優等生、そんなものとは関係なく髪を金髪に染めて始業式早々生活指導の教師に連れて行かれる不良と様々だ。むしろ、そんな陰鬱な表情をしているのは自分ひとりなんじゃないかと思うほどだ。

そんな真弘に声をかけたのが、酒井佳苗さかいかなえだった。

「どうしたの？ 何か今にも自殺しそうな顔だよ」

そう言った佳苗の顔は、この世界で一番自殺なぞとは縁遠そうなのはちきれんばかりの笑顔だった。紅潮した頬をつり上げ、目がなくなるまで細めるその笑い方は、美人の類ではなかったが、誰しもが好感を抱く可愛い笑顔だった。

「や、ちよつと受験のこととか考えると」

そんな真弘のありきたりな返答も佳苗は一言で一蹴した。

「なるようになるよ、一生懸命やってればね」

その表情は、それが真理であることを信じて疑わないといった顔だ。

「ほんとかよ？」

「ほんとだよ。だって、一生懸命やってるんだもん」

そんな天真爛漫さに、自分がとんでもなくばかかしいことを悩もうとしていたのではないかと気づいた時には、思わず吹き出してしまった。

それが、真弘と佳苗との出会いだった。

初対面の真弘に声をかけるのにためらいがなかったのを見て想像ができる通り、佳苗は率先してクラス行事などの仕事をこなす、いわゆる委員長タイプだった。新学期の初日にしてすでにクラス委員の推薦に挙げられているほどで、それを断る佳苗でもなかった。

厄介事が自分に回ってこないようにうまく利用してはいるが、どこかで頼りにはしている。それが、クラスのほとんどの人間が思う、佳苗像だった。

「謹厳実直。絵にかいた委員長だな、酒井」

「そんなこと言って、帝塚山君もすっかり手伝ってくれてるじゃん」  
佳苗とそんな会話をしたのは、五月の終わり。少し早い体育祭の打ち合わせのために残った放課後、廊下を歩きながらそんな軽口をたたき合う。

「俺の場合は他に誰もいなくて、いやいや仕方なしにハズレくじだよ」

「またまたー、私と仕事したかったんでしょ？」

「んばっ！　ばかか、んなわけねえだろ」

「へっへっ、照れなくてもいいんだよー。っていうか、帝塚山君はもつと素直になるべきだよ。そんな真っキンキンの頭でもせっかく真面目で正義感強いんだから。私のこと、放っておけなくて仕事手伝ってくれてるもんね」

「あほ、黙って歩け。あと、まっキンキンゆーな。俺は悪くない」  
声に出して屈託なく笑う。たったそれだけのことなのに、花が咲いたように周囲が明るくなる。そんな魅力を、佳苗持っていた。すくなくとも真弘はそう思っていた。

とんだ阿呆だった。今の真弘は、そのときの自分を責める。

好きだったのかと言われれば、今はもうわからない。そうだったのかもしれない。ただ、一緒にいる心地よさや、周囲を明るくする独特の雰囲気求めて、できるだけ近くにいたいようと思ったのは、嘘いつわりのない本心だ。

ずっと、こんな時間が続けばいいと、続くと、思っていた。

阿呆だった。

変化が顕著に現れたのは、夏休みも明け、クラスの中に受験に向かうピリピリした空気と、中学生生活最後の行事である文化祭に向かう高揚した空気とがごちゃまぜになって充満し始めた、九月のことだ。

「ほつといて」

その日は文化祭でのクラス発表を話し合う日だったのだが、佳苗は無断欠席をした。それまで欠席することはあっても、きちんと学校に連絡を入れていた佳苗の突然の無断欠席だったため、慌てた教師が真弘に事情を尋ねてきた。

もちろん知るはずもない。それどころか誰よりも驚いたのは真弘自身だ。

さすがに放っておくこともできずに、学校が終わってから見舞がてら尋ねた真弘に浴びせられたのは、冷やかなその一言だった。放っておけるはずがない。目の周りには、普通に生活しているだけではつくはずのない青いあざ。よく見れば目の周りだけではない。頬にも、腕にも、目立たないようにってはいるが痕が残っている。「大丈夫なはず、ないだろ」

「関係ないから！ ほつておいて！」

突き放すようなその言葉に、刃物で胸を貫かれたような衝撃を覚えたのを今でもはつきりと覚えている。

それ以来、佳苗はあまり学校に来なくなった。

来ても、以前の佳苗が嘘だったようにじつと黙って席に座り、何をするでもなく一日を過ごして幽霊のように教室を後にする。一言も話さずに帰ることも珍しくなかった。

そんな佳苗を遠巻きに眺める視線が冷ややかで、拒絶の色を帯びているのは、受験を控えたこの時期ならやむなしかもしれない。敢えて面倒事に首を突っ込むもの好きもない。

クラスメイトが佳苗から距離を置くようになるのに時間はかから

なかった。まるで目に見えない壁を描いたように、佳苗は誰とも接することはなくなつたし、クラスメイトも敢えてその距離を縮めようとはしなかった。

そんなある日、

「あいつの親父、捕まつたつてな」

その日も佳苗は休みで、一人で文化祭の仕事しなきゃいけない、なんて思いながら主のいない席を眺めていた真弘は、その言葉に視線を向けた。

「まじかよ？ なになに、何やったの？」

「職員室行つたときにちらつと聞いたんだけどよ、あいつ親父に殺されかけたらしいぞ」

「まじ？」

「まじまじ。職員室大騒ぎ。ほら、最近青たん作つたりしてただろ？ あいつのお袋が夏休みに死んだらしくつてよ、それで父親も荒れたんじゃないかって」

「で、殺人未遂？ マジでそんな話あんだな」

「てことは、もしかしてあいつ、親父にやましいこと」  
「気がつけば、殴っていた。」

鼻っ面に拳を叩きつけ、崩れ落ちた顔面に上履きの底を叩きつける。力任せに、何の容赦もなく、何度も、何度も、何度も、何度も。周囲では静止する声が怒号のように響き、羽交締めにしようと腕が肩に回され、女子の悲鳴と先生を呼びに行ったやつ悲壮な叫びがごちゃまぜになって、阿鼻叫喚の地獄絵図の様相だったが、真弘は落ち着いたものだった。

ただ淡々と、目の前で鼻血まみれになって泣きじゃくっている男の顔に、靴の裏を叩きつけ続けた。怒りと狂気で形作られた、鬼のような形相で。

駆け付けた体育教師が殴りつけるようにして真弘を引きはがした時には、既に男子生徒に意識はなく、鼻血と口内からの出血で血みどろだったが、真弘はそれをただ静かに見下ろしているだけだった。

連行された職員室で言い放った「ごみを掃除をしただけ」の一言は、あまりにも常軌を逸していると判断されたのだろう。

一週間の停学処分が下された。

課題として課された、嘘にまみれた反省分とともに学校に復帰した真弘を取り巻くのは、どこかいびつながら以前と変わらないクラスの雰囲気だった。さすがにあの時の発言を知る者は、一方的に真弘を悪者に仕立てることはできないらしい。

少々腫れ物に触るような距離感こそ感じるものの、おおむね以前どおりに思えた。

ただ、それは真弘に関してだけで、佳苗に関してはそうはいかないようだ。

異物を見るような目が向けられ、不自然なほどに会話を避け、いつの間にか文化祭の委員もほかの女子生徒が担っていた。

佳苗の居場所は、無くなっていた。

それでも真弘は佳苗に話しかけ、何とか佳苗の居場所を作ろうとあがいてはみたが、一人で動いたところでできることなんてたかだか知れている。

そうして、真弘と佳苗を取り残したままクラスの間が流れていた、九月の後半。

佳苗は、自殺した。

結果としては未遂に終わったが、佳苗の意識は二度と戻ることはないらしい。

風呂場で手首を切った佳苗が発見されたのは、いつもの時間に佳苗が登校しないことを心配した隣のおばあさんだったのだが、発見が遅すぎた。長時間脳に酸素の行き渡らない状態が続いたせいで、肉体が回復したあと脳も回復は絶望的との診断が下された。

遺書として残されていた手紙には、父親が暴力をふるうのを止められなかったことを苦悩し、周囲に迷惑をかけたことに良心を痛めていたこと。学校での居場所を失ったつらさ、そのことでクラスメイトに迷惑をかけたことに対する罪悪感などが綴られていた。そし

て最後にただ一言、真弘に対する、謝罪。

『ごめんね』

自分の無能と、世界の理不尽さを呪った真弘はその夜、泣いた。声に出さずに、嗚咽を噛み殺して、涙だけを流して泣いた。

一生懸命にやればなるようになる。初めて会った時のその言葉が、佳苗自身にも向けられていたのかもしれないと思うと余計に悔しかった。どこかで気づいていれば、自分にもっと力があれば。

神なんていない、正義なんてない。一生懸命に、まっすぐに、明るく生きた佳苗が救われない世界が正しいはずがない。そう思って、全てを呪って

真弘は、そこから逃げ出した。

「俺は、何にもできなかったんだ。いや、違う。あいつはずっと何とかしようとして、何とかなるって信じてたのに、なのに……何が正義だ、報われるだ。あほらしい」

吐き捨てるように言葉を投げだす。

「そうやって自分を守るのも一つの方法だ。しかし、今の君には力がある」

「知ったことか。俺には関係ない」

「そんな体質になっても、まだそういうのかね？ 困った女子を放っておけない症状なんて、生半な正義感ではできないよ」

「知るか。好きでやってるわけじゃねえ。むしろ迷惑だし、俺はとつとと消したいんだよ、こんなトラウマ」

真弘は決めたのだ。あの日、佳苗を失った世界に意味もなければ意義もない。正義だの努力だのというくだらない幻想にとらわれたところで、そんなものに意味はない。なら、報われることのない世界で飄々と生きていこうと。誰かと深くかわかることもなく。そうすれば傷つけることも傷つくこともない。そう決めたのだ。

なのに、体はそれを拒むようにトラブルに飛び込んでゆく。

絵にかいたような二律背反。多重人格か何かではないかと自身を

疑ったことも少くはない。

「いつか会長君も言っていたが、力を持ちながら」

美緒の声が、唐突に凜と響く。

「その力を行使しないのは、悪だよ。そのベクトルはさておき、己の中の正義に反する行為だ。私もそう思うよ」

毅然として言い放つ姿は、ある種のカリスマ性を感じずにはいられない。

「だからなんだ？ 俺には関係ないんだよ。正義はあれの仕事。世界が悪の秘密結社に染まろうが正義が勝とうが、知ったこっちゃない」

その場を立ち去るべく再び振り返る。体が束縛されることもなく、ノブに手をかける。

「世界を認識するのは君だが」

唐突な物言いに、一瞬手が止まる。

「世界は君を認識しはしない」

「誰の格言だよ？」

皮肉交じりに言ってるが、美緒からの返事はなく、この場はこれで終了だと言わんばかりに真弘は階段室に踏み込む。

ちらりと目の端っただけで振り返った美緒のシルエットは、金色の月明りに映えて芸術的だったが、今の真弘は何を思うこともなかった。

重苦しい音を立てて扉が閉まったのを確認し、その場を後にする。

「君がどう認識しようと、世界にはあるのだよ」

美緒はぼつりとそれだけを呟いて、フェンスにもたれかかる。

「正義が、ね」

乾いた音が、春の夜空にかすかに響いた。

ゴールデンウィークを間近に控えた教室は、休み時間ごとに休日の予定を話し合う声でふわふわと浮き足立っていた。部活で毎日学校に来るもの、親と旅行に出かけるもの、ひたすらゲームに打ち込

むもの。傍で聞いているだけで楽しくなる予定ばかりだ。

唯一つを除いて。

「連休は昼は学校、夜は街のパトロールだ。目標はもちろん、連続自販機盗難事件の解決だよ」

広辞苑のようなでかい弁当箱をあつという間に空にしたかと思うと、いきなりそんなことを言った。こいつの胃袋はどうなっているのだろうか、真弘はまじまじと小豆のコンパクトな体を眺める。

「いや、俺の予定は聞かないのかよ？」

「何かあるのか？ ないだろう？ だったら問題はない」

「まだ何も言っていないだろ」

「真弘は連休を全部デートに費やすさね。うらやましいさねえ」

「ぶっ飛ばすぞ、てめえ」

コロッケパンをかじる宗司の手には、いつかと同じビニール袋がぶら下がっている。

「あーっと、勘違いしないでほしいさ。今日はちゃんと朝買ってきた。ほらほら、レシートにちゃんと時間が出てるさ」

必死になって言い訳をする姿に涙を禁じえないが、今問題はそこではない。宗司には悪いと思いながら、真弘は話を元に戻す。

「で、なんでパトロールに俺も含まれてんだ？」

「当然だろう、真弘は生徒会副会長だ。正義の味方に休日はない」

「当然とは思えないんだが、どうせ拒否権はないんだろうな」

「よくわかっていないじゃないか。よかった、もし断られたら力づくになるところだった」

「そこに正義はあるのかよ？」

弁当箱を片付ける小豆は安堵のため息を漏らし、心なしかちょっと嬉しそうに微笑んでいる。その笑顔の意味を図りかねていると、

「ときに真弘。住吉の容態はどうなんだろうな？」

「ん？ ああ、昨日の今日だからなあ。いくらなんでももうしばらくかかるんじゃないのか？ あの博士、やたらやる気だったしな」  
朝から空席になっている席をみながらぼんやりと夢想したのは、

呵呵大笑しながらさまざまな工具を振るうマッドサイエンティストの姿だ。

「昼になっても空席なのに欠席だと言い切れなくなってる自分にびつくりだ」

「ま、それが満貫寺クオリティってやつさ」

遅刻王の名は伊達ではないと言うわけだ。

「自分がどれだけ毒されてるのかよくわかった」

「いいことだにや。郷に入っては郷に従え。これで帝塚山君も立派な満貫寺マンだにや」

「なんだよそのだつさいネーミングは？」

ひよっこり現れて宗司の背中に体重を預けた瞳は、まんまとビール袋からデザートだけを引っ張り出して奪い取る。

「あ、ひどいさ。それは俺の食後の楽しみ」

「プッチンプリンが瞳さんに食べてほしそうに」

「してないさ。むしろそれは俺に食べられるために生まれた存在さ」

「あゝ、この独特の食感がにゃんとも」

「すでに食ってるさ！ 泥棒さ、悪がここにいるさ！」

「痴話喧嘩は正義の介入対象外だ。存分にやってくれ」

「この世に正義なんてあったもんじゃないさー」

プリンを食べながら追いつがる宗司をかわすという器用な技を披露し、瞳は教室から出て行ってしまふ。それを追って宗司も出て行ったのだが、その背中では少しだけすすけて見えた。諦めの色というのはこういう色なのかと、真弘は苦笑する。

「あいつら、さっさと付き合っちゃえば良いのにな」

「な、何をいきなり！ そんな、副会長ともあろうものが、ふ、不謹慎だぞ！」

何気なくそんなことを言ってみると、思いのほか大きな反応が返ってきた。

「え？ でも別に普通だろ、あんだけ仲良かったら付き合っぐらい」  
「真弘は……」

弁当箱を鞆にしまいながらの、俯き加減での声はちょっとだけ聞き取りにくい。

もちろん、角度だけの問題ではなく小豆らしからぬ声音だったからというのもあるのだが、そこまで勘のいい男ではない。

「ん？」

「ま、まひろは、仲が良かったら、その……っ、付き合ったり、するの、か？」

表情こそわからないが、なんとなく怒っているように見えた、というのは少々うがったものの見方といわざるを得ない。ここに美緒でもいれば苦笑交じりのニヤニヤとともに助言の一つももらえたかもしれないが、残念なことに魔女は自室で研究中だ。

「そうだな。俺はモテたいと思うし、付き合えるような相手がいるんならそれに越したことはないし、やっぱり高校生ともなれば彼女の一人や二人は……って何言わせんだ」

「そうか。そうだよな、やっぱり高校生ともなれば」

「どっかにいねえかな、清楚で可憐で笑顔の可愛いお嬢様。アップにした髪からちら見えするうなじが可愛ければなおすばらしい」

「そうか、アップか」

「んでスタイルが良かったりすると男冥利に尽きるって言うか」

「すた、いる？」

「そう。グラビアアイドルみたいなプロポーションで、あ、でもそうだったら隣を歩くのも気が引けるとかあるのかね？」

ばきゅっ

穏やかではない音に視線を吸い寄せられると、食後にと買っていたコーヒーの缶が握りつぶされていた。スチール缶である。未開封である。

ぼたぼたとこぼれる茶色い液体が、どうしても血液に見えてしまふのもうがった見方ではあるが、これに関しては仕方がない。本能的に機能している証拠だ。

「ふ、ふうん。真弘はそんな不健全でふしだらな思考をしているん

だ。これは組織を束ねる会長としては見過ごせない問題だね」

「おい！ 何だよこの誘導尋問みたいな罠？ おい、ちょ」

「大丈夫。僕に任せてくれればちゃんと真人間に修正してあげるから」

「その前に人間じゃなくなっちまう！ した、死体になっちまうだろ！」

「大丈夫。真弘の体は壊れてもすぐ直るから、僕も存分に全力を振るえるよ」

「さて！ おかしい、おかし、やめてくれえええええ」

目を覆うような惨状だった、としかたとえようがない。それが証拠に、そのとき教室にいた人間の半数はその光景に耐え切れずに退出し、残り半分は目を閉じて耳を塞ぎ、じっと席に座って耐えていた。

最終的に、とどめの一撃をボディにもらった真弘はくの字に折れ、崩れ落ちるように自分の席に腰をおろしたのだが、この時点で背骨が粉碎骨折してたことを知るものはいない。わからないのではなく、知らないほうが幸せなこともあると熟知しているからだ。

「お前、な……俺じゃなかった、ら、死んで」

「真弘だからだよ。そうじゃなきゃここまでやらない。でなきゃ僕は殺人犯になっちゃうからね」

「なお、たちが、悪い」

みしみしと音を立てて回復するという奇妙な体験をしながら、真弘はゆっくりと呼吸を整える。

「しかし、我ながら恐ろしい回復速度だな」

「しかも以前より回復速度が上がっている気もするしね。こうなればますます、悪の秘密結社が作った不死身の怪人だな」

「それ、笑えないから。体育ん時とか手加減すんの大変なんだぞ。バスケットって、下手すりゃダンクどころかゴール飛び越えちまう」

実際、一度は白熱しすぎてNBA選手もびつくりのハイジャンプダンクシュートを決めてしまい、誤魔化すのにえらく苦心したこと

がある。ちなみにそのときは、一瞬だけとんでもない追い風が吹いたことにしておいたが、それを信じるやつも信じるやつだ。

「何で気兼ねするんだい？ 僕のように全力でやれば」

「一緒にすんな。俺は一般人でいたいんだ」

「正義の味方とも思えない言動だねえ」

「正義の味方なんかじゃねえからな。お、そうだ、一個言い忘れた。あいつらの目的がわかったぞ」

「あいつら？」

「コーヒーで汚れた手と机をハンカチで拭いていた小豆の動きが止まる。」

「ああ。全身タイツの……パラダイス、だっけか。なんか、魔方陣？ を学校に作ってそれを発動させるのが目的らしいぞ。ってか、魔法なんか発動させてどうすんだろな？」

「真弘？」

「ちゃんと伝えたからな。って何だよ？ いでででで！」

手首が引き絞られるように痛む。見ると、コーヒーでまだちよつとべとつく小豆の手が思いつきり手首を握っていた。みしみしと不吉な音がして今にも圧壊しそうだ。

「どうしてそんなことを知って？ いや、それはいいや。それよりどうして今まで黙っていたんだ？ 忘れてた、って」

「あ、いや、そのなんだ……」

「聞けば、まだ正義の味方としての自覚が足りないようだったし、まだお仕置きが必要みたいだね」

「あの、あの、だな。夜、夜遅かったから、連絡しても悪いかなと、んで今日になってなかなか言うタイミングが見つからなくて」

「へええ、連絡するのが憚られるような時間に天王寺に会っていたわけだ」

「や、ちが、そうじゃなくてそれは、あっちから呼び出されて」

「そうか。やっぱり天王寺か。そうだね、あいつなら頭の中身に目を瞑れば顔もスタイルも申し分なしだね、そういうことか」

語るに落ちるとはまさにこのことで、真弘は自分が地獄への一本道を絶賛爆走中であることを思い知る。死のジェットコースター。止める術はない。

「な、小豆さん、今大事なのは悪の組織の悪の陰謀を止めることで」「その前に、身近な悪の芽を摘む必要があるようだ。さあ、覚悟は良いね」

この日、真弘は二度目の地獄を見た。

## 最速展開

まだ本調子ではないのか、首を回すとゴリゴリと違和感たっぷりな音がする。

「つて。この体もいいのか悪いのかわかんよな」

本来なら即死確定の大怪我も回復するのだが、治るまでは文字通り『死ぬほどの』痛みに耐え続けなければならない。

「何を言ってるんだ、その能力のおかげで正義の味方ができるんだから、いいに決まってるよ」

「いや、むしろだから判断に困ってるんだけどな」

数時間前、昼休み終了のチャイムと同時に炸裂したバックドロップは見事に真弘の頸骨を粉碎した。ちなみにこのとき、スカートでバックドロップをかけたせいで、教室中に猫の肉球模様のパンツをさらしてしまったことに、小豆は気付いていない。

「あのあとばれないようにすんの大変だったんだからな。当てられたときは自分で首支えなきゃならなかったし」

「本当にゾンビの様相を呈してきたね」

「誰のせいだよ」

「まあそれはさておき」

淡々とした声音で、その話題は終わりとばかりに話を切り替える。「連続自販機盗難事件についてタレコミがあっただ」

街頭の明かりにほのかに照らされた小豆の顔は、心なしか高揚しているように見えた。

「タレコミ？ 大丈夫かよそれ。だまされてんじゃねえのか？」

「信憑背については大丈夫だ。ソースは天王寺だからね」

世界で一番危ないソースだろうと突っ込みそうになって、昨晚の話に思い至った。まさか本当に生徒会の活動趣旨に感銘を受けた、とは思わないが、何がしかの意図があって自分達をバックアップするつもりなのはどうかやら本当らしい。

とすると、信憑性はそこそこかもしれないと思い直す。天王寺の場合、何の意図もなく情報をリークするとは思えない。真偽のほどは別として、何らかの意味はあるはずだ。

「どうやら彼女も裏で何かをたくらんでいるようなんだけど、その手ごまとして僕達を動かすつもりらしい」

「そこまでわかってて、その話に乗るのか？」

「虎穴にらずんば虎児を得ずなんて言うつもりはないけど、僕たちにできるのは行動することだけだ。だから、僕は行く。それだけだよ」

いつもの制服姿とは違う、キュロットパンツにブラウスという格好の小豆を見つめて、最強の破壊王も実は高校一年生の女子なんだと実感する。

「何だ？ 何をじろじろと見てるんだ？」

「いや、私服見るの初めてだな、と思ってな」

「そ、そうか。う、動きやすい服を、と思ってな」

「ああ、それで髪も邪魔にならないように括ってるわけだ。気合入ってんな」

真弘の言う通り、今夜の小豆はいつものツインテールではなく、髪を一つに束ねて後でアップにしている。確かにこれなら、いつものツインテールよりは活動しやすいそうだ。

「あ、ああ。その通りだ。こ、このぐらいやらないと、正義は貫けない、からな」

「小豆らしい発想だな」

その一言に、小豆の表情が少し曇ったことになどもちろん気がつかずに、真弘は続ける。よく見ていれば表情の変化や、その奥にある感情の機微を汲み取れそうなものだが、真弘にはそのあたりの機能が搭載されていないようだ。残念ここに極まる。

このあたりが、自分に青春の順番が回ってこない要因なのだと、知らぬは本人ばかり。

「風呂上がりを襲撃するあたりも、実にお前らしい」

夕食を済ませ、風呂にも入ってリビングで何気なくテレビを見ているところを電話で呼び出された。しかもたったの一言「ドアを開けてくれ」とだけ言われて、風呂上りの体から一気に血の気が引いた。

「インターフォン鳴らせばいいだろう？」という真弘の言葉に対して、「正義の味方は自分の通信機を使うほうが雰囲気が出るから」と玄関先で仁王立ちする小豆は、得意満面に言い切った。気持ちはわからないでもないが、電話で通話しながら相手の顔を見ろというのはなんとも微妙な気分にはせられる。

それが一時間ほど前の午後八時。言うがままに連れ出された真弘は、住宅街の片隅でこうしてスパイの真似ごとをさせられている、というわけだ。

「近所さんに目撃されないことを祈るばかりだ。」

「で、天王寺は何だつて？」

「今夜この自動販売機を見張っていれば、やつらは必ず現れる、つて」

「うそくせえな。根拠はなんだよ？」

「これだよ」

そう言つて小豆が取り出したのは、一枚の紙切れ。

「航空写真か？ これ、この町か？」

B5版のノート程度の大きさの紙には、上空から撮ったと思われる風景の写真が印刷されている。それが満貫寺高校を中心とした一色市のものであることは、地図の右端、方角で言つと東側を流れる宝塔川と、宝塔大橋でわかった。

「そこに、昼に真弘からもらったこれを、重ねる」

さらにもう一枚の紙をポケットから引っ張り出す。こちらは同じような大きさだが、紙が違った。半透明で向こう側が透けて見える、トレス用紙というやつだ。

そこに描かれているのは、真弘が前日に天王寺から受け取った魔法陣。どうやらそれを手作業でトレスしたらしい。

「まめだなー」

素直な感想を述べるが、眉一つ動かさずに小豆は作業に没頭する。二枚の紙の角をぴっちりとあわせ、航空地図の特定の点と魔法陣がきっちり重なるようにしてクリップでとめる。

「すると、こうなるわけだ」

完成したのは、町の上に魔法陣を描いた構図だが、ただそれだけだった。

「すまん、いまいちぴんとこない」

「手間のかかるやつだな。つまりはこういうことだ」

そうは言うものの、言葉とは裏腹に小豆はちよつとだけ嬉しそうだ。口の端が少しだけつりあがって、心なしか口調も軽い。

「いいか？ この地図に自動販売機が盗まれたところを書き込んでいくと、こことここ」

「あ、俺が使ってたのがここだ」

ピンクの蛍光ペンで次々と書き込まれた点は、ことごとくが魔法陣の上、さらに言うなら、線と線が交わるところにうがたれていく。「で、今のところ最後が、ここ」

真ん中近く、三本の線が交わるあたりに勢いよくペン先を叩きつけると、ほぼ全部の交点がピンク色にそまる。一箇所を除いて。

「あー、で、ここなわけな」

唯一ピンク色に塗られていない場所、それが自分たちのいる場所というわけだ。

答えを聞いてからではありきたりに思える、物語なんかではありがちな展開だが、こうして目の前で謎を解かれると、意外なほどきりぎりまで気づかないものだと感じる。

「まさか自動販売機の盗難がこんな形でつながるとはね。けれど、これで僕達の目標は一つに絞られたわけだ。確認してきたけど、ほかの点の自動販売機は盗難済みだったよ」

「ほおー。にわかには信じられねえけど、確かにこりやすういな。ただの窃盗団ってだけじゃなかったんだな。パラ・ダイス」

「感心してる場合じゃない。問題なのは、ここが最後の一箇所だつてことだよ。気づくのが遅すぎた」

「まあ、このタイミングは確実に誰かさんの演出だろうけどな」

改めてたいしたものと思わざるを得ない。ありきたりな計画とはいえ、コマである自分達を動かすタイミングまですべてが計算しつくされていることを考えると、まさに神か悪魔の所業といったところだ。

「でもよ、何でもここまで来て俺たちにばらすんだろっな？」

「さあね。そうするメリットがあいつにはある、そうとしか言いようがない。さつきも言ったけど、僕らにできるのは行動することだけだ」

「なんか腑に落ちねえっていうか、ほんとにそのとおりに行動していいのかわかるか……」

引つかかるものがあるかといわれれば、引つかかる場所だらけだ。昨日の美緒の言動から、メイド服の意味深な言葉、さらには自分が改造を施されたこと、すべてが疑わしく思えてくる。中でも一番の不確定要素である、自分自身が。

「なんて顔してるんだよ？ 正義の味方がそんな顔じゃ、締まらないだろ」

「ん、ああ」

曖昧に返事をしてお茶を濁したつもりだが、小豆には何もかも見抜かれそう、真弘は無意識のうちに背を向けた。そうすれば隠し通せるとでもいうように。

また逃げた。そんな声が胸の中に次々に浮かんで溢れた。

「んなことより、アレ見張ってないと」

力任せに首根っこをひっ捕まえられ、無理やり回れ右させられる。世界が高速回転して一瞬意識がブラックアウトしかけたが、それを許さないほど、小豆の視線は力強い。

「何を、考えてる？」

鋭い視線は、物理的に圧力を持っているように、真弘をその場に

縫いとめる。

「何って、別に。ほら、正義の味方なんだろ？」

「そうだよ。真弘は正義の味方だ」

「何回も言ってるけど、正義の味方なんか俺じゃなくてお前だって……」

「違う！」

あまりにも激しい感情の発露に、真弘はただたじろぐしかなかった。

これまで、どれだけ大暴れしているときでも、小豆が感情的になることはほとんどなかった。それは表面的な表情もそうだったし、感情任せに力を振るうこともしなかった。あるのは自らの正義に忠実な、信念とでもいうべきもの。

端的に言うなら、どこまでもストイック。それが真弘の知る小豆だった。

行動は過激で、突拍子も情け容赦もないが、そこには感情ではなく信念があった。

「真弘は、うそをついてる」

「うそ？　俺が？　ってか、今晚のお前ちょっと変だぞ。不機嫌つつか」

「そんなことはない。おかしいのは真弘だ。そうだ。真弘は、正義の味方だ。なのに、どうしてそんなことを言うんだ？」

「なにを」

「どうして、真弘は正義を信じないように、自分を誤魔化すんだ？　決して声を荒らげているわけではない。むしろ、いつもに比べればポリウム自体は抑えられている。だというのに、今浴びせられている言葉は、真弘の感情を抉り取るように鋭い。生の感情、心が直接投げつけられているようだ。」

だから、言葉が返せない。

それが真実であることを、誰よりも理解しているから。

小豆の言うとおり、自分はたくさんものを誤魔化して、隠して、

逃げている。

自分で、それを選んだから。

「何でかね？」

「なにがだよ？」

「お前といい天王寺といい、どうしてそう人の心をずばずば見抜くかな。魔女やら正義の味方ってより、超能力者だぞ、お前ら」

「そんなことはどうでも」

「俺には、正義なんてねえの。力はあるけど正義はねえ。まあ、天王寺はなんか違うこと言ってたけど、そういうこと。それが俺の選んだ道。だから俺には正義の味方なんてできねえの。俺の中の正義は空っぽだ。ただ面白おかしく日々をすごすことだけ考えてんだよ。お前と違ってな」

「そんな、そんなこと」

「ってわけだ。発作的に奇行に出るトラウマ持ちなだけだよ、俺は。正義の味方は、お前一人でじゅうぶわぶっ」

「そんなこと、言うなよお」

小豆の手のひらが真弘の口元を押さえる。が、握力が強すぎてアイアンクローになってしまっている。あごの骨がミキミキと音を立て、脳髓を貫く痛みを意識が遠のく。

「真弘がそんなこと、言うなよ。僕は嬉しかった。あの日、初めてあった日、真弘は僕を守ろうとしてくれた。何度も他人を守ろうとして、我が身を省みずに行動した。それを正義じゃないなんて、自分には正義がないなんて」

痛みに悶えていた真弘が声をあげるのをやめたのは、小豆の目を見てしまったからだ。

うるんだ瞳や頬を伝う涙なんてものを見たのなら、もっと違った反応もできたのかもしれない。けれど、今日の前にある小豆の瞳は涙なんて一つも浮かべてはいなかった。

ただその奥に、呑みこまれそうなほどに深い悲しみを湛えていただけだ。

「本気、なのか？」

しばらく考えて、真弘はゆっくりと首を縦に振る。

自分で決めた、なんて大げさな言い方ができるような立派なものではないが、それが真弘の選んだ道だ。その気持ちは、小豆の悲痛な視線を受け止めてなお、揺らぐことはなかった。

「俺に、正義を語る資格なんて……ねえって。お前の方が向いてるし。ほら、静かにしてないとそいつらが来たときに」

うなだれ、前髪で目元の見えない小豆が唇を噛んでいる。今にも自分の唇を食いちぎりそうに強く、血がにじむほどに。

「……」

「え？」

唇を噛んだままの小豆の言葉を、真弘は聴きとることができなかった。

そして、聞き返すよりも早く。

「げ、何でいるんだ」

最悪のタイミングで現れた、全身タイツ。人数は視界に入るだけで五人。自動販売機の窃盗のためだけに組まれたチームだったのだ。が、不運としか言いようがない。

たまったフラストレーションのはけ口にぶん殴ってやろうかとも思ったが、最速の反応を見せたのは、当然のように小豆だった。

声が鼓膜に届いた瞬間に動き出したとは思えない動きで振り返り、振り向きざまの回し蹴りが驚きにのけぞっていた男の横っつらに直撃する。もちろん、意識など一グラムも残さない。

驚く間もなく、後ろで足止めを食らっていた三人をハイキックと飛びひざ蹴りで昏倒させる。呻き声一つあげられずに崩れ落ちる人間というのには、どうしても慣れることができない真弘は、一瞬前まで自分が抱えていた負の感情が一蹴されたことに気づく。

見ているだけなら、これほどすがすがしい闘い方もない。

「ひっ、き、聞いてね」

ほんの数秒遅れてやってきた五人目は、ただ悲鳴をあげることし

かできなかった。

喉を握りつぶされたような、悲愴感溢れる呼吸音。

そんな胸ぐらに、小豆の手が伸びる。

「僕を」

「ひ、ひ、ひいいいいいい」

大の男があげる声ではない、などと言えるのは目の前の光景を見ていないものだけだ。この時の小豆の形相は、前髪に隠れて半分ほどしか見えなかったとはいえ、大の男に死を直感させるに十分な凄惨さを孕んでいた。

たかだか自販機盗んだぐらいで。そんなことを男が思ったかどうかは定かではないが、ちよろちよろと股間を濡らす生暖かい液体がその悲惨さを如実に物語っている。

「僕を、連れて行け」

真弘が初めて出会った時のような、感情の機微を一切取り除いた声音で、唐突にそんなことを言う。

あっさり男を解放し、真弘を押しつけるようにして歩き出した小豆は、

ぎしっ

鈍い音ともに、自動販売機を持ち上げる。

空の重量でも二百キロ以上。中身が入っていれば三百キロ近いはずのそれが、女子高生の細腕で持ちあがる光景というのは、圧巻を通り越して現実味がない。

ただ、何よりも現実味を奪い去っているのは、小豆の表情だった。月明りに照らされた小豆の顔からは、一切の感情が消え失せている。見つめられるだけで、背筋に氷の杭を打ち込まれたように、脳がきしみをあげる。

迫力。プレッシャー。そんなものが実在するのだと、改めて実感する。

「僕が、今からお前たちの親分だ」

唯一意識のあるタイツ男は、倒れ伏している四人を驚くべき手際で乗ってきたトラックの荷台に積み込むと、濡れた股間をどうにかするの忘れて車を発進させた。

赤いコーラの自販機を支えるようにして荷台に立つ小豆の、突き刺すような視線を浴びながら、真弘は微動だにすることができなかった。

結局、トラックのテールランプが角を曲がって消えるのを茫然と見送った。

「あいつ、なんてこと」

「まったく、相変わらず想像の遙か斜め上を行ってくださいます」と

穏やかな口調に柔らかな声音は、脳内ですぐにゴスロリメイド服の映像に直結した。

極力平静を装って声のする方を振り返ると、案の定そこには黒のドレスに白のレースを合わせたメイド服が、仮面をつけてかがみこんでいた。ちょうど先ほどまで、自動販売機があったあたりだ。

真弘からではちょうどスカートが邪魔になって見えない角度で、今設置されたばかりの装置が薄青く輝き、すぐに姿を消す。人の意識から自身を隠すための結界を内蔵しているという説明をうけてはいたが、さしてそのことには興味はない。

目的が果たせれば何でもいい。華はそう考えている。

「おい、何企んだんだよ。自動販売機盗んで、魔法陣なんか作って」

「おやおや、そこまでご存知ですか。あの女でございますね。まったく、いつもこいつも勝手に動いてくれやがりますこと。面倒ばかり増やしてくださいさる」

「勝手なことやってないで、聞いたことにちゃんと答え」

「聞かれたところで、どうなさるおつもりです？」

慇懃な物言いだ、仮面のすぐ裏側にある侮蔑の視線を隠そうともしない態度は、へたに言葉に出して罵られるよりもずっと堪えた。「あなたのような中身のないクズが、どうなさると？」

月明りに照らされ、仮面からのぞくわずかな瞳には同じ人間を見るぬくもりは一切ない。愛情の反対は無関心と言うが、その瞳がまさにそれだった。

道端の石ころだって、こんな目で見られれば死にたくなる。そんな目だ。

「今までどれほどのことがあるうと決してご自分では何もなさろうともせず、何故に彼女があのような行動に出たのか、そのメッセーヂをすら考えようともせず、ひたすら逃げて逃げて逃げ抜いてきただけのあなたが、今さら何をなさるとおっしゃいます？」

「そんなこと」

腹の底にどす黒い感情が波を立て、真弘は奥歯を噛みしめる。が、反論の余地がないことも頭の冷静な部分では感じている。どこまでも正論であるがゆえに、腹立たしい。

「ごさいますよ。あなたは逃げるだけの、ヘタレでごさいます。力があり、機会があり、期待もございましたのに、あなたはそのすべてに答えずに逃げてこられました。まったく、これのどこをどう見れば正義の味方に見えるのやら、あの生徒会長の目もことん節穴でございますね。まあ、電波な女のすることにはいちいち驚いてもきりはいけません」

感動的なまでに淡々と言いつ切られた罵倒だが、メイドはそれを鼻にかけるでもなく、さらに続ける。

「さて、あのような電波系のお話をしに参ったものではございません。私は、あなたに用がございます」

「俺に？」

何故かむかむかと気分が悪い。先ほどまで自分に浴びせられていた罵倒は確かに不愉快だったが、今は明確な怒りと不快感が全身を駆け巡っている。

「さようでございます。端的に申しますと……死んでいただきます」  
パシン、という乾いた音がさほど広くない道路にはじけ、ブロツク塀に反響する。パラパラと音を立ててこぼれおちるコンクリー

トブロックの破片を目で追っていると、その中を何かが動いた。

「っ痛え！」

音は聞こえなかった。代わりに視界がぶれる程の衝撃が頭蓋骨に叩きつけられる。次の瞬間に感じたのは、炎を押しつけられたような熱。それが痛みであることに気づくよりも早く、次の一撃が反対側の頬をぶち抜く。

「やはり多少は頑丈でございますね。ですが、回復が追いつかないほどに破壊してしまえば、それで済みでございます」

落ちていた口調とは裏腹に、とんでもない速度で腕が振るわれる。ただの紐を、ただ高速で、ただ打ちつける。シンプルであるがゆえに有効だ。

「む、鞭か？ 暗くて、よく見えねえ」

何とか目で追おうとするも、それが鞭であることに気がつくまでに腕はズタズタに引き裂かれ、顔にも蚯蚓腫れを通り越して血を噴き出すほどの傷がいくつも刻まれていた。

「私はあなたが大嫌いでございます。何もせず、逃げるだけ。絶対に安全な距離で暮らし、いざとなればご自身だけは自らのお力で何とか逃げ果せる。力を持った、心を持たない存在。正義でも、悪でもない。そして」

辛辣で、容赦がなくて、

「だったら、なんだよ？」

真実だ。あまりの正解っぷりに、真弘は思わず失笑しそうになる。「そのことを齒がゆく思っておられるにもかかわらず、思っているだけ」

鞭が唸り、風を切る音よりも速く先端が頬を掠め、耳たぶが刃物で切ったように裂ける。その間にも腕や顔の傷は驚くほどの速さで治癒し、肉が見えていたところに皮膚が再生し始めている。

そんな自分の腕を見ながら、まるでゾンビだと一人ごちた。

「なけなしの正義をさえ、トラウマと切って捨てる。底抜けの腰ぬけでございます。へどが出ます。あなたに、お嬢様は渡しません」

とどめとばかりに再び振るわれた鞭だが、血を吸って幾分重くなっていたのが仇になった。重くなり、速度が落ちたところを、真弘の手がしっかりと捕まえる、

肉に食い込み、血が噴き出す痛みと代償の、特攻だ。

「わかった風なこと、言ってんじゃねえぞ」

捕まえた鞭の先端を手首に巻きつけ、真弘は力いっぱい引き寄せ  
る。

想定外の力に華の足元がふらつく。さすがに、単純な腕力では真弘に歩があるようだ。

「わかっておりますよ、あなた様が正義の味方の器ではないことなど。それどころか、世の中に絶望して何かを望むこと諦めたあなたに、正義の味方を名乗る資格などございません。とくに。わかっていらっしやらないのはあの電波な会長と……だけでございます」

「会長と」の後に続くのが誰なのか気にならなかったわけではないが、今はとにかく、  
「わりい、やっぱうちの会長を悪く言われると、むかつくわ。電波なのは、認めるけど」

再び力任せに、今度は勢いをつけて鞭を引く。

壊滅的にバランスを崩した華は、しかし鞭だけは手放すまいと手の平に力を込め、

「あっ」

宙を舞った。真弘に向かって、緩やかな放物線を描いて飛ぶ。

月を横切る姿に、真弘は往年のSF映画の傑作を思い出したが、それも一瞬のことだ。

目の前に尻もちをついたメイド服を傲然と見降ろし、言葉を選ぶ  
「俺は、正義の味方にはなれねえよ。そもそも正義なんて信じてねえしな。でも」

鞭を投げ捨てるようにして手放し、一度だけゆっくり息を吸う。  
吐く。

「小豆の信じてる正義は、ちゃんと正義だ。それは、だれにも否定

はできない」

なぜこんなところで、あんな面倒なだけの女をかばっているのか。どれだけ自問しても答えは出ないが、どうしてもこのまま黙ってはいけない気がした。

その程度には自分は小豆と一緒にいたのかもしれないし、たったの数週間しかいなかった人間でもこう言えるほどの正義を、小豆が持っていたのかもしれない。真弘は後者だと思っている。

「しかし、あなた様が語るとその正義も安っぽく聞こえますわね。その存在を信じていらっやらないのですから。それとも、今になつて捨て去ったものが惜しくなつて、必死に取り戻そうとしていらつしやるのでございましょうか？」

挑発的な物言いは、腕力に屈服した敗者のそれではない。証拠に、口元にはうつつすらと笑みさえ浮かべている。挑発的で、蠱惑的に濡れた唇が、月明りに輝く。

「……かもな」

(ほう)

こつそりと、華は相手に聞かれないような慎重さで溜息をこぼす。「あれといると、ちゃんと正義があるつて思える。やってることは暴力大魔神だけどな」

「あなたの思考回路はよくわかりませんわね。正義と暴力大魔神などと、矛盾も甚だしゅうございますが」

「俺もそう思う。でもな、そうなんだよ。ありや正義の大魔神だ」  
むしろ、たまたま口にしたその表現がなんともしっくりくる気がするしてしまう。

「まあ、否定は致しませんが。今は悪の大魔神、でございますよ？」  
「なんだよな……何考えてるのかわからねえ」

「だからドーテーなのでございますよおつと、お口が滑りました」  
仮面からこぼれた口元を覆い、わざとらしく笑うメイド服はどこまでも腹立たしい。

「やつかまし」「で、どうなさるおつもりで？」

腕を組み、姿勢をただしたメイド姿は、うつかり声をかけるものはばかられるようなオーラに包まれている。小豆の時とはまた違う、独特の圧迫感だ。

「私はこれから、あの電波の会長を止めに行きます。あなたのようなヘタレドーターの相手をしている暇はなくなりました」

「また」

「もう一度聞きます」

胸を強調し、ゴミを見るような冷たい視線を仮面の奥から投げかける。

「あなたは、どうなさるおつもりのですか？」

## 最大戦速

走り出した真弘の背中を見送りながら、歪んでしまった純白のエプロンを直す。

「手のかかるクソガキでございます。まったく、面倒臭いことこのうえございません。何故にお嬢様はあのようなヘタレがよろしいのか、理解に苦しんでしまいます」

与えられた使命、つまり真弘がうじうじと腐っているようであれば、計画通り動くように尻に火をつけるという役割は充分に果たされた。使命感のかけらでも持つていてくれればいいのだがと心の中で思いかけて、

「無理でございましょうね」

ボソリとこぼす。その言葉には一切の情けはない。

ちなみに、先ほど浴びせかけた罵倒の数々は全て本心で、何ならあれでも手加減してやったほどだ。感情と仕事を切りわけることこそがプロなのだと、自分に言い聞かせる。

仮面を外し、金属に覆われてこわばった眉間を揉みながら、鞭を拾い上げる。

「私でしたら、いつ何時でもお嬢様を超音速で至高の花園にお連れ申しあげると常々申し上げておりますのにはほんもっ……こほん、暴走いたしました」

まるで他人をたしなめるように、自身の頬をペチリと軽くはたく。

「さて、どれほどの願いが叶うことやら、でございますが……」

鞭の張りを確認し、一度だけ振り返る。

さきほど自分が設置した「それ」を確認するために。

「まあ、何とかありません」

人の目に留まらない光が、ゆつくりと広がってゆく。

すぐそばにある自動販売機用のコンセントが、電氣的負荷に小さく放電する。

それで十分だった。

線香花火のようなちっばけな火花が散ったのを確認して、華は歩き出した。

「ドミノの最初の牌は倒しましたよ、お嬢様」。

華からの報告を受けていたパラ・ダイス本部は最大限の人員を配置し、最高レベルの警戒で防衛網を展開していた。

想定されるコースすべてにバリケードを張って監視すると同時に、今夜の基地として機能している満貫寺の正門前には、機動隊の正式装備でもあるポリカーボネート製の盾を構えた全身タイツがこれでもかと配備されている。ちなみにこの盾、ものは機動隊の物と同じだが、その真ん中には秘密結社パラ・ダイスのシンボルでもある、目の模様に地球を模したサイコロの図柄が描かれているという凝りようだ。

ちなみに、本来ならまだ勤務しているはずの教職員は理事長権限で一人残らず追い出しているというのだから、その組織力の大きさは計り知れない。

「なあ、どう考えてもこれやりすぎだろ」

「ああ。ここだけで何人いるんだよ？」

「百はいるな。学校の中も十重二十重だ。警視庁とでも喧嘩できるぜ」

そんな一色即発に思える体制もあくまで大局的な見方をすればだ。個々の部署の中を見てみると、まだその濃度が薄いところばかりだ。「おい、無駄口叩いてるなよ。俺達はあるくまで悪の秘密結社だからな、和気あいあいとしてるとこなんかボスに見られたらそれこそ左遷だぞ」

背後で人員配置の指揮を執っていた男が寄って来て、一喝する。

「あ、課長、すみません」

「課長ではなくここでは部隊長と呼べ」

そう言った男は、全身タイツのせいで筋骨隆々の肉体美が必要以

上に強調されている。腕回りなど、ちよつと細い女子高生のウエスト程もある。

「あ、さーせん。でも、かちょ……部隊長、ほんとにこんな防衛網必要なんですか？　しかも、今回の作戦って目的も何も知らされてませんし」

注意された三人のうち一人がそんなことを言うと、他の二人だけではなく周囲にいた数名も、うんうんと頷く。

「ん、それがな、俺も何も聞かされとらんだ。ただ指示あるまでここを防衛しろ、と。正義の味方が来る、とだけ」

課長、もとい部隊長は、指揮官権限者にしか与えられないライン入りタイトの、ラインをなぞるようにして腕を組む。このライン入り、実はジャージのようでダサイと不評なのは、パラ・ダイス社員たちの間では公然の秘密だ。

「まーじっすか？　せーぎの味方って、ほんとにそんなんいるんすか？」

「じゃ、じゃ、とうとう俺達も晴れて悪の秘密結社つすね。っても、誰にも自慢できないっすけど」

「だもんなー。言うと思いつきり減俸だもんな」

秘密結社でありながら、株式会社でもあるパラ・ダイスの秘密厳守は徹底しており、表の組織のそれとは比較にならない厳格さだ。特に、その存在そのものの秘匿性に関しては最高レベルの社外秘であり、違反者には死んだ方がましな厳罰が下るとさえいわれている。「あくまでもそう言われているだけだ。ほら、無駄口叩いてないでさっさと持ち場に」

『うああああ何だこいつ！』

部隊間の連絡用に配備されている無線機が、耳がバカになるような絶叫を吐き出す。晴れ渡った夜空に、悲痛な声がこだまする。

恐怖がそのまま音になったような声音は、それまでの弛緩しきっていた空気を一気に引き絞り、その場にいた誰もがごくりと生唾を飲む。

『た、たす、たすけ！』『くつ、くるな！くるなああ！』『いがあああああ』

次々に届けられる音声は、間違いなく付近に展開している部隊のもので、聞き覚えのある声に動揺を隠しきれずにうろたえる者も現れている。

「部隊長……これ、かなり近くじゃないですか？」

音声の明瞭さから、さほど遠くはないと踏んだ通信担当の声が、他の隊員同様に呆けてしまった部隊長のスイッチを入れる。

「氣い引き締めろ！」

返事の代わりに響いた靴音が、全員の緊張感がピークに達したことを教える。

その靴音が夜の空気にしみ込んで消えるよりも早く、かすかなエンジン音が部隊長の耳を打った。不安定に上下する回転数は、運転手の精神状態が極限であることを教えていたが、その原因を想像できない部隊長は、隊員たちに最大級の警戒をするようにという指示をジェスチャーで飛ばす。

その間にもエンジン音は近づき、目の前の夜闇がヘッドライトに切り取られた瞬間、

「赤？」

誰かがそう言ったのを、部隊長は確かに聞いた。そして同時に、

「ああ、確かに」と思ったのを後になって回想する。

「……うわああああ！」「……」

いくつもの悲鳴がこだまし、その悲鳴を飲み込むほどの轟音が爆発する。つい先ほどまで無線機の向こう側だった世界が、その場に現れたのだと言うことを誰もが直感した。その象徴となったのは、正門に突き刺さった真っ赤な墓石。それがコーラの自動販売機だとなつさに理解したものが何人いたか怪しい。

あり得ないことだが、このコーラの自動販売機はとんでもない速度で数十メートルの距離を横切って飛び、正門に突き刺さったというわけだ。

この一瞬で、正門守備部隊の敗北は決定していた。あとはどれだけ時間を稼ぐかだけだが、それも虚しい抵抗だ。

「ひあああああああああ！」

「に、回避！ 回避だああ！」

部隊長の声を待たずに、百近い全身タイツが蜘蛛の子を散らすように逃げ惑う。そこに、さらに追い打ちをかけるように突っ込む、コントロールを失ったトラック。

今度こそ、その場にいた全員が耳が潰れたと思うような凄まじい音と衝撃をぶちまけて、トラックは鋼鉄製の正門とコーラの自販機を轢き殺し、自らのフロントを完全に大破させ、学校の敷地内に踏み込んだところで停止する。バーストしたタイヤにひしゃげたホイール、ねじれたボディが衝撃の凄まじさを物語っているが、最後の悲劇はそこで炸裂した。

「たああい」

部隊長のだみ声も、最後の一言「ひ」は惜しくも間に合わず、しかし誰もその言葉を待たずに既に全力でトラックから遠ざかっていった。

昼になったのかと思うような閃光と、うつかり目を開けていられない熱風がその場にある全てを飲み込むように広がった。その衝撃に、その場にいた全員が腰を抜かしてへたりこむ。ただ一人を除いて。

もはや、誰もがこの状況に「地獄」の二文字以外を考えられなくなっていた。

ガソリンが萌える真っ赤な炎と、立ち上る黒煙に呆然と立ち尽くすパラ・ダイス社員たちだったが、その中を悠然と歩を進めるシルエットが一つ。

燃え盛る炎を背景に浮かび上がった姿は、信じられないほどに幼い、長い髪を両サイドでくくった少女。もちろんその場にいた全員が、たちの悪い冗談か何かの見間違いかと思ったのも無理からぬ話だ。

「お、おまえら！ 何してる！ と、捕え……」

気力だけで立ち上がり、齒を食いしばった部隊長の言葉もそこま  
でだった。

目があってしまったから。

あるレベル以上の武道家ともなれば、互いの纏う空気のようなもの  
だけで相手の力量を推し量ることができるようになるというが、  
まさにそれだった。なまじっか強かったせいで、部隊長にはわかつ  
てしまった。

絶対に無理だ、と。

だから指示も出せなかった。出さなかった。みすみす部下を殺す  
ことはできない。

もはや戦意を喪失し、炎の照り返しを受けて呆けるだけとなった  
防衛部隊を尻目に、少女、小豆は躊躇いのない足取りで校舎に向か  
う。まるで、自分はこれから登校するだけだともいうような、軽  
い足取りで。

「呆れるね。まさかここまでやるとは。会長君の存在はやはり最後  
の最後までネックだったか。おそれいるよ」

正門で起こった、ハリウッド映画もかくやという爆発炎上の演出  
を眺めてほくそ笑む。

そんなもの使わなくても充分見えるのに、美緒は敢えて首からぶ  
ら下げた双眼鏡を覗き込む。そうして、呆然とするパラ・ダイス社  
員と小豆の表情をつぶさに観察している。

「というか、あの会長君にここまでさせる副会長君が凄い、という  
べきなのかな？」

双眼鏡が切り取った丸い視界の中で、眉一つ動かさない小豆の美  
貌が、炎のオレンジに照らされて輝く。

「というわけで、意外と早くタイムリミットが来てしまいそうだね。  
コマがそろってしまいう前に、ケリをつけなければだ」

双眼鏡を顔にあてたままで振り返ると、倍率調整をしていない上

に光量が先ほどと全く違うせいではほとんど何も見えない。円形に切り取られた暗闇があるだけだ。

「電話で呼び出されたと思ったら、これは一体どういうことになっているんです？ なにやら街全体から魔法のエネルギーのようなものも検知されていますし」

修理が終わったばかりの体を確かめるように、一郎はコキコキと首を鳴らす。

「それが検知できるとは……噂通り、対魔道用に改造されたんだね、君は。嬉しい限りだよ」

「僕は嬉しくありませんよ。も、これでまた穏やかな学園生活から一步遠のきましたよ。で、何が起こっているんです？」

特別興味があつたわけではないが、一郎は尋ねる。何となくここはそういう会話をしておくところなのだろうと、妙な気を利かせて「君も面白い奴だな。妙なところで人間くさいと言うか。と、これは失礼に当たったかな？ 気分を害したら申し訳ない」

「いえ、気にしません」

「それはどうも。では、さすがに何の説明もなく力を振るうのも気が引けると言うわけで、簡単に説明をさせてもらおうか」

そう言うところか誇らしげに口の端をつり上げ、自信たつぷりの口調で説明を始める。

「今から行つのは、現時点での総決算。町全体を利用した超々大規模な魔法陣を完成させ、そこから得られるほぼ無尽蔵の魔法エネルギーを利用して魔法を使うとどの程度の効果が得られるのか、というものだ」

「あっさり言いますが、またとんでもないことを考えたものですね」「褒め言葉と受け取っておくよ。というわけで、その魔法を受け止める的として、君が抜擢されたわけだ。さすがの私も殺人を犯すわけにはいかず、かと言って無機物を相手に威力を誇っても虚しいだけだからね」

「難儀な人ですね。できれば僕も無機物として扱っていただければ

よいのですが」

そうは言うものの、どこか諦め口調なうえに、がつくりと肩が落ちていいる。抵抗が無駄だということをちゃんと熟知している程度には、面識があるらしい。

「もちろん、そんな要求は受け入れられない」

そう言った美緒は、ブラウスの胸ポケットから一枚の紙切れを取り出す。

「観念したまえ」

手にした紙を勢いよく空に向かって掲げると、そこに描かれていた幾何学的な模様がほの赤い光を放ち、美緒の体を包み込む。

「はあ……やっぱり聞き入れてはもらえませんか。難儀ですねぇ」

炎のオレンジと美緒の作りだした赤。二つの光を浴びながら、ただでさえ垂れ目の目尻をさらに垂れさせて、一郎は溜息をこぼす。

「いつくよぉー！」

そんな一郎など全く無視して、甲高い声が元気いっぱいに炸裂する。

「戦闘開始ー！」

その声を合図に、それまで美緒を包みこんでいた光は粒子になってはじけ飛び、蛍の乱舞のように屋上中にばらまかれる。その中から現れた、

「負けないんだからね！」

幼い少女が満面の笑みで一郎を指差している。いや、指しているのは指ではなく、手にしている何やら派手な棒だ。色とりどりの寶石で過剰なまでに装飾されたそれは、日曜朝の魔女っ子番組に出てくるようなカラーリングだ。というか、魔女っ子の武器そのものだ。形がバールであることを除いて。

「変身とは……さすがに、これには驚きです」

「ふっふーん、どうだ、すごいでしょう？　これがあたしの本領発揮、魔法少女モードだ！　って言っても、この辺り一帯に敷いた魔法陣が魔力を供給している間だけっていうタイムリミットがあるか

ら、その間にあんたを倒せばあたしの勝ち、それ以外はあんたの勝ち」

高々と宣言し、キメキメのポーズをとってはいるが、顔だちは紛れもなく美緒だ。ただかなり幼く小さくなっており、それに合わせてボディラインも修正されている。

「たしかに、生体反応は天王寺さんですが、たまげましたね。びつくりの逆変身ですね」

「ぎゃくつてどーゆーことだよ？」

「普通、変身するとナイスバディになりませんか？」

そんな一郎らしからぬ真つ当な意見に、クツクツと笑う様はまぎれもなく天王寺美緒その人だ。中身が天王寺の魔女っ子。真弘が見れば、絶望のため息をこぼすこと間違いなしだ。

「驚くのはこれからなんだからね！ 速攻ー！」

飛びあがり、靴のかかと同士をこつんとぶつける。するとエナメル塗装のようなツヤツヤの靴がキラキラと星をばらまき、靴底からは光の帯が噴出される。

「くらえー！」

ジェット機のエンジンのように光を噴き出し、それを推進力にして美緒は夜空を一気に急上昇する。月を背負い、ヒラヒラのフリルがついたスカートをはためかせている姿は、まぎれもなく魔女っ子そのものだ。

「マジカルバールの力、受けてみるお！」

色とりどりの装飾を施された純白のバールが輝き、一転して急降下を始めた美緒の目の前の空中に、何やら幾何学模様が描かれる。

「くらえー！」

光を帯びて空中に描かれた魔法陣から放たれたのは極太の炎の渦。真つ赤に燃え盛る炎が屋上一体を昼間のように照らし、意志を持っているかのようなオレンジ色の帯が、うねりながら一郎に襲いかかる。

「なんの！」

炎がオレンジ色から純白に姿を変えたのは、呑みこまれば人間なら骨も残さないような高温であることを示している。が、気合一発、一郎は拳を炎に叩きつけて霧散させる。

花火のようににはじけた炎が、爆風となって夜空に舞いあがる。

「まだまだあ！」

この程度は予想済みとでも言うように、爆風に煽られながら器用に姿勢を保った美緒が次に描いたのは、少々立体的な魔法陣。そこから現れる、無数のコウモリ。

「これならどうだあ！」

甲高い叫び声は実に楽しそうだ。その声を合図に、視界を埋め尽くすほどのコウモリの大群が一斉に一郎に襲い掛かる。

「んもう、今度は質量をもった疑似物質ですか？　こういうのも面倒なんですよね」

「一発で見抜くとは、さすがだね。伊達に対魔道兵器をやってるわけじゃなさそうね」

「兵器じゃないんですがねえ」

のらりくらりと会話をこなしながら、一郎の手は確実に迫りくるコウモリを撃墜する。それでも数百のコウモリを全て撃墜するというのは生半ではなく、弾幕のような拳をくぐりぬけたコウモリによって、一郎の着ている制服は徐々にスタスタになってゆく。

「あゝあ、止むをえませんか。会長さんには内緒にしておいてくださいよ」

力なくそう言ったかと思うと、目の前の数匹をはたき落とした一郎は一気に後方に飛び退り、手近に設置されてあるベンチを手にし、「ええーい！」

これまた迫力に欠ける声をあげ、思い切りベンチをフルスイングする。

ブオンツ！　という物騒極まりない音をあげて振るわれたベンチは、迫りくるコウモリを一網打尽にはたき落とす。地面に落ちたものは動かなくなると同時に砂のようになって崩れ落ち、先ほどの炎

によって作り出された上昇気流に乗って消えてゆく。

「まだまだあ！」

再び光を放つボールは、今度は美緒を中心とした空間に大きな円を三重に描き、それぞれが九十度に交わるように球状の空間を作り出す。

「くうらあえ〜！」

ひとときわまばゆくボールの先端が輝くと、美緒を包み込む球体もそれに合わせて輝き始め、その光が一気に膨れ上がる。

圧縮されたエネルギーが球状の空間の中にあふれ、限界を迎えたところで、

「こ、これはさすがに」

「はじけるお！」

一気に爆発する。

先ほどの炎の時とは比べ物にならない、膨大な量の熱と爆風が屋上に吹き荒れ、屋上緑化の芝生も給水塔も、果ては階段室も吹き飛ばして荒れ狂う。魔法陣から吸い上げたほぼ無尽蔵のエネルギーにものをいわせた、大出力魔法。

「本当なら拠点制圧や戦局の一発逆転用魔法だったらしいけど、あんたが相手ならこのぐらいしないかね」

美緒を取り囲む魔法陣が光の粒子になって消滅する。あとに残されたのは、爆撃でも受けたかのように荒れ果て、崩壊した屋上。転落防止用のフェンスは軒並み歪み、外側に向かって倒れ、アスファルトはひび割れて抉れている。

一か所、一郎の足元を除いて。

「ぷはあ、驚きました。なんて破壊力ですか、もう。あゝあ、会長さんに怒られます、一緒に謝ってくださいよ？」

顔を守るようにして両腕をクロスしていた一郎は、もはやぼろ布同然となった制服の袖を破り捨てながら、げんなりといった様子で呼びかける。

「く〜、けっこう本気だったのになあ」

「でしょうねえ、こちらも膝がぐくぐです」

嘘ではなかった。凄まじい衝撃に耐えはしたものの、一郎の体はそこかしこがオーバーヒートし始め、ギシギシと異常な動作音をあげている。脳内には無数のアラート表示が警告音を響かせ、これ以上の負荷はやばいからとつと逃げ出せとしきりに急かしている。

「それじゃ、たぶんこれが最後だから、これに耐えたらあんたの勝ち、ぶっ飛ばしたらあたしの勝ち」

「えー、まだやるんですか？ やですねえ」

「じゃ、いくからね！」

宣言とともに、宙に浮かんだまま美緒はボールを両手で握り、こちらを見上げる一郎に向ける。照準を合わせるようにぴたりと先端を固定し、目を閉じて意識を集中する。

「手加減して、くれませんよね？」

「あつたりまえじゃん」

軽やかに絶望的な宣言をする。

と、それまで荒れ狂っていた屋上の空気が途端に静けさを取り戻す。

しんと静まり返った屋上は先ほどの猛攻が嘘のようで、月の光が降り注ぐ音まで聞こえてきそうなほどだ。地上の喧騒も、今は遠く感じられる。

「じゃ、いくから。パンツ見んなよお」

まるで散歩にでも行くような軽い口調で告げ、ゆっくり深呼吸をする美緒。

と、それまでとは比べ物にならない明るさでボールの先端が光り輝き、真夏の太陽のような明るさで崩壊した屋上を照らす。

「いいつけえええ！ メガ・フレ・アッー！ー！」

光の粒子が弾けるような満面の笑みとともに、ボールの先端から凄まじい太さの光の奔流が生み出され、一直線に一郎に向かって放たれた。

それと同時に、光の模様が一色市をぐるりと取り囲む。極大破壊

力の攻撃魔法が要求したのは、町全体を取り囲むほどの魔法陣の供給限界に匹敵する量の魔力。それが一本の流れになっっているのだから、その破壊力たるや、常識の範疇を遥かに超える。へたをすれば、魔法陣と同じサイズの街を消し炭にできるほどだ。

それを、

「壊したら、お父さんに申し訳が立ちません！」

一郎は両手を差し出し、真っ向から受け止める。

普通の人間なら接触と同時に消滅してしまうほどのエネルギーを手の平で受け止めると、凄まじい衝撃が足元を伝って、屋上のみならず校舎全体を振動させる。街一つが消し飛ぶエネルギーなのだから当然だが、それでも一郎がひるむことはなく、

「ええーい！」

相変わらず覇気に欠ける声で押し返す。

「こんのおおお！ 負けないんだからあ！」

片や美緒も、魔法陣からのエネルギーに自らの持つ魔力を上乗せして、最後のひと押しとばかりに気合を込めて叫ぶ。それに呼応して、一郎も叫ぶ。

「「おりやああああ！」」

限界を超えて圧縮された膨大なエネルギーは、いよいよ限界を迎えてはじけ飛び、光となって町全体を包み込む。

## 最強少女2

燃え盛るトラックにひしゃげた校門。茫然自失の境地に至った多数の全身タイツ。それだけでも常識外れに非常事態なのは明白だ。なのに、見上げた屋上では核爆発のような光がはじけ、町全体もぼんやりと夕焼けのような光に晒されている。

世界最後の日、そんなタイトルの映画があれば、まさにこの光景はその映画のクライマックスに相応しいだろう。そんなことを考えながら、真弘は正門をくぐる。

「もう、滅茶苦茶だな」

特に何をするでもなく立ちつくす全身タイツを尻目に、メイド服の言う通りにグラウンドの中央を目指した。どうやらそこが、全てが収束する、終幕の舞台らしい。

辛うじて活動できている数名の全身タイツのおかげで、トラックの炎上はほぼ収まり、屋上の輝きも先ほどの光の奔流を最後に現れてはいない。

ただ、町全体を包み込む夕暮れのような光は、依然として消える気配はない。

保健室のある本館の横を通り過ぎ、テニスコートを横目に中庭を抜けると、藤棚の向こうに校庭が現れる。鮮やかな薄紫に色付いた藤の花が、夕焼け色の夜空に映えて妙に幻想的な光景を作り出していた。

ただし、足元を見なければという条件付きで。

「うわ……こっちもこっちで地獄だな」

真弘が目細めながら思い出したのは、数日前の放課後。屋上での地獄絵図だ。

そこにいる誰もがピクリとも動かず、あるものは倒れ伏し、あるものは藤棚に引っ掛かり、あるものはサッカーゴールやバスケのゴールに引っ掛かってぶら下がっている。

人間がぼろ布のように見える光景はデジャヴのようだ。

「デジャヴだったらどんだけよかったか、って話だよな」

それが証拠に、今回の地獄は規模がケタ違いだった。

屋上の際の被害者が十名程度だったのに比べ、今回はグラウンドの半分以上が全身タイツの黒で染まってしまうほどだ。人数にして、百や二百ではない。

「よく来たね、真弘」

そんな地獄の中心から、声がする。

聞き覚えのある、年の割には幼い外見によく似合う、少し高めの声。

「よく来たね、じゃねえよ。何やってんだお前は」

できるだけ倒れているタイツを踏まないように気をつけながら、グラウンドに降り立った真弘は、探すまでもないこの地獄絵図の制作者に悪態をつく。

「あずきー、あほなことやってないで」

「言っただよ、僕は正義ではなく、悪の道を歩む、って」

「あほめかせ、お前が正義の味方やめられるわけねえだろ」

返事のないグラウンドをじっと見つめる。

死屍累々と言うにふさわしいグラウンドの真ん中に、ぽつんと立ちつくすシルエット。小豆だというのは、遠目にもすぐにわかる。

ツインテールに戻した髪が、まだ冷たい夜の風に揺れる。

「……………」

「え？ なにー？」

何かを言ったのはわかったが、何と言ったのかまでは聞き取れない。そんな距離を、真弘はゆっくりと歩く。もうこの辺りまで来ると、倒れている人を踏まずに歩くのは不可能なので、足でどかしながら進まざるを得ない。

えらく手間のかかる作業だが、さすがに踏んでいくのは忍びない。「ばか、って言ったんだよ」

ようやく表情の動きが見えるような距離にまで近づいたところで、

小豆のそんな一言が聞こえる。ふてくされた、いつもの小豆らしからぬ声に、真弘も思わず声を荒らげる。

「はあ？ ばかって、そりゃこっちのセリフだろ。いきなり飛び出してっただと思ったら、こんな大暴れして。子供じゃねえんだから」

「もういい！」

「もういいって、よかねえだろ。お前が正義の味方やんなきゃ誰が」  
「僕は、真弘に正義の味方をやってもらいたかったんだ！」

そう言っ、小豆はそっぽを向いてしまふ。

「小豆、お前」

「もういいんだ！ 真弘が僕を正義の味方にしようっていうなら、僕は悪の組織として真弘をやっつける」

「待て待て待て！ 理屈がぶっ飛び過ぎててわからん」

思わず駆け寄ろうとして、足元に倒れている全身タイツをふんづけてしまふ。「ぐえ」という呻き声ともつかない音が漏れて、思わず足をあげる。一応、罪悪感はある。

「もう決めたんだ！ 僕はこいつらの計画を成功させる。正義なんかに要らないんだ！」

頑として言い張ったその言葉に、真弘の胸が苦しくなる。

「あほなこと言ってないで……」

さっさとこっちに来い。その言葉が、どうしても続けられなかった。

自分にその一言が言えるのか、言う資格があるのか。何もできず、ただ現実から逃げだして都合の悪いことに目を瞑っていただけの自分。この世界に正義なんてものはないと、自分の無力さに言い訳をした自分。そんな自分が、今の小豆に何が言えるのか。

「問答無用。まかり通るよ、真弘」

「え？」

一瞬の油断だった。

握り締められた拳に「あ、ちょっとやばいかも」と思った時には、小豆の体は真弘の視界から消え、数メートルの距離を一足飛びに縮

めた。

鼻の頭がくつつきそうな距離に、見慣れた黒目がちな瞳があった。瞬間、真弘は宙を舞った。

体はくの字に折れ、内臓が全部口からゲロになって溢れそうな苦痛が、背中まで突き抜けた。シヤレにならないレベルの衝撃に意識は見事に分断され、墜落してしたたかに後頭部を打ちつけてようやく自分がブツ飛ばされたことに気がつく。

「ぶほあっ。お、お、俺、今、死にかけ」

「言っただよ、まかり通るって」

靴の底がとんでもない速度で顔面に迫ったのは間一髪でかわせたが、直後に耳元で響いたえげつない音に、心の底から恐怖した。

グラウンドがクレーター状に抉れる蹴りなんて、聞いたことがない。

「まで！ 待ってくれ！ 話そう、な？ 話を」

「真弘と話すことなんてない。真弘はただ、正義の味方として僕を止めればいいだけだ」

「だから何でそこまでして」

「そこまでなのです！」

転げるようにして逃げる真弘に向かって小豆が飛び蹴りを放つ。

完璧に直撃コースだったのが、唐突に響いた声に一時停止をかけられる。もちろん魔法少女でもロボットでもない小豆は空中で止まることなどできるはずもないので、真弘は飛び蹴りを食らったわけだが。

『アホ丸出しの争いをやめてこっちを見ろです』

拡声器越しの声は夜のグラウンドによく響いたが、それだけではない。よく通る声だ。

思わず耳を傾けさせられる声、とでも言うのだろうか。小豆の聲が持つ問答無用の迫力とはまた違う種類の、求心力のようなものを感じる声だ。

『お前たちが何をどうあがこうと、この魔法陣は発動したのです』

ただし、その求心力がすぐに霧散したのは、悲しい事実だ。

拡声器を持ったイカ。うねうねと動く触手に、何故かライトアップされた三角形のシルエットが、せつかく作りだした緊張感を帳消しにする。背後からスポットライトを浴びせているのは、比較的軽症の全身タイツだが、それでもボロボロなのは一目瞭然だ。

「イカ、だな」

「イカ、だね」

飛び蹴りでボツキリ折れた腕の回復を待ちながら、真弘は小豆と顔を見合わせる。

そこには全く同じ種類の感情を湛えた瞳が二組、きょとんと向き合っている。

「ふんっ、恐怖におそれおののいたですね。この私、パラ・ダイス首領のシルエットに」

「残念ながらそれはないわ」

まだ曲がつてはいけない方向に曲がつている腕をかばいながら、首を振って答える。

「まあそうやって強がつていられるのも今のうちです」

「や、別に強がつてるわけじゃ」

「ちゃーんす！ これで僕が」

力強く、小豆が地面を蹴る。先ほどの数メートルの跳躍などとは比べ物にならない、フルパワーのダッシュだ。小豆の体はほとんど水平に滑空し、数十メートルはあるつかという距離をあっという間に埋めてしまう。

「へ、あ……え？」

地声が届く程度に近づいたというのに、あまりの出来事に思考がついて行かないイカは、目の前の小豆に向かって拡声器越しの声を投げかける。

「一体何を言つて」

「このイカを倒せば、僕がこの組織のトップだよ！」

「な、ちょっ」

「というわけで、いくよ！」

『ま、待つです、待つですよ』

「観念してもらうよ。これで僕は名実ともに悪の」

『た、助けるですよ！ 華！ 誰でもいいですから』

イカの触手に小豆の手がかかり、口元が笑みとは言えない程度にわずかに歪む。

片や着ぐるみの中では、真っ青になった唇をわななかせ、奥歯がちがちと鳴らす紅葉。小豆とは対照的な表情だが、表にそれが漏れることはない。イカの無表情な黒い目玉が、じつと小豆の一挙手一投足を眺めている。リアルに艶やかな瞳が哀愁漂って見えたのは、あくまでも真弘の主観だ。

「どっせええええい！」

『いぎやああああああ』

腕力にものを言わせて全力で引つ張り、ぶん回す。両足を軸に、力の限り、ハンマー投げの要領でイカを振りまわしていると、あまりの勢いに砂ぼこりが舞い上がるほどだ。ブンブンという風を切る音が重い。

「ばっか！ そんな力で投げたら中のやつが」

「くらえー！」

『みぎやあああああ』

真弘の叫びも虚しく、最後のスイングとばかりに腰ために体をひねった小豆は、夜空に向かってイカを放り投げる。

イカ本体と手にしていた拡声器が、別々に宙を舞う。というか、とんでもない速度で射出されたイカは、大気圏を脱出しそうな勢いでほぼ真上に吹っ飛んでゆく。すでに大きさは小指の先ほどになっているので、一瞬で百メートル近い距離を飛んだようだ。

間違つても、人間を投げて飛ぶ距離ではない。

「ばか！ お前、あれで中のやつが死んだら」

「大丈夫、ここには真弘がいる。そんなことはさせないだろ？」

「また他人事みたいに、って、ダメだ落ちてくる」

上昇が緩やかになったのもほんの一瞬で、星空に浮かぶイカが徐々に大きくなり始めている。もしかして、あのままキラリと光って星になったりするのだろうかと思ってもみたが、当然そんなことはならない。

「やはり星にはならないな」

「なるか、あほ！ くっそお、しゃあねえな待つてろよ、絶対余計なことすんなよ！ 言いたいことはあれ助けてからだちくしょおおお！」

完璧に真上ではないせいで、イカは角度の急な放物線を描きながら、グラウンドの反対側めがけて落っこちている。夜空を飛ぶイカ、という現実味が微塵もない光景に、何故だかわからないが真弘は泣きそうになった。

「わけわかんねえし！」

思い切り腕を振って走ると、右腕はまだ折れているせいでひじから下がブラブラとあっちこっちに揺れて、そのたびに激痛が襲ってくる。当然、患部を傷めつけ続けているので治癒が追いつかない。

その間にもイカは徐々に加速し、くると回って自分の触手に絡まっている。中身の人間に意識がないのは明白で、手も足も、ピクリとも動いてはいない。

ある意味幸運なのかもしれないが、中の人のトラウマにならないことを祈るばかりだ。

「んがああああ、間に合えまにあえまにあえええええええ！」

このまま走っている間は間に合わないのが明らかにや、腕がもげるほど力強く振り抜き、思いつきり地面を蹴りつけて、跳んだ。いつぞやの手術室や保健室でそうだったように、景色が超高速で後ろに吹っ飛び、血液が体の後ろ側に偏るほどの大加速。

受け止めるには腕が足りない。だったら。

血液が背中側に偏ったせいでブラックアウトしかけた視界を、気力だけで維持する。視線の高さまで落ちてきたイカの下に体を滑り込ませ、生きている左腕でイカの胴体部分を抱える。

まさにギリギリ、紙一重の大博打だ。

「うごふっ」

タイミング悪く三角形のひれの部分が腕をすり抜け、鳩尾を直撃し、背中が地面にたたきつけられる。おかげで息がつまった真弘は、高速で地面をスライディングしながら激痛と酸欠に苦しむという、二重の地獄を味わう羽目となった。

十メートルほどグラウンドを削った壮絶なスライディングがようやく制止した時には、息も絶え絶え酸欠の金魚のようになっていた。ただ、

『ぬ……っ』

触手でがんにがらめになったイカの中から、微かに呻き声が聞こえる。

殺人現場に居合わせずに済んだ。そして何より、小豆を殺人犯にせずに済んだ。顔が苦悶に歪んでいるのでわかりにくいだが、これでも真弘はほっとしているのだ。

「ほら助けた。僕の言ったとおりだ。さあ、これからも」

「えーかげんにせい！」

ツインテールの分け目めがけて、ぽかりとチョップを叩き込む。もちろん、本気でやった場合、反撃でミンチにされるのは目に見えているので、あくまでも軽く。

「あのなあ、お前はもうちょっと加減つてもんを覚えろよな。俺が間に合わなかったらこのイカ、死んでたぞ」

「そう、か……うーん、でもこいつを倒さないと僕は悪のボスになれないし」

「それは誤解も甚だしゅうございますね」

「うお！ どっから湧いた！」

何の前触れもなく二人の間に現れたメイド服が、つかつかと倒れているイカに歩み寄り、絡まった触手を一つずつ丁寧にほどき始める。

「まったく、ほんとうにあなた方はどこまでも阿呆極まりない馬鹿

どもでございますね」

「なんだと？」

真弘の反論などお構いなしに、華はさらに続ける。

「しかし、そのおかげでよい時間稼ぎにもなりましたし、これで我が組織の目的は達成でございます。」

（あの女の手のひらの上だったような気がするのは癪に障ります）  
が」という呟きは、胸の中だけにとどめたが、明らかに仮面の下の方元が不機嫌そうだ。

「ちなみに、この魔法陣が発動するとどうなるんだ？」

「てめえ、それも知らずに暴走してやがったのか！」

真弘の非難を完璧にスルーした小豆は、ぐるりと周囲を見渡す。学校の敷地の向こうに広がる夜空は夕焼けのようにオレンジ色に染まっている。地上から放たれた光が、夜空を照らしている。

「言う必要もございませんし、すぐに効果は現れるのでございます」  
仮面の奥の目が、妙になまめかしく真弘を眺める。艶っぽさや色っぽさに縁のない真弘だったが、思わず胸がドキドキする妖艶さだ。  
「真弘、あとで死刑だ」

「な、なんでだ！　ってか、そんなことよりこの魔法陣を止めないと大変なことに」

光を放つ町のシルエットを指差しながら周囲をぐるりと見渡して、それに気がついた。

「どうした、真弘？」

「なんか、息苦しくないか」

空気の密度が、増している。

実際に気圧がどうこうというよりも、町全体を覆う雰囲気のようなものが、重苦しくのしかかっているようだ。事実、この前後数時間だけで一色市の救急コールはいつもの十倍以上の件数に膨れ上がっていたほどだ。そのほとんどが、原因不明の不整脈や動悸、過呼吸や呼吸困難といったものだ。

「そついわれれば……多少は、そうかな」

（魔法陣が発動しかかっているからか？　だとしたら、本格的に発動するともつとやばいことになるんじゃない？）

夜空の不自然な明るさにの星が姿を消し、月の輪郭をばやけさせていた。そんな中で真弘が見つけたのは、どういうわけかひと際眩しく輝く、一つの星。

「いや、あれってなんか、ちよつとずつでかくなってる、よう、な」  
指差したのは、月の隣でちかちかと瞬く光の点。

星と言われれば星にも見えるし、飛行機の翼端灯と言われればそう見えなくもない。星の出ている夜空なら気づきもしなかっただろう輝きだ。

「そんなことより、さあ、帝塚山真弘様。約束の時でございます」

「は？　何でいきなり俺なんだよ？」

華が実に恭しく頭を垂れ、一分の隙もないお辞儀を披露する。そのの意味するところに全く思い当たる節のない真弘は、口を半開きにしたアホ面で答える。対照的な二人の仕草。

「申し上げたはずでございます。あなた様を、私どもの、いえ、我が主の物とする、と」

顔をあげ、仮面を直しながら口元に笑みを浮かべる。真意の见えない笑みほど怖いものはない。

「この魔法陣の発動する今が、まさにその時で」

「つてか、あれ落っこちてくるぞ！」

「へ？」

完璧にキメたはずの華の仕草だったのに、真弘は見えていなかった。いや、見ていなかったわけではないのだが、残念なことに興味の優先順は随分と下だったらしい。悲しいかな、行き場を失ったドヤ顔は、ひっこめるタイミングが難しい。

ただ、華のそんな杞憂をよそに真弘が指差したのは、先ほどよりもずっと大きくなった光の点。先ほどまで点だったものが、今は月とそう変わらない大きさだ。

「くる！　メイド、お前はそい力拾え。俺は」

正面でとらえていた真弘と違って、背後を振り返ってようやくそのことに気がついた小豆は反応が遅れてしまう。時間にしてほんの数瞬だが、それが致命的だった。

光っているのは、それ自体が炎を纏っているからだと気がついた頃には、どうやらそいつは隕石で、グラウンド直撃の軌道をとっていることもわかった。

遅すぎた。

「ま、まひ」

「んがああああああ」

避けるにしても間に合わないし、受け止めるにしても小豆が邪魔になる。

となれば選択肢はほとんど残されていない。そして、そんな選択になった時に、自分が得をするような選択ができないのが、真弘だった。

「こんなんばつかだよちくしょお！ また痛い目は俺かよ！」

驚きのあまり固まっている小豆を突き飛ばす。

あわよくばこの直後に自分も脱出、なんてことも一瞬は考えたがどうやら現実と言うのは非情にできているらしい。

口を開け、珍しく表情で驚きを表現している小豆の指先が視界を横切ると同時に、入れ替わりで真っ赤に輝く「それ」が飛び込んで来る。コマ落としのように展開される事態の中で真弘が見たのは、  
(ポット?)

直撃する、電気ポット。

コマ落としに見えたのは真弘の主観がそう感じさせただけで、隕石のスピードが遅かるうはずもない。現実には秒速数キロという常軌を逸した速度だ。

当然、その直撃を受けた真弘は、

「——っ！」

声をあげる間もなく吹っ飛ばされる。

大型のダンプを正面衝突させたようなとんでもない音と衝撃がそ

の場に爆発し、殺しきれないエネルギーは真弘ごと地表に炸裂する。大量に巻き上げられた土砂もさることながら、数十メートルにわたって抉られた地面が、その衝撃の凄まじさを物語っている。

先ほど、真弘がイカを救うために付けたグラウンドの傷など、あとかたもなくけし飛ぶレベルだ。

もうもうと立ち上る砂ぼこりに、衝撃の余波が肌をびりびりと振るわせる。

『んむ……… いったい、なんだというです?』

「お嬢様、お気づきになられましたか」

イカの着ぐるみを軽々と小脇に抱えて、華が尋ねる。華にとっては、目の前の超展開よりも紅葉の安否が優先する。というかそれが常に最優先だ。これに関してはまさにメイドの鏡というほかない。

優先つぶりが少々危ないというのは、もはや暗黙だ。

『ああ、なんか世界がぐるぐる回って宇宙を旅行した気分です』

「あながち間違ってもおりませんが、今は宇宙からの使者が敵でございます」

そう言って華が促した先には、ほぼグラウンドの端まで伸びた巨大な溝。

『何です、それ?』

「まあ、軽い冗談でございます」

『この期に及んでまず冗談が口について出るお前は、ある意味尊敬にあたいするです』

「恐縮でございます」

『あほです』

「恐縮でございます。アホの親分様」

そんないつも通りのやり取りに、口にも顔にも出さずに安堵した華が、次に起こす行動はもちろん、

「では、これより魔法陣効果について確認に参りましょう。あの女の計算ではちょうどこの瞬間をもって発動しているはずでございます」

そう言って見せたのは、レトロなデザインの懐中時計。裏側に、紅葉と二人で採ったプリ蔵が張られているのは、華のトップシークレットだ。

『それはいいですが、何故わざわざ胸の谷間に時計をしまうんです？あてこすりです？』

「他意はございません。さあ、お胸のささやかなお嬢様。ご自身の目でご確認ください」

『ガンジーでも助走つけて殴るレベルというのを、今理解したですよ』

ふくれっ面を作って口をとがらせているが、その裏にあるドキドキを隠しきれないという様子で、イカがてこてこと走り出す。もちろん、着ぐるみの中の表情変化など外から見えるはずもないのに、それがくみ取れるほどわかりやすく、足取りは軽い。

「ま、生きていれば、でございますがね」

そんな主の背中を三歩下がって見つめながら、華がぼつりとつぶやく。

他意は、ない。

## 最終決戦

「……ろ……ひ……おい」

かすかに聞こえる音に、少しずつ自分の意識が形を取り戻していくのを感じる。

「お……ま……、きて……お……」

ただし、あくまでも自分に意識と言うものがあるのを感じる程度で、感覚と呼べるものはおろか、まともな思考すらままならない。どこが上でどこが下なのか。浮いているのか沈んでいるのか、生きているのか死んでいるのか。何も確かなものがない。

（死んでる、ってことはないか。なんせ、ゾンビ状態だしな）  
怖いような気もしたし、これはこれで穏やかな気もした。

（あー、でも、呼ばれてるし。これは返事しなきゃいけない気がする）

思考と言うよりも、もっと深くに刷り込まれた何かがそんな思いにさせると、徐々に声がはつきりと届くようになった。

「まひろ、真弘、起きろ、死ぬな！」

と同時に、声の主や直前の記憶が思い起こされ、意識だけではなく体の輪郭がはつきりと意識される。そして、思った。

（めんどくせえこと全部終わってりゃいいのになあ。でもこいつの声がするってことは）

意識をゆっくりと覚醒させる。

「んなわきゃねえよな。現実是非情だ」

その程度には現実というものを知っているつもりだった。当然、それでも甘いのだが。

重い瞼を押し上げた真弘が最初に見たのは、睨みつけるように真剣な目をした小豆の、必死の顔だった。

「うお！　なんだ、小豆いわ、ちょちょちょ、ちょ」

「真弘！　よかった、生きてる」

「い、痛、死ぬ、死ぬ」

興奮のあまり、小豆は掴んだ真弘の肩をかくかくと揺さぶる。そのたびに関節という関節にドリルをねじ込まれているような、引き絞るような痛みが全身を駆け巡り、再び意識が飛びそうになる。

その痛みによろやく、記憶が隕石ポットの直撃した瞬間に接続される。

傍らには、ほぼ原形をとどめていない黒こげのポットが、煙を上げてている。

「そりや大ダメージだね。くっそ、あのマッドサイエンティストめ」  
「ですから、我らパラ・ダイスの誇る改造技術は本物だと、申しております」

『しかし、ここまで不死身というのは私もびっくりです』

「ふんっ、悪の秘密結社の言うことなんて信じられるものか。でも、よかった。それに」

高飛車に見下ろす仮面の奥では、実は内心ドキドキだったとは言えない華をよそに、小豆はただただ小さな胸をなでおろした。

「なんだよ。まるで生きるか死ぬかの瀬戸際みたいな顔してんな、

小豆」

「ばか！ 瀬戸際だからこうなってるんだろ！」

「待て。何故殴ろうとする！ お前に殴られれば瀬戸際どころか間違いない昇天だ！」

振りあげられた拳から逃げようとしたところで、ふと違和感に気がつく。

「そういうお言葉はまずご自身のお体をご覧になられてからおっしゃるべきかと」

そう言われれば体はやけに重いし、そこらじゅうがズキズキと痛む。そう思っただけ自分の体を見ろして、言葉を失った。

「うわ……」

生きているのが奇跡、どころか、生きているのがおかしい有様だ。右腕は先ほどと変わらず折れたままだが、加えて両足もそれぞれ

アサツテの方向に折れている。左腕に関しては肘から先が見当たらない。その上シャツは血に染まり、皮膚にしてはやけにぬらぬらと輝く何かが見えている。たとえるならまさに、

『ゾンビ』

イカの一言が真弘にクリティカルヒット。折れていないはずの首が、がっくりと九十度うなだれる。おかげで、見た目はますますゾンビだ。

「この状況でそれを言われると、びっくりするぐらい傷ついた」

「何をおっしゃいます、一度死体になって復活したあなた様のことで、どちらにせよ大差はございません。そのようなことよりも」

冷淡というよりは、事務的な感じのする淡々とした口調は、それが疑う余地のない真実であると告げるようだ。思いの外真弘には堪えた。

「真弘様、何かこう、心境と申しますか感情と申しますかに、変化はございませんか？」

「変化？ 最悪の気分だ。生きた心地がしねえ……って俺が言うところにならん」

力なく笑うが、あまりにも自嘲的すぎて悲しさがひたすらに増しただけだった。しかも、その間にも体はどんどん回復し、なくなっていたはずの左腕がほぼそれらしい形を取り戻し始めている。どうやら、千切れたものがくつつく方式ではなく、根元から新しいものが生えてくる仕様らしい。ますますモンスターだ。

その様にさらに凹むという負の無限ループに陥りそうになって、目をそむける。

「いえいえ、その辺ことはどうでもよろしゅうございます。こう、何と申しますか、胸の辺りがむずむずしたりキュンキュンしたり、あまつさえムラムラしたり、恋の炎がメラメラドキドキ……いたしません？」

「せん？」と可愛く首を傾げられても、仮面の奥の瞳が笑っていないので怖い。

「いや、特にそう言った感情的なものは特にないんだが……なんだ？」

真弘の答えに、華はイカの胴体を抱えて五十メートルほどダッシュし、屈みこんでぼそぼそと何やら話し始める。小さな子供が開く作戦会議のような光景だが、実際にも作戦会議だ。

「お嬢様、おかしゅうございます。あの女の説明の通りでしたら、この魔法陣が発動した暁には、一瞬で効果が現れるとのことでしたがいましが」

「うむ。これは一大事です。というか、お前が失敗したんじゃないです？」

「何をおっしゃいます。私めの行動は完璧。慎重に慎重を重ね、結果的に後手に回り、やむなく一か八かになることもいとわずに慎重かつ堅実に行動いたしましたのに」

「途中でかなりおっかしかったですが、目をつぶってやるです」

「寛大な処置に私の涙腺は崩壊寸前でございます」

「そんなことより、やつです」

二人してヤンキーな座り方をしたまま、ちらりと真弘を振り返る。まだ回復は追いついていないらしく、腹の傷の中に内臓を押し込まれる痛みに悶え苦しんでいる。

「というか」

「お嬢様も気づかれましたか？」

「そこに気がつくとは、さすがパラ・ダイスの首領、イカ君だ」  
「ほわあ！」

突然会議に参加した三人目の声に、イカが飛びあがって驚く。

「やっときましたか、この電波ビッチ。さあ、どうということなのか申し開きなさいな」

現れた美緒の姿に、むしろ予想通りと言わんばかりに華は立ち向かい、胸を張って対峙する。

残念ながら、胸のサイズでは美緒の圧勝だが、華の存在感もなかなか捨てがたい。そんなことを考えていた真弘の両目が今、眼つぶ

しを食らって視力まで失った。つくづく救えない男だ。回復までにさらに余計な時間がかかる。

「えらい言われようだが説明してあげよう。計算が狂った」

「。」

「。」

華は仮面を外して、紅葉はイカの頭に開けられた穴（どうやら顔を出す必要があるときのようなものらしい）から首だけをにゅっとのぞかせて、目をまん丸くした。紅葉はともかくとして、華の整った清楚な顔立ちが、漫画のようにきよとしたのはかなり見ものだ。無理もないだろう。

「あれ？ 聞こえなかったのかい？ 計算が狂ったんだよ」

なんてことを、何ら悪びれることなく、傲然と言い放つのだ。

「訂正いたしましょう。あなた様は電波ビッチなどではございません」

「うん？ じゃあ、何だというんだい？」

再び仮面を装着し直して、たたたと真弘たちのいる場所まで戻ってきて踵を返す。そこから思いっきり助走をつけて力強く大地を蹴り、ミサイルのようなドロップキックを放ちながら、叫んだ。

「こんんの、ど電波腐れビッチがあああ！ でございます」

スカートがめくれあがり、その中のガーターベルトや紅葉が嫉妬すること間違いなしの大人の下着が月明りの元に晒されるのもかまわずに放たれた、全力の一撃。

「天王寺さん何故ひっぱるのですっ！」

「バリアーだ」

美緒の隣にいたのが運の尽き、と言うほかないのだろう。絶妙のタイミングでカットインさせられた一郎は、ミサイルのような蹴りを顔面で受け止め、敢え無く撃沈。

外れた首がころころと転がり、その首が「痛いじゃないですか——」と非難の声をあげているが、誰も聞きとめはしない。

「なんだい、そんなに怒ることは」

「ほざけ、でございます。お嬢様がこの計画にどれだけご執心であったことか。毎日毎日恋に焦がれて焦がされて、桃色遊戯な妄想とともに特注抱き枕を抱きしめて、どのようなお気持ちで眠っておいでだったか」「何故それを知っているです!」「あなたのようなビッチにはわかりますまい。嗚呼おかわいそうなお嬢様、かような偽情報をつかまされて踊らされ阿呆をさらされるなどは」

『お前、マジで一回聞くですけど、誰の味方です?』

「いや、私の設計は完璧だった」

「だったら何故」

「ほら」

美緒が指差したのは、先ほどのポットの墜落で抉られた、数十メートルにわたる深い溝。先端あたりでは、真弘がこぼれおちそうな内臓を抱えて、ぼけっと座り込んでいる。

「あそこの地面が抉れているだろう。あれが原因だよ。さすがにあれだけ変更を加えられ、あまつさえあんな高濃度の魔道的なエネルギーを穿たれたとあっては、魔法陣の意味合いなんて変わってしまう。魔法陣というのは実に繊細かつ微妙なバランスで成り立っている、言ってみれば数式のようなものだよ」

『しかし、描線はわかったとして、魔道的なエネルギーというのは?』

たしかに、グラウンドのど真ん中には自動販売機の設置個所のような電氣的なエネルギーなどない。むしろ、そうした不安定要素のなさから、計画をより確実なものにするためにこの場所を選んだほどだ。美緒の助言で。

「そうでございますよ、そもそもこの場所をご指定なさったのもくそビッチの」

「あれだよ、あれ」

そろそろ怨みの籠り始めた二つの視線の中、毅然と美緒が指差したのは、ようやく塞がり始めた腹の傷をしげしげと眺め、自らの肉体に感心する真弘の姿だった。

「あんな強力なエネルギーが描線に流れれば、魔法陣だって意味を変えてしまう。何と言ったか？ えーと、きんぐすとー」

「おじょーさま！ 過ぎたるは及ばざるが如し、でございます！ 今は過ぎてしまったことなどよりも、これからどうするかという建設的なことに議論を戦わせるべきかと」

『けーつきよく原因はお前ですか。それとその諺、間違ってるの判ってるですよ？』

「さあビッチ、これからどうなるのか、説明していただけませんか？」

『お前の変わり身の早さには心の底からビックリ仰天です。とはいえ、私としてもそこは気になるところです』

イカの無機質な瞳に映り込んだ美緒は、説明を始める。

「そも、元々の魔法というのは特定の個人の心、つまりはその人間の持つ世界と別の人間の持つ世界をつなげる魔法の応用でできている」

『一つの人格を世界としてとらえる、でしたか？ 何だか仏教的な世界観です』

「君のその感覚は正しい。魔法というのは純粹な西洋魔法のみならず、東洋呪術やインド哲学、果ては近代科学までも組み込み、今なお進化を続ける膨大な知識の体系を指すわけだ」

「おい小豆！ なんか街が急に明るくなり始めたぞ！」

「本当だ。何だか昼みたいだけど、薄気味悪い赤い光だね。悪の匂いがぶんぶんするよ」

「何だ、やっぱり正義の味方じゃないか？」

「うるさいなあ。何度も言うように、僕は正義の味方なんかじゃない。正義の味方は真弘だ」

「だからそれこそ何回も言ってる通り、俺はやらねえの！ いい加減にしるよ」

「むう……もう、知らないよ。ばか」

いつもの不毛なやり取りだが、今日に限っては小豆の反論も弱い。

ようやく折れてくれたのだと真弘もほっと胸をなでおろす。

チクリと胸を指す、棘のようなものが残っている気がしたが、首を振って誤魔化す。

これでいいのだ、と。

背後の真弘らの会話に空を見上げると、確かに先ほどまでとは比べ物にならないほどに明るく、赤く染まっていた。不気味なことに、赤い輝きの中にあって空の黒さだけは深みを増している。

月が、遠い。

「いよいよピンチなので根本原理は省略するとして、この魔法陣は個人という小さな世界観ではなく、文字通りこの世界を別の世界につなげる魔法陣に変質してしまっている」

「別の世界？ そのようなもの、實在いたしますの？」

「君は見ているはずだよ、メイド君。私が別世界から呼び出したあの生物を」

『うげっ、あんなものがうようよいる世界があるですか？』

「まあ、一つの例えだよ。実際にはどんな世界につながるかは定かではないがね。最悪、この宇宙と対消滅するような世界が口を開けた場合は、問答無用でひでぶだね」

これで説明は終わりとばかりに、ふっとため息をついて背筋を伸ばす。

心なしか体を動かすのが辛そうに見えたが、今はそのことに気を留めている場合ではない。実際は一郎との全力バトルの影響で体はがたがたで、できるならとつとベッドに潜り込んでしまいたいところだが、そういう弱みを見せないのが美緒らしい。

「というわけらしいよ、真弘」

「聞かなきゃよかった」

さすがにこの三人の密談というのは怪しすぎるので、近づいて聞いてみればこのさまだ。もう大抵のことでは驚かないと思っていた真弘だが、これには感動的なほどに驚いた。

「これで説明の手間が省けました。いかがでございます、私たちパ

ラ・ダイスの壮大かつ遠大な悪の計画は？」

一分の隙もない動きで髪をたくしあげ、一瞬前までのコメディタッチなやり取りなどなかったかのように高慢ちきな態度を演じる。この辺りになってようやく、このメイドはキャラ設定を忠実に演じているのだからことが想像できた。が、プロ根性とはまた違っただわりは、真弘だけではなく小豆にも理解出来かねた。

「さて、そんな君たちに言いたいことがある」

「何だよ」

人差し指が下を向いていたのに気がついた時には、ちょっとだけ悪い予感がした。

「扉が開くのはここ、まさに我々の足元だよ」

「先に言えやー！」

やけに空の明るさが増したと思ったが、足元からも光は放たれていた。と言うより、既に足元の光の方が強いぐらいだ。グラウンド全体に空に浮かぶのと同じような魔法陣が描かれて、その描線がネオン管のように光を放っている。

円の中心に一筋の光の線が走り、そこがゆっくりと広がり始める。『あわわ、もう開きかけてるじゃないですか。わっ、わっ、光ってるです』

「お嬢様こちらへ！　そこだと思いつきり股割きを食らってしまいます」

ヒラヒラフリルのメイド服が、開きかけた扉から吹き出す風に揺れる。

妙に重たい、肌に絡みつくような風の不快感に、顔をしかめなくなるほどだ。

それだけではなく、先ほどから全身を襲う静電気のようなビリビリが徐々に強くなっている。明らかにやばい雰囲気、形になってひしひしと感じられた。

「おい天王寺！　魔法陣の発動を何とかする方法ってのはないのかよ？」

美緒を除く三人からの「早く聞け」というプレッシャーを込めた視線に、止むなくという風に真弘が口を開く。

「さすがは正義の味方君だね。その心意気やよし。だが残念。方法はない」

「うわ、聞かなきゃよかった。二回目。それに、俺を正義の味方と言うな。正義の味方は小豆だ」

がつくりと肩が落ちる。やっとのことで自力歩行ができるまでに回復した体が、再び動かなくなる。今度はメンタルの問題で。

隣では小豆が相変わらずの無表情ながら、どこかしょんぼりとした瞳をしている。その変化は微細すぎて、一部の人間を除いては気づいてすらいない。

「一度発動した魔法陣というのは、発射された銃弾や矢のようなものだ」

「つまり、元のエネルギーに還元することはできなくても、その結果を捻じ曲げることとはできる、と」

小豆の言葉に、美緒はゆっくりとうなずいて答える。

『それは、たとえばどのような方法が考えられるですか？』

触手をうにうによと動かすイカの姿は緊迫感のかけらも感じさせないが、声のトーンは意外なほどに真面目だ。

（つてか、こいつは悪の組織のボスじゃねえのか？）

じつと真弘がイカの目を見つめていると、途端にイカはバタバタと両手を振ってそっぽを向き、しゃがみ込んでしまう。真弘としてはとりあえず悪の組織相手にメンチの一つもきっておいただけなのだが、イカの中では全く別の解釈が行われて、全然関係のないモードがオンになっていた。

（み、み、み、み、みつめ、見つめられました。わ、わ、ときどき、ときどきが、とき）

お楽しみモードに突入したイカは、とうとう自分の質問に対する回答を聞くことはなかった。どういう仕組みになっているのか、茹でイカのように赤く色づき、頭のとっぺんから湯気が上がっている。

「ん？ 何だかイカがゆだっているようだが」

「続けてくださいませ。これは時々こうなるのでございます。発作のようなものです」

しれつと言いつち、代わりとばかりに華は真弘に向かって、壮絶なメンチを切り返す。仮面越しにも感じる殺意は、明らかに正義と悪という対立構図だけによるものではない。

恋する乙女は怖いのだ。

「へぶっ！ 何で俺が殴られてんだ。せつかくくっついた腹からまた何か出てきただろ」

「やかましい」

軽いボディブローだが、どれだけ手加減していても小豆のパンチは小豆のパンチだ。真弘は、再びこんにちはした内臓を押し込んで開いた傷口を手で押さえる。内臓の感触があるのは気持ち悪いし、もちろんめちゃくちゃ痛い。

「まあ、色恋の話は私の管轄外なのでさておき、方法は一つ。世界をつなぐ扉を消してしまうことはできない。しかし、その扉が開こうとするのを力ずくで閉じてしまえば、それは世界がつながっていないのと同義だ」

そう説明して、美緒は真弘の腹を指差す。

「ちょうどその、腹の傷が扉、内臓が向こう側の世界という具合だ」

「わかりやすうございますね。きつしよい世界でございます」

「そっちかよ！ っててて」

腹に力を入れると、気を失いそうな痛みが襲ってくる。

「では、そのゲートを閉じる方法を考えなければいけないんだね。策はあるのか？」

小豆はそう言って、美緒の目を見る。互いに満貫寺のびっくり人間、三王と呼ばれるだけあって、視線の持つ力はかなりのものだ。じっと見つめ合っているだけなのに、妙な緊張感がある。

「もちろんだ。というか実にシンプル。手で押さえつけるんだよ」

「わーい、腕力万歳」

魔法陣に異世界への扉というのだから、どんな難しい方法や摩訶不思議な術を使うのかと思えば、最後は腕力勝負。思ってもみなかつただけに、斬新だ。

「ただし」と、美緒の説明には続きがあつた。

「扉が開くのは魔法陣によるものだが、これは扉を開けようとする方向に魔力が働いているということにもなる。つまり、扉を閉じるということは、その魔法的エネルギーに逆らつて行動するということだから、当然力の反発が予想されるわけで」

この辺りで華だけが、何かに思い当たつたように目を細める。それを知つてか知らずか、美緒は華以外の四名に向かつてだけ言うように、付け加えた。

「めちやくちゃ痛いはずだ」

想像はできないまでも、美緒のしかめっ面は真弘を怖気づかせるには十分だつた。

「け、けどそれなら楽勝だよな。こっちには一郎っていう最終兵器もあるわけだし。葉迦杜博士に対魔道用に改造してもらつたんだろ？　だつたら」

首をつけ直し、よれよれと戻つてきた一郎。

「改造は済んだのですが、その……」

「なんか問題でもあるのか？」

「手が、ないのです」

パタパタと、肘から先を上げて振っている。揺れているのは制服の袖口だけだ。

「さきほどの天王寺さんとの壮絶なバトルの末に消滅してしまひまして」

「ふふん、私の魔法の破壊力はさすがだね」

あいた口が塞がらないとはこのことだ。そのまま口から魂やら何やらが全部出て行つてしまひそうな気分になる。そうなれたらどれだけよかったことか。

「まったくもって電波なビッチでございますね。さらに加えて野蛮

とは」

「持てる力を全力で行使してみたいというのは、当然の欲求だろう？」

「いや、欲求に素直すぎだろ。っていうか小豆、お前も頷いてんじやねえ」

とはいうものの、今になって改めて宗司や瞳の忠告が思い出される。

小豆と対等に渡り合うロボット、一郎。そのロボット相手に、問答無用で攻撃魔法を放つ美緒。実際に見たわけではない、想像だけのバトルだが、知れば知るほどにあの忠告が真理であつたことを実感されて仕方がない。

（つつつても、もう手遅れだけどな）

そんな不毛なやり取りの間にも、グラウンドに描かれた魔法陣は輝きを増し、開き始めた扉の隙間から、どんよりとした紫色の霧のようなものまで流れだしている。

そしてついに、

ぎしやあああああああ！

地の底からわき出るような、腹に響く「あの声」まで聞こえた。

「どうやら、あまり歓迎できない世界につながったようだね」

「ようだね、ではございません。まったく、どうなさればここまでダメダメなカードばかりを切れるのか、不思議でなりません。理解不能でございます」

「天才だからね」

「くたばれ、でございます」

『しょーもない喧嘩はいいですよ。とにかく、今はあれを何とかするですよ』

イカの仲裁に、美緒はしぶしぶと言った様子で口をへの字に結び、華は恍惚とした表情で恭しく頭を下げる。

「つつても、何とかできるのか？ うわっ、いよいよやばそうだぞ。何か出てきた」

開き始めたゲートに目をやると、到底この世界のものではありません、不気味な不定形の物体がドロドロとこちらに流れこんでるのが見えた。しかも、徐々に輪郭を形作り始めている。

「どうやら、早くゲートを閉じてしまわないと、本格的にまずいことになりそうだ。一匹二匹ならまだしも、無尽蔵となればこの世界の存亡すら危ぶまれる」

生理的な嫌悪感しかもよさないあの生物が、わんさと押し寄せる。そんな光景が誰しもの頭の中に浮かび、問答無用で全員が首肯する。

「よっし！　いくよ！」

腕まくりした小豆はツインテールを揺らして、ふと真弘を振り返る。

「お、おう！　お、俺も一応は生徒会だからな。ちゃんと正義の味方のバックアップを」

特攻部隊としての腹を決めた真弘だったが、小豆はその言葉を待たなかった。

「行ってくるね」

予想外の一言だが、そこにいつもの自身に満ち溢れた無表情はなかった。

「ありがたいことだが、さすがの会長君でも一人ではきっと厳しいはずだよ。何せ、元の魔法陣の規模があれだ」

「だからって、行かないわけにはいかない。だって僕は……」

その後に続く言葉を、小豆はとうとう口にできなかった。できなかつたのかもしれない。

「お前が……いくのか？」

そんなことまで聞いてしまう。黙っていれば、自分が行かなくても済むのに。

そこにあるのは寂しそうな、少し力なく笑う、へたくそな笑顔だけ。

「がんばってくるから、見ててくれ。これも正義のためだ」

「あ、ああ……」

お前は正義の味方じゃないんじゃない……そんな言葉が、のど元まで出かかったのを、真弘は呑みこんでしまった。

（あれ？ 何だこの感覚。行かなくていいって、嬉しいはずなのに。何だこれ？）

開きかけた門に向かって歩み寄る小豆の背中を、ただ茫然と見送る。

「いいのかい？」

美緒の言葉が真弘の背中に投げかけられるが、振り返る勇氣はなかった。

いいはずが、ない。ないが、

「あいつは、正義の味方だ。だから、あいつが行くのは、別におかしいことじゃ」

ない。そう、今までなら言い切れたはずなのに、何故か言葉にならない。胸の奥に、小さな棘のように引っかかる。

「ご想像の通り、死ぬほど痛いよ」

既に異世界の空気が充満し始めたグラウンドだというのに、いつも通りの仁王立ちで胸を揺らす美緒は、いきなり真弘にそう言った。「な、思考を読むな！」

「まあまあ、あんなわかりやすい顔をしていれば魔法を使わなくてもわかるというものだ。と、それはいいとして、いよいよもってまズいね。私の魔力も先ほどの戦闘でほぼゼロ。眠くて仕方がないよ。パラ・ダイスの組織力も会長君が壊滅させたのであてにはできない。一大事、世界の存亡が会長君一人の双肩にかかっているわけだ」

「えれえサラっと言ったな」

「そんなもんだよ、世界なんて」

本気でそう思ってるからこそ言えるのだが、その姿はまさに魔女の異名そのまんまだ。

「そこで君にこの質問を送ろう」

「なんだよ？」

にやりと口角をつり上げて作られた笑みは、うつかり見てしまうと心を奪われる呪いの笑みのようだった。それほどに妖艶で綺麗なのだが、いつもの迫力はそこにはない。一郎との全力バトルがそれほど壮絶だったということだろう。

「ここに至って、あの会長君の姿を見続けてきた君は本当に、正義なんてないと思うかい？」

返す言葉などない。いや、それはすでに伝えた内容だから、今さらなだけだ。目をそむけ、じわじわと口を開けている光の筋を見やる。

陽炎のように景色は歪み始めていて、その場所はこの世界ではないどこかに姿を変えているようにさえ思われる。どういう仕組みなのか、先ほど足を踏み入れたはずの小豆の姿は見えなくなっている。それでも美緒は続ける。

「たしかにこの世はろくでもない。正しいことが泥をかぶり、踏みにじられ、報われず、笑うのは悪人ばかりだ。善人はいつでも被害者だ。けれど」

大仰に「ふんっ」と鼻を鳴らして、

「それでも信じる者のところにだけ、奇跡は起こるのではないかね？」

その言葉に、真弘の心にひびが入る。

「信じていないものところには、奇跡どころか偶然すら起きないよ。そういうものだ。ましてや自らを偽るものには何をかいわんや、だ。そうは思わないかね」

わざとらしくたっぷりたためを作り、切れ長な目に笑みを浮かべて言う。

「それを知っているからこそ、もやもやと思い悩んでいるのだろう？ 自分にはその資格がない、なんて言い訳を後生大事に抱えているがために」

ずるいと思った。

「けれど、もう随分前から答えは出ているんじゃないのかね。正義

会副会長君？ いや」

わざわざためを作って、ほくそ笑む。本当にずるい。

「正義の味方君」

その瞬間に、真弘は自分の中で何かが壊れたのをはつきりと感じた。それは、自分を守ってきた鎧だったのか、それとも自分をつなぎ止めていた鎖だったのかはわからない。

ただ言えるのは、もう足を止める理由も言い訳も、そこにはなくなっただということだ。

自嘲気味に笑いながら、ゆっくりと歩き出す。そうするしかないから。

「魔女の言葉は人の心をたぶらかすっていうけど、ほんとにそうだよな」

トラウマ以外の理由で、足を進めるている。そのことが真弘の中に、じわじわと事実として込み上げる。もう、逃げてはいない、と。

『正義に、言い訳をしなくてもいい』

小豆に言われたその一言を、ようやく噛み砕き、飲み込むことができた。

「それはそれは。まあ、誰の言葉にも耳を貸せ、口は誰のためにも開くな、だよ」

「お前が言つと説得力あるわ」

自然と笑みがこぼれた。

笑っていられる状況ではないのはわかっている。立っているだけで吐き気と眩暈がするような空気は、扉がやばい世界につながったのをはつきりと告げていた。

それでも真弘は、笑うしかなかった。

「それでは、期待しているよ。正義の味方君」

正義の味方、の部分をやけに強調されたので思いつき中指を突き立ててやったが、涼しい顔でかわされてしまう。

「あそこまで背中を押されないと動けないとは、つくづくヘタレで

ボンクラでございますわね、あれは」

「君の抜き身の刃のような悪意は、ある意味で気持ちがいいね」

「私にとって、お嬢様以外のものは須らくエキストラでございます。利用価値の有無以外には興味がございませんゆえ。で、大丈夫なのでございますか？」

「まあ、あとは会長君しだいだね。彼が会長君の真意に気がつくというのは不可能だ」

「でございますね。激しく同意いたします。よくもまあ、あれだけ素直ではない者同士がくつついたものです」

「素直じゃないから、だろうね」

「修学院小豆は、強すぎました」

「己が正義の味方になってしまえるほどに、心も体も、ね。けれどあれの中身はちゃんと恋する乙女、というわけだ」

「あなた様にこれほど似合わない言葉もございませんね。その事実を彼にお教えに？」

「まさか、そこまで野暮はしないよ。ただちょっと、彼のトラウマをえぐって背中を押してやっただけ。あとは野となれ山となれ、恋なんてそんなもんじゃないのかい？」

「あなたのようなビッチに人の恋を語られるとは思いませんでしたが、まあそれはそれで、あれで大丈夫なのでございますか？」  
仮面をつけたままの華が顎をしゃくった先には、真弘の背中がある。

「さあね、こればかりは私にもわからないよ。文字通り、世界の存亡をかけた一大事だ。むしろ、彼の性能についてはそちらの方が詳しいのでは？」

「申し上げましたとおり、私の興味の範疇にはございませんゆえ」

「運命は最もふさわしい場所へあなたの魂を運ぶ、か」

「それもシェークスピアでございますね。では私からも一つ。憎いやつは殺す、それが人間つてもんだろ。でございましたか？」

「ふっ、ふふ、ふっ」

それまで澄ました顔をしていた美緒が、プルプルと震えている。

「どうなさいました？」

「ふっ、ふは、はっはっはっは、あーっはっは！ 実に君らしい。やはり世界は面白い。できればこの世界、終わらせないように頑張ってもらいたい、正義の味方君には」

ひとしきり大笑して、満足そうに言い切った。

言葉とは裏腹に、さほど世界の存亡に興味がなさそうに見えたが、華はそれを指摘しなかった。

「悪の組織も、世界あつてのものだねでございますからね」

こちらもちろで、さほど興味はなさそうに呟く。

似た者同士の二人が見つめる先で、今まさにそこは、世界の中心になろうとしていた。

## 最後

「くう……凄い抵抗だ。普通に歩くのも一苦勞だよ。まったく、魔法ってのは厄介だね」

数百キロの重りでも括りつけられているかのように足が重い。重力にも異常が生じているようで、一歩進むごとに足が地面にめり込む。しかも、扉が開いている場所に近づけば近づくほどにその歪みは大きくなっているようだ。

「すでに足元もグラウンドじゃなくなっているし、急がなきゃいけないね」

さしもの小豆も、ことの重大さを肌で実感していた。そしてそれは、そのまま小豆の性分に直結する。

「この世界を、終わらせるわけにはいかない。それが正義だ」

揺らぐことのない信念を再確認し、同時に気づいてしまった。

「正義の味方、やらなきゃだね」

零した一言に、小豆らしい力強さはない。あるのは、思春期の少女なら誰しもが持つ年相応の不安と、願いがかなわないことへの寂寥とした気持ち。

憧れていた。昔から。

正義の味方が出てくる番組は、テレビの前で正座して、力いっぱいグーを握って見つめていた。正義は必ず勝利して、必ず世界を守った。無辜の民を守った。なによりも、愛する誰かを守った。

憧れていた。いつでも可愛らしくて一途で、正義の心を内に秘めた、ヒロインに。

守られ、大切にされ、時には助けられる。そんなヒロインがまぶしかった。

なのに自分は可愛い顔の一つも作れないまま、気がつけば正義の味方だ。

「……ばか」

最後の一步を踏み込んで、呟いた。

目の前には、ぐにやぐにやにゆがんだ光の線がはつきりと口を開けている。平らなグラウンドだったはずなのに、空間ごと歪んでいるせいで、直線ではなく口を開けたシャコ貝のようになっていいる。おどろおどろしさもそのままに。

振り返ってみても、先ほどまでは見えていた景色がまるで見えなくなってしまうている。それ程に空間が歪み、しかも向こう側からは禍々しい空気が、煙のように流れ込んでいるのが見える。この場所だけがすでに扉の向こう側になってしまったかのようだ。

「さあ、正義会の力を見せつけなきゃだ。行くぞ、悪の……悪の、これはなんだろう？ まあいいや。うりゃ！」

表情に乏しい顔を少しだけ歪めると、不機嫌そうに見えるがそんなことはない。

口を開けている光の稜線に手を伸ばすと、確かな感触がある。と同時に、焼けた鉄を押しつけられたような痛みが、背筋を突き抜けた。

「くううう痛いなあ、もう。でも、」

たしかに美緒の言葉通り「めちゃくちや」痛い。痛い。

「これなら、いける」

意を決して光のふちに手をかけ、力いっぱい握りこむ。

「うううりやあああああ！ 閉じろ、閉じろ！」

両者を合わせるように力を込めるが、それに反発するように熱と衝撃も倍加してゆく。

それでも小豆は手を離さずに、さらに力を込める。

すでに手首から先の感覚はないに等しいのに、痛みと熱さだけはいやがらせのように脳髓を痺れさせる。何もかもを放り投げて逃げ出したい衝動も何度となく浮かんだが、そのたびに小豆は意志の力だけでそれをねじ伏せた。

それまでゴリゴリと音を立てて開いていた扉も、今は逆に閉じ始めてはいるが、それもカタツムリが這うような速度だ。完全に閉じ

きるとなれば、どれほどの時間がかかるのか考えたくもなかった。  
だから、そのことについても考えられなかったのは、仕方がない  
のかもしれない。

徐々に狭まってゆく扉の隙間に、二つの光がぼんやりと浮かぶ。

ギシャアアアアアアア

「しまっ」

ぬるりと這い出るそれは、以前のオリエンテーションで美緒が呼びだしたものを、三割増しでグロくしたようなデザイン。しかもこちらの世界に定着していないようで、所々がどろっとした液状のままだ。

「成敗！」

蹴り足をのばし、頭と思しき場所を叩き潰す。

両腕を塞がれているおかげで全力とは言い難いが、それでも威力は十分。爆破されたようにトカゲのような頭部がはじけ飛ぶ。しかし、

「まったく、つくづく魔法って厄介だ……もつかない？」

弾けた頭の根元がぐにやぐにやと歪んで盛り上がり始めたかと思うと、向こう側から溢れる煙を吸い込み、再生してしまう。それでも小豆は間髪いれずに、

「でえい！」

頭に、胴体に、腕とも触手ともつかない部分に、再生の暇を与えないように蹴りを叩きこみ続ける。それでも、

「くそお、ダメか。あっち側に繋がってる限り出てくるみたいだな」  
小豆の言葉の通り、体のほとんどが消し飛んだにもかかわらず、驚くほどの速度で再生し、何事もなかったかのように這い出そうとしている。

「ゾンビは真弘一人で十分だよ。化け物はおとなしく」

シャアアアアア！

「！」

背後からの声に振り返ることもできず、自分に覆いかぶさった影

を睨みつける。

当然といえば当然だが、敵は一匹だけなんていうご都合主義な展開もありえない。さらに這い出した一匹が、こちらはすでに輪郭を獲得して立ち上がった。いた。

影はゆつくりと腕を振り上げる。爪らしきシルエツトが、直視する以上の恐怖を煽る。

音がするほどに奥歯を噛みしめるが、どうなるものでもない。多少のダメージはやむなしと腹をくくって両腕に再び力を込め直す。できるのは、一秒でも早く扉を閉じて、しかる後に敵を殲滅することだけ。

「僕の体がもてば、だけど」

振り下ろされた爪が、背中を引き裂くように振り下ろされ、覚悟を決めたその瞬間、

「おらあ！」

やさぐれた声とともに、影が横なぎに吹っ飛んで扉の向こうに消える。

「あつぶね。わりい、待たせぶべらあ！」

門から手を離して振り返る。振り返りざまに小豆の傷だらけの拳が、背後でドヤ顔をしていた真弘の顔面を、えぐりこむように直撃する。

「う、ううん、今来たところ」

「それ言うタイミング違う！ 手え離してる！ 後ろになんか産まれてる！」

真弘の言葉を聴くよりも早く動いた小豆の、強烈な後ろ回し蹴りが、周囲に漂う紫色の空気を巻き上げながらトカゲ頭に炸裂する。生理的な嫌悪感を誘う「ぐちゃ」と「どしゃ」の中間のような音をあげて、トカゲもどきは崩れ落ちる。

「ま、まひろ、来てくれたのか」

上半身はちょっとモジモジしているが、下半身は実に力強く蹴りの慣性を殺しているというアンバランスきわまる姿に、いつも通り

の小豆を感じて真弘はほっとする。

「いや、あきらかに俺だって確認してからぶん殴っただろ。顔面が  
あべしになったぞ」

「情緒を理解しないやつだな。ここはもうちょつと感動の展開がある  
べきだぞ」

「なんだそりゃ？　ってか、ぶん殴つといて感動の展開もねえし。  
そもそもそんな時間、ねえだろ？」

あごをしゃくって、今しがた小豆が手を放した方を見るように促  
すと、そこにはまたじわじわと口を開き始めている扉がある。

しかも、何かを察知したかのように、トカゲもどきがうじゃうじ  
やと湧き始めている。

「たしかにそうだね。じゃあ真弘はこの気色悪いのを始末してくれ。  
その間に僕が」

そう言つて小豆は再び、扉のふちに手をかけようとする。そこを、  
「まあ、なんだ。こういうのはアレだ、その、正義の味方の仕事な  
んだろ？」

真弘は小豆の肩に手をかけ、を引き止める。

「そうだよ、だから正義会の僕が」

「なんつつか、その」

あつけにとられている小豆の前に立ちふさがり、扉のふちに手を  
かける。

「正義の味方も悪くねえ、つつつか。たまには、そういうの信じて  
みても、いいかと思つてよ。ってこれなんだ、めっちゃくつちゃ痛  
てえ！」

手の平の激痛に泣きそうになりながら、真弘は奥歯を食いしばる。  
そして、気づいた。

自分が、笑っていることに。

力いっぱい噛み締めた奥歯とは別の筋肉で、口の端がつりあがつ  
ているのがわかる。

「俺の体なら回復し続けるから、いくらでも扉を閉じ続けられる。」

いくら腕力と根性があっても、手がぼろぼろじゃそのうち限界が来るだろ？ それに」

「真弘」

「壊すほうだろ、前の専売特許。んだけどこれ痛すぎだろ！ ぐあああああ、いって、すげえいてえ。すっげえ痛つてえけど」

次から次へと湧き出ると影に問答無用の蹴りを叩き込んで、向こう側に押し返す小豆。その背中が、この局面では何よりも頼もしい。こんな場面で、まだ世界のピンチだという認識が薄いのも、小豆の存在がそう思わせているのは間違いない。

「こうやって動かねえと、何もおきねえんだよな」

「何をいきなり？ 今はそんなことを言ってる場合じゃ」

這いずるナメクジのようなやつを踏み潰し、そいつを蹴りこむ足をそのままぶん回して回し蹴りにする。一発の蹴りで何匹もの魔人が爆散する様は、百科事典の「一騎当千」の挿絵に使いたくなるほどの戦いぶりだ。なのに、振り返る余裕があるのだから驚くほかない。

「ありがとな」

自分でも、何故こんなタイミングで言ったのかはわからない。

「！」

恥ずかしさのあまりに顔が火照って熱いが、それは小豆も同じだった。

ぐにやぐにやに歪んだ毒々しい世界とは思えない、微妙な甘酸っぱい空気が、二人の間に流れている。と感じたのは小豆だけだったのはもはや説明の必要もないが、このときばかりは真弘もそれに近いものを感じていた

「お、俺は、正しいことだとか報われるだとか、そんなもんアホらしいって思ってた。どうせ世の中はずるくて悪い奴ばっか成功して、まじめな奴なんてバカ見るだけだって」

「うん」

「でも、なんかお前見るとそうでもないのかな、って。ってか……」

…」

恥ずかしさに負けてこのまま言いかけた言葉を飲み込んでしまいたい衝動に駆られたが、期待に満ちた小豆の、まっすぐな瞳に押し切られるようにして口が動いた。

結局、自分はいいつにはかなわないか、と胸中で自嘲しながら。

「俺、正義の味方、だもんな」

いまさらどの口がと思いはしたが、改めて口にしてようやく認められる。そんな自分も悪くないと。自分は、そうありたいのだ、と。

「いや、まだぜんぜん胸張って正義の味方なんていえないけどよ。それでも、自分がどっち向いてたいかに気づいたってかさ、やつとちゃんと目を伏せずになんか向けるようになった、って感じかね？」

その間に休むことなく魔人たちに蹴りを叩き込んでいた小豆の動きが、その瞬間にぴたりと止まり、まっすぐに真弘に向き直る。

小さく握ったこぶしを、真弘の腹にこつりとぶつけ、

「気づくの、遅い」

それだけつぶやいて、そして、小さく微笑んだ。

「わり。でもよ」

わざとらしく笑顔を作って、答える。

「ぎりぎりになってやっと現れるって、正義の味方らしいだろ？」

どの口がそれを言うのかと、あとから思い返して自分で自分をくびり殺してやりたくなるのは確定だったが、今だけは、この場の雰囲気飲まれていたかった。

心地よかった。

自分がどの面を下げてこの場にいればいいのかを、わかっていることが。

「ほんと、ばかだ」

「ああ、ばかだよ。バカじゃなきゃ正義の味方なんてつとまらねえって。というわけで」

真弘は両腕に力をこめ、小豆は振り返って数え切れないほどの魔人と対峙する。

「世界を救うとしますか」

歪んだ世界の中心で、高らかに宣言が響き渡った。

それからの数時間、真弘は何度も気を失いそうになりながら扉をひたすらに閉じ続け、小豆は三秒と同じ場所であらずんではいなかった。時間の感覚もほとんどなくなり、永遠にこうしていなければならぬような錯覚も何度となく覚えたが、それでも逃げ出さなかったのは、そのたびに耳に届いたお互いの声のおかげだ。

「真弘、寝るな！」

「小豆、止まるな！」

そんな声を聞くたびに無理やりにも口の端を吊り上げて笑い、軽口を叩き合った。

真弘の手はとくに限界を超えて、衝撃が骨に直接食い込むような瞬間も少なくはなかったし、小豆の撃退した魔人の数も四桁の舞台を超えていた。

それももう、限界だった。

湧き出る魔人の数も、扉が狭まるのに応じて少なくなつてはいたが、それを迎え撃つのが永久機関ではない限り、劣勢は最初から見えてはいたのだ。

「小豆、このままじゃ埒があかねえ。つつか、押し切られる」

「かといって、手を止めれば」

言いながらも蹴り足で一匹の魔人を粉碎する。足にも限界が来ているのか、しばらく前から、ハンカチをバンデージのように手に巻きつけて両手もつかえている。元は真っ白だったハンカチが、赤く染まっているのが痛々しい。

「こうなったらさ、一か八か最後の奥の手に、出てみるか？」

「何かあるのか？」

じり貧が目に見えているこの状況では、どちらかがやられた時点でゲームオーバーは確定だ。それも、どうやらそう遠くはないらしいことは目に見えている。

だから真弘は、最後の可能性に賭けることを提案した。

一人一人がぎりぎり通れるかどうかというほどに狭まった門の幅を確認し、自分を納得させるように小さくうなづく。

「俺が盾になるから、お前は俺の後ろで扉を閉じる。ここまで閉じてりゃ、二人同時に全力でかかれば、もしかしたら一気に塞ぐことができるかもしれない」

もちろんそれが可能だという確証はない。しかし、そこに賭けるほかは道が残されていない。その程度には、真弘は限界だった。

「でも、それがだめだったらもう」

「だから言っただろ、一か八かだって。でももう、それしかないっばいぞ」

湧きでる異世界の空気は、門の狭まりに反して密度を増しているようにすら感じる。

もういくらも体力がもたないのは、二人とも同じだ。

見つめあうこと一瞬。無言のままであらずいた小豆は、最後の時間稼ぎにと、手近な魔人数匹をまとめて扉の向こう側にぶん投げて葬り去り、真弘に駆け寄る。

背中をぴったりと合わせて、扉のふちに手をかける。

「くっ」

「大丈夫か？」

「さすがに痛いけど、でも、うん。大丈夫。いくよ」

ふっ、と真弘の手にかかる圧力が軽くなった気がした。どうやら物理的な重さと同じ要領らしく、二人で持てば一人当たりの付加は半減するようだ。となれば、

「これが失敗したら、世界はどうなるんだろうな？」

「そんなことを考えないのが正義の味方だよ、真弘」

「だな。んじゃ、いくぞ！ せえええええのお！」

「どっせええええい！」

扉の淵に手ともひれとも区別のつかない部分をかけて這い出そうとする魔人どもを押しつぶすように、渾身の力をこめる。ぎりぎり

と指に食い込む光の線に、悲鳴を上げたくなるのも飲み込んで、真弘は一心不乱に腕だけに意識を集中する。

ぎしぎしと、限界を超えて搾り出される力に体中が悲鳴を上げ、激痛が全身をくまなく焼く。視界はもうぼんやりとかすんでほとんど見えないが、その中で向かってくる、かろうじてこちらに這い出した魔人の異様に、あえてほくそ笑んでやる。

「終わりだ、ばーか」

それまでわずかに空気が振動する程度だった音が、地響きのように体の芯に響き渡り、目に見えて扉が閉じてゆく。ゴリゴリという、重い鉄の扉を閉じるような音に魔人どもが悲痛な叫び声をあげ始める。

「まひろおー！」

「わかつてる。これでだめなら、もう、何も残ってねえからなあああああ！」

必死の形相で迫る魔人に目もくれず、真弘は最後の力を振り絞って全体重を扉にかける。というのも、もう左腕は使い物にならなくなっていて、回復の速度も追いつかなくなっている。

絡みついた魔人どもの触手やら爪やらが、真弘の腕と言わず顔といわずをずたずたに引き裂いてゆく。触れているだけで鳥肌もの不快さだというのに、激痛のおまけつきときている。

かろうじて残った右手も、もういくらも保ちそうにない。

叩きつけられた爪に胸が引き裂かれ、頬にはナイフで切りつけたような深い傷が走るが、それすらも意識の外に追い出す。

「こんのやろおおおお！ 本気でやれば、なるようになるんだああー！」

意味がめちやくちやでも、そう叫ばずにはいらなかった。

あの日の佳苗を肯定する。それこそが、自分の正義なのだと刻み付けるように。

そして、鳴り響くチャイム。

始業を、終業を、下校時刻を告げるチャイムが、グラウンドの四

隅に設置されたスピーカーから高らかに鳴り響き、その場所が日常であることを告げた。

一瞬前までは鼓膜がバカになるほどに震えていた空気も、うそのように静まり返っている。わずかばかり残されたい紫色の霧も、風に吹き散らされている。

「やった、か？」

背を向けたままの小豆の声に、真弘はこたえることができなかった。

ただ、ぼろぼろになった手のひらだけが、先ほどまでの極限状態を教えている。それも、視界がぼやけすぎてちゃんとは見えないほどだ。

「お疲れ様。扉は、閉じたよ。それに、魔法陣の効果も消滅した」  
静まり返ったグラウンドに、チャイムの余韻だけが残されている。歪んでいた空間もどうやら元通りのようで、美緒の声が涼やかに耳を打った。

距離にしてほんの数十メートルほどしか離れていなかったのだという事実が、全く信じられない。自分たちは本当に、異世界にいたのだと、改めて実感させられる、

「んだが、一つ残念なお知らせだ」

「何だよ、この期に及んで」

もう声を出す体力も残されていない。本当の本当に限界だった。

「会長君、『やったか？』はやっていないというフラグを、見事に立ててくれたね」

宣言に腰砕けになったところに、美緒がほんと真弘の肩を叩く。

「いや、現実の意外さというのは時として残酷なほどだね。さすがにこれは、想定外だ」

「うそだろ？」

美緒の言葉に嫌な予感しかしない真弘は、いまだぼやけたままの視界で周囲を必死になって探る。と、ぼやけた景色の中でなにやら黒いものが盛り上がってうごめいているのがかるうじて確認できた。

「うそであってくれば良いのだが、残念なことに事実でね。さあどうしたものか」

目を凝らしてじっと見つめていると、ゆっくりとではあるがその輪郭がはつきりと見え始める。どうやらぼやけていたのは自分の視界ではなく、そいつらの輪郭の方だったのだと気づいた時には、泣きたくなった。

「どうやら帰り損ねたやつらがやけくそになって、合体し始めたようだ。さすがにアレは、私も引くね」

「でかいね。天王寺、お前のほうで何とかならないのか？」

せっかくのキュロットパンツもブラウスも、ぼろぼろになって汚れてしまった小豆だが、視線だけはいつもどおり相手を射抜く勢いだ。とはいえ、さすがに疲労感隠せないらしい。真弘に背中を預けてへたり込んだまま、首の動きだけ美緒を促す。

「さすがに無理だね、自分で召喚したわけではないからね。それに、もしそうだとしてもあそこまで変質されてしまつては、対応する魔法陣が描けない。魔力もカラッポだ」

「使えないな」

「反論する気にはならないが、会長君がなんと吼えようと、あれの存在は事実だ」

「万事休す、かよ」

真弘のその一言に、ほんの数瞬前まで安堵の空気に満ちていたグラウンドが、悲痛な沈黙の底に沈み込む。その間にも、どろどろのスライム状だった魔人やら異世界の霧やは一つの生き物として形を成してゆき、とうとう見上げるほどの位置に目や口らしきものができてしまった。

「さすがにあのサイズでは、私どもにも対抗しうるものはございませぬね。自衛隊でも呼びますか？」

「それこそ学校が焦土と化してしまう。そんなことは断じてこの生徒会長が許さないよ」

『しかし、ほかに方法は』

「あーだめだ。あいつ完璧にこつちを敵として認識したぞ。思いきり迫ってきとる」

「こまったものですね。僕も手とエネルギーがあればお手伝いぐらいはできたのですが」

口々に言いながらも、全員の視線が合体した大型の魔人に集中し、そのサイズと、生理的嫌悪感を全力で逆なでするデザインに辟易としたところで、真弘が立ち上がる。

「俺がこの場合は食い止めるから、とりあえずお前らは逃げて」

「そんな、真弘の体はもうぼろぼろじゃないか。それだったら僕が」  
「すぐりつくにも体力は残っていない。背中をずり落ちる小豆の体重を感じて、真弘は最後の気力を振り絞る。胸の中に感じる熱量はいつもとは比べ物にならないほど弱まっているが、それでもエネルギーを供給しているのだから大したものだ。」

「まだ、もうちょっとならいける。俺、不死身だしな」

胸に輝くのは、手術で埋め込まれた真弘の新しい心臓。キングストーンの赤い光。

それがなんなのかは知らされないままだが、この際どうでもいい。とにかく重要なのは、体が動いて、正義の味方ができることだ。

「ここが正義の味方の正念場だ！ さあ、燃えろ、正体不明の俺の命の輝き！」

「まひ「くらえい！ この天才の力、思い知れい！」

きめきめでかっこをつけて、精一杯の強がりで微笑んだ真弘の表情が凍りつく。

夜のグラウンドに、間の抜けただみ声がこだましたかと思うと、真昼のような眩さで閃光がほとばしり、光の本流が巨大な魔人を飲み込んだ。

全員が注目していただけに、全員がもれなく度肝を抜かれてあっけに取られる。

その間にも光の帯は魔人に向けて放たれ続け、ついにはその姿が蒸発するようにかき消されてしまう。

青天の霹靂、どころの騒ぎではない。その場にいた全員が漏れなく、今度こそ本当に時間を止められて、アホ丸出しであんぐりと口を開けていた。

ただただ想像のはるか斜め上をいった現実には打ちのめされて。

「どうくはははははは、どーだ恐れ入ったか諸君！　これが天才の実力というものだ」

けたたましい笑い声の出所に目を向けると、案の定というかなぜかというか、ぼろぼろの白衣を着たおっさんが、何やら物騒な機器を担いで仁王立ちをしていた。

「おや、お父さんではないですか」

「ぬははは、どーだ一号よ。私の開発した対魔道用ビーム兵器、『科学君』は？」

「は？」

全く事態を飲み込めない真弘達だが、葉迦杜博士がそんな事情を汲み取るはずはない。

「いやなに、一号の対魔道用ボディのついでに製作したのだが、実験実験を済ませていないことを思い出してね。一号を的にしに来たらなんともすばらしい実験台がいるではないか。というわけで、実験は大成功だ。うむつとあちっ！」

いきなり叫んで、肩に担いでいた、往年のSF映画にでも出てきそうなごてごてとした装飾つきの砲身を放り出す。

ぼうんっ！

という間抜けな爆発音がして、銃身から煙が上がる。

「大気圏下では放熱に問題があるか。やはり一号への内蔵を見送ったのは正解だったか」

ぶつぶつ言いながら、便所スリッパのようなサンダルをずるずると鳴らして歩き出す。

遠ざかる白衣の背中を見送ったところで、ようやく魂が現実に戻ってきた面々が、顔を見合わせる。

「えー、っと……解決、ってことで、いいんだよね？」

「と、思っただけど」

互いの視線を避けるように視線が定まらない。真弘はともかく、小豆のこんな姿は珍しくて新鮮だ。もちろん小豆の方は、突然の終焉に対する戸惑いだけのせいではないが。

そのことに気づかない真弘と、それを傍で眺めて苦笑する美緒。そろそろ定番になり始めた光景だが、このときばかりは美緒も茶化す気にはならなかった。

「結果的に危機は去ったわけだし、良いのではないか？」

今度こそ本当にエンブテイだ。立ち上がりかけていた真弘はひざを折って崩れ落ち、その背中にはべったりと小豆がもたれかかる。互いに体重を預けあっていると、真弘の耳にはスースーという細い寝息が聞こえてくる。

自分の肩に頭を預けた小豆の寝顔に、ようやく終わりを実感する。

「ふわ……俺も、も、ダメ……だ」

ゆっくりと、溶け出すように意識が混濁してゆく。

『一時はどうなることかと思ったですが、一安心です』

イカの中では安堵とも落胆ともつかないため息が充満する。それを察したように、

「これで私達の構図はしつかり出来上がったわけでございます。ここからがスタートでございますよ、お嬢様」

いつになくやわらかい声音は、恋人や家族を思いやるような暖かさで満ちている。

『お前は、本当に根性の悪い奴です。お前がそんなこと言えば、素直に受け止められるわけじゃないです』

最後のほうで涙声になっているのは、気づかないふりをした。

「恐縮でございます」

『うむ、よきにはからえええ、です』

これはこれで、決意を新たにした、ということなのだろう。

夜明けまではまだ少しばかりの時間を残した、夜の臭いが春の風に乗って流れ込む。

真弘は、桜の花びらの夢を見た気がした。

## 最強少年

「で、いまさら何のようだね？」

昼休みの中庭は活気に溢れている。

部活にいそむ連中、グループで弁当を広げる連中、恋人同士で語らいあつて周囲からの殺意を一身に浴びる奴。そのどれもが笑い声に溢れている。

その一角を占拠した明らかに場違いな集団は、満貫寺名物お昼のお茶会だ。

ティーセットにパラソル、真っ白に統一された椅子やテーブルは、どれか一つだけでも高級車が買えるほどの代物だ。ただ、そんな高級品があることよりも、それを取り巻く数名のメイドが作り出す空気が、何よりも違和感の正体だ。

「何の用とは、またご挨拶でございますね。今回の顛末、ほぼ全てあなたが原因でございます。説明を要求いたしております、びつち」

椅子に腰掛けた紅葉の姿は、貴族のためにしつらられた人形のように、制服などではなくドレスを着せたくなるほどだ。その隣に仕えるメイド、華がゴスロリメイド服を揺らして、静かな口調で毒を吐く。

「設計図を盗み出した人間のセリフではないと思うけど、確かに私の責任でもあるね」

「天王寺美緒、お前は自分の魔法実験のために、不必要に巨大な魔法陣を作らせたというわけですね。なんともお前らしい話です」

「良くわかつていないか。実際、一人の男の心動かすのなら置一枚分もあれば十分に効果が出るはずだ。とはいえ、お互い様だよ。ゼロサムゲーム、もしくはウィンウィンの関係という奴だ。イレギュラーはあれどね」

「本当に喰えないビッチでございますね」

「お互い様だよ。メイド君、君にとってこの結果は、果たして失敗だったのかな？」

「つくづくそビッチめ、でございます」

互いに涼しい顔をしてすさまじい毒の応酬。遠めに見れば、美緒の改造制服が浮いている程度で、優雅なお茶会の光景でしかない。とてもこんな会話は想像もできない。

「まさか、魔法陣の設計図もあえて盗ませた、と言わないですよね？」

くすりとほくそ笑むだけで、美緒はそれには回答しなかった。代わりとばかりに、手近なマカロンを一つ摘み上げる。

「まあ何にせよ」

マカロンを口に放り込み、雑な手つきでお茶を飲み干して美緒は立ち上がる。

「世界はとかく面白い。君も色んな意味で敵ができてよかったじゃないか。悪の首領君」

「ちっ、全く食えない女です。やはりこの女を頼ったのが間違いだった気がするです」

「同感でございます」

改造制服のスリットから太ももを覗かせ、去り際にモデルばりのポーズで振り返った美緒は、底意地悪く口の端を吊り上げて笑う。

「魔法で恋を実らせるのではなく、次は恋の魔法を使ってみたまえ」  
紛れもなく、魔女の笑みだ。

白を基調とした室内を、風が一巡りする。

天気の良い日は窓を開けて空を見せるのだと看護婦が言っていたが、確かに今日の日差しは心地よい。頬に感じる暖かさに、とうとうとしたくなるほどだ。

「やっつと、お前んとこに顔出せた……遅くなって、ごめん」

花瓶の水を替え、自分の持ってきた花に入れ替えながら真弘はしゃべり始めた。

「報告が、あつてよ」

まだ魔法陣の発動事件から半日だというのに、体はとんでもない回復力を見せ、怪我らしい怪我はほとんど残っていない。あるのは筋肉痛のような鈍痛だが、これも時間の問題に思えた。

入院したばかりの時に一度来ただけだったが、ベッドに横になった姿は、そのときと何ら変わらない。時間が止まっていると言われるのも納得できるほどだ。

酒井佳苗の頬は、朱を帯びて艶やかだ。あの春の日と、何も変わらない。

「俺のトラウマ、なんか認めてくれる変な奴がいてよ。なんでも、正義の顕れなんだとさ。心の奥底に正義があるから、それが噴き出すんだとよ。意味わかんねえよな。俺はただ、目の前のトラウマから逃げ出したいだけなのにな」

返事はないが、真弘はやさしい眼で閉じた瞼を見つめて、続ける。「そのせいってわけでもないんだけど、俺、正義の味方やることになったみたいだ。って、なれるかどうかわかんないけどな」

カーテンがゆれるたびに、ゆっくりとした時間が室内に流れ込む。人口呼吸器や点滴と、それにつながる各種モニターが、生きていることを教えてくれる。と同時に、それがなければ生きられないことも。

それでも真弘は話しかけた。

「一生懸命やってれば、なるようになるんだろ。ま、どうなるかわかんねえし、とんでもないやつらばっかだから、なるようにならないほうが幸せかもだけど」

春の日差しを浴びた頬に、一瞬だけ鳥の影が横切る。

こうしていると、今にも目を覚まして軽口を叩きそうなだけに、胸が押しつぶされそうになって、言葉が詰まる。

一度だけ深呼吸をして、続ける。

「やってみるわ。せつかくお前が言ってた正義の味方なわけだしなだから」

結局この一言が良かったただけなのに、相変わらず自分は回りくどくてダメだと苦笑する。美緒や小豆に見られた日にはからかわれるのは目に見えているが、それでも良いだろう。そうしたらまたその話を、ここでしてやろうと思う。

「お前も、奇跡つてのを、信じてみるよ」

そして、少しだけ躊躇ってそっぽを向きながら付け足す。

「俺は、信じることにしたからよ」

病室から出てきた真弘を迎えたのは、腕組みをして眉間にしわを寄せたツインテール。つむじの辺りから魔力に似たオーラがこぼれている気がする。

「ふんっ、正義の見回りを中断してまで病院に入ったと思えば、ただの見舞いか。しかも女の」

何が気に食わないのか、一緒に部屋に入るように促したのに小豆は断って廊下で待っていた。

「しゃあねえだろ、友達の見舞いぐらい行かせろよな」

「まあ、正義の味方としてはこういう活動も必要だろう、ってことにしておくよ」

「はいはいありがとよ。んで、今日は何すんだよ？」

「パラ・ダイスの連中が自動販売機を返却して回るようなんだが、それを見回る」

「え？ かえすの？ 律儀な悪の秘密結社もあつたもんだな」

あの直後にイカが語ったところによると、今回の失敗をもって計画は終了。盗んだ自動販売機はすべて返却し、町を元通りにする、というのだ。

「まあ、あんなこと二度とないように戻してもらえるのは助かるが、何か間抜けだよな」

『悪の秘密結社』というよりも、町の迷惑集団に近いよな、と思いつつ廊下を歩く。

「何を言ってるんだ？ これがもしかしたら、次の計画の初手にな

っているかもしれないだろう?」

「それは考えすぎだろ?」

「いや、そんなことはない。だから僕達は町を見回らなきゃ行けないんだ」

前を歩くツインテールは、今朝方の疲労感が嘘のように活力がみなぎって見える。いったいどこにコンセントがついているのかと探したくなるほどだ。

「じゃあさ、二人で手分けしたほうが」

そして、真弘はきつちり地雷を踏む。

「今、何か言った?」

「え? いや、町を回るだけなら二人で回ったほうが効率がいいというか」

ものすごい速さで振り返ったので、ツインテールが鞭のようにしなって円を描く。

「だめだ、一緒に回るんだ!」

「なんでだよ、効率悪いだろ?」

「そ、それは、その何でって……」

「ごによごによと歯切れの悪い小豆だが、真弘はそんなことを気にも留めずにしたり顔で続ける。調子に乗るとろくなことがないという例だ。少しは学習すればいいものを。」

「だろ? ここは手分けしてだな、さつさとパトロールをだな」

「……たい」

「んあ? なんていつぶるあ!」

うつかり近づいたところに、完璧なカウンターブローが突き刺さる。まだ完全には修復しきれていないらしい内臓が悲鳴を上げ、体かくの字に折れる。

足が浮くほどの衝撃に、視界がかすんで周りが見えなくなる。

ちよつと内臓もこぼれた。

涙ではない。断じて泣いてなどいない、そう自分に言い聞かせるが、声は出せない。

「いいね、反論はないね？ さあ、僕と二人で平和を守るんだ。なんせ」

声も出せず、苦悶の表情を浮かべる真弘の襟首をひっ捕まえて、小豆は意気揚々と病院を後にする。真弘を引き摺りながら。

「真弘が、正義の味方なんだからね」

涙でにじんだ春の日差しが、今日も世界は平和であることを伝えていくようだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7971x/>

---

正義の味方と秘密結社ときどき魔法少女

2011年11月18日03時20分発行